

μ'sのメンバーが
全員ヤンデレだったな
ら

コルセット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイドル×ヤンデレって最高じゃない？ってことから生まれた完全な見切り発車。
全12話予定。もしかしたら伸びるかも。

目次

誕生日記念

外伝 西木野 真姫の場合

誕生日記念 東條 希

本編

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

第七話

第八話

72

59

53

44

35

26

20

14

7

1

第九話

第十話

第十一話

最後のお話

外伝、短編集

μ, s から見たお話

場合

μ, s から見たお話

合

μ, s から見たお話。

場合。

μ, s から見たお話

μ, s から見たお話

79

89

100

109

穂乃果の

131

南 ことりの場

140

絢瀬 絵里の

159

東條 希の場合

178

μ s からの見たお話 西木野 真姫の

場合

僕から見た、安らかな休日

—

201

僕と、変わってしまう世界。

—

226

191

誕生日記念

外伝 西木野 真姫の場合

僕から見た”西木野 真姫”と言う人物は、プライドが高い故にどこか触れ合う事を苦手としている、からかいがいのある可愛い女の子だった。

そのせいか、からかうたびに新鮮な姿を見せてくれる。僕はとてもその姿が好きだった。

あくまで、恋愛感情としてではなく友達としてだが。彼女の表情は、見てて飽きない。今日も同じようにからかおう。どんなふうにからかおうか。

頭の中で浮かべる表情にくすりと笑みがこぼれる。そう思い部室のドアを開ける。

中には真姫ちゃんが一人座っていた。本をゆっくりと捲る。

まるで、一枚の絵のようだった。

「あれ、真姫ちゃん一人？」

「そうよ、凜とかよちんは先生の手伝いに呼ばれていったわ」

目線を合わさずに言う。ふうんとうなずくと椅子に座る。

鞆を置き、だらりと机に上半身を預ける。ふと見ると、真姫ちゃんが部室にある備え

付けのお茶を入れてくれた。

「あ、ごめんね」

「いいのよ、気にしないで。私がしたいだけなんだから」

何だか今日の真姫ちゃんはやさしい。いつもならそんな事言わないのに。

一口飲んで、気分を落ち着ける。それを見ていた真姫ちゃんは自分の座っていた椅子に座り、読書を再開する。

皆が来るまで暇になりそうだし、とりあえず話をしよう。

「ねえ、真姫ちゃん。話しようよー」

「え、何だよ」

「いいじゃん。暇なんだし」

「しようがないわねえ」

そうやって読書していた手をやめる。視線をこちらに向ける。

さて、何の話をしようか。そう言えば真姫ちゃんは知ってるだろうか。

「真姫ちゃん。そういえばさあ、僕の上着を知らない？ 昨日ここに来た時、置いたまま忘れちゃったんだよね」

「え、し、知らないわよ？」

「そっかあ。うーんどこ行ったんだろ」

はあと息を吐く。学校の上着だから代えはある物の、あつたほうが良い。

一応皆に聞いてみようと思つていたのだ。でも先に入つていた真姫ちゃんが無いと言うのだから無いのだろう。

無くしたと思つて諦めるしかないか。ふと、目線を上げる。真姫ちゃんの顔が近い。

「うお、近いよ真姫ちゃん。びつくりした」

「ちよ、ちよつと！急に起きないでよ！」

驚いたように遠ざかる。そんなに驚かなくても。

あ、今からかえるチャンスだ。少し息を吸う。

「何々、真姫ちゃん。僕にキスでもしようとしたのー？」

「そ、そんなわけないじゃない！」

「顔赤いよ？可愛いね」

さらに赤くなる。うーむ。やっぱり可愛いなあ。

さてどうやって、ここからからかおうか。今までは他の人がいて大体止められたけど、まだ行けそうだ。

体を起こして真姫ちゃんを見る。

「真姫ちゃん。こつち向いてよ」

「嫌よ。もう、またからかうじゃない」

「からかわないよ」

こつち向いてない間に先程の近さまで寄る。真姫ちゃんがさつきやった様にしよう。笑みがこぼれる。ふと真姫ちゃんの顔を見ると、笑っていた。

とても綺麗な笑みだった。危険を感じ時には、もう遅かった。

「んっ……」

「え」

キスを、された。とても優しく、壊れ物を扱うように。

驚きすぎて言葉が出ない。こんな事誰が予想できただろうか。

更にキスは激しくなり、僕の口の中に舌が侵入してくる。まるで、蛇のように舌を絡められる。

抵抗したくても、できない。体が痺れたように動かなくなっていた。

真姫ちゃんも口をゆつくりと離すと、銀色の絹糸の様に唾液がつながっていた。

肩を押されて、椅子から転げ落ち尻餅をつく。ゆつくりと真姫ちゃんがこちらに向かってくる。

「どう、し、て？」

言葉がうまく言えない。何か飲まされたのだろうか。

入れてくれたお茶に何か入っていたのだろう。

「湊がいけないのよ。私の気持ちも知らずにするんだから」

白い手が、艶めかしく僕の頬を撫でる。そのまま僕にしな垂れる。

手が僕の鎖骨から腹部、脚の付け根をゆっくりとなでる。

真姫ちゃんが僕のうなじに顔を近づける。匂いがかがれていた。

「ああ、いい匂い。やっぱり本物じゃなきゃダメね」

「それって、もしかして」

「そうよ、湊の上着を取ったのは私。どう？びっくりしたでしょ」

それは、もう。そう答えることさえ億劫だった。

でも真姫ちゃんは止まることも知らず。僕の頬を舐めて、そのまま首筋にキスマークを付ける。

何度も、何度も。証を付けるように。その証をみて、微笑む。

「私と湊の証。繋がってる証拠よ」

立ち上がり、真姫ちゃんが自分の鞆を探る。じやらりと音がする。中から出てきたのは手錠だった。

部室の鍵を閉めて、窓にはカーテンで覆う。手錠を僕の手につけると、もう片方を自分につける。

カギは見当たらない。ゆっくりと顔を見ると、恍惚の笑みを浮かべていた。

「協定だなんてもう知らない。私はあなたさえいたらいいのよ……い！」
押し倒され、キスをされる。口の中で唾液の交換が行われる。そのまま体を抱きしめられる。

柔らかい感覚がする。耳元で囁かれる。

「ずっと、あなたを離さない」

逃げられそうになってなかった。

誕生日記念 東條 希

俺が事を自覚した時には、そんなことを言えることもできなくて。今の関係を壊すことが怖かったんだと思う。

だけでも伝えることが出来なくて、張り裂けそうな痛みが襲ってきたのを覚えていく。

でもそんな痛みがあつたところで、俺は今の態度も変えることなんてできずにいつもの様に逃げるんだろう。

きつと、今も。これからも。

いつもの帰り道。いつもの風景。いつも通りじゃない心臓。いつもならこんなこと思わないのに。一年の中で今日だけがいつも通りでいられない日だ。

六月九日。あいつの、誕生日。何も知らない、あいつの。

元々知り合っただのは神社で会ったことが原因で。昔からあつた神社にいつの間にかいたあいつが気になっていたら、話しかけられたのが最初だった、筈だ。

学年が同じで、よくここに走りに来るからそれで仲良くなつていつて。色々知り合つてからもうすぐ三年だ。

三年もたてば、お互いの立場と言うものが確立していくもので。いつもからかいあつてる仲になつてしまっている。

そんなことを考えていると、階段が見えて。いつもの様に、悟られないように彼女に会いに行く。

登りきると、いつもの様に掃除している姿が見えた。少し笑みが漏れてしまう。

近づいて、少し大きく声をかけた。

「よう、希。いつも通りだな」

「うわ、びっくりしたなあ。もう」

驚いている。よし、いつも通りなはず。このまま会話して、プレゼント渡して帰ろう。
「はは、悪い悪い。てか足音とかスピリチュアルパワーで気付くこととかできるんじゃない？」

「気付く訳、ないやん。うちのスピリチュアルパワーはそんなもんちやうで？」

「おお、こりや失敬。スピリチュアルパワーゆうからすごいもんやおもうやん？」

「もー！またうちの真似して！」

「ははは、ごめんごめん」

「まったく。もうちよつと可愛くやってや！」

「え、可愛ければオツケーなんだ、それ」

やり取りを始める。自然とこの関係が一番なのか、落ち着いてしまう自分が嫌だ。ただ怖がつてるだけの自分に嫌気がさす。それから、いくつか近況話をして。

いつの間にか自分のカバンを強く握っていた。

それでも表面上は象っていた。

「じゃあ、最近は練習に打ち込む感じかあ」

「そうやね。まあそれも大事やし……って、湊。何をそんな大事そうに鞆を持ってるん？」

「へ？」

どきりとする。どう反応していいか、分からなくなつて。でも聞かれたからには出さなくてははいけない。

鞆を開け、中からプレゼントを取り出す。中身は、最近雑貨屋で見つけた少しアンティークな小物の詰め合わせだ。

「あー、えつと。これ、プレゼント。今日、誕生日だろ。んで、これ」

「わあ！ありがとうな！なあ、開けてもええかな？」

「お、おう。いいぞ」

包装紙を丁寧にあげ、中を見ると顔を輝かせる。よかった。どうやら受けは良かったらしい。

「これ、めっちゃ可愛いやん！」

「そ、そうか。ならよかったよ」

一つ一つ喜んでくれている。俺の心は安堵を感じていた。同時に臆病でもあった。

それより先が何も言えない。喜ぶ一つ一つの動作に赤いタンバリンを打たれているのに。

好きだという言葉が伝えられない。否定される未来が怖いからだ。

だから、からかいあうことでこの関係が続けばなんて思ってたんだ。

でも、そんな事思えない日が今日来るなんて、思ってもなかった。

「ああ、でもこれで湊から誕生日祝ってもらえるの最後かもしれへんなあ」

「え？」

「ほら、うちらもう三年やん？受験して、遠くの大学とか行ちやうやろうし」

「あ……」

そうだった。それをしたと同時にどうしていいかわからなくなりそうだった。

今考えていることが真っ白になってしまっていた。まるで、絵の具でぐちゃぐちゃに

されたかのように。

頭の中が動かない。でも一つだけわかってしまう。このままではダメなんだろう。

こんな関係続くなんて甘いことはなくて。だから、だからこそ。

初めて、信じてもない神様に祈った。

「っ、あのさー希ー！」

「ん？どうかしたん？」

頼む。頼むよ。俺。ここしかないんだ。これを逃したらチャンスなんかないんだ。

だから、情けないけど。少しの勇気を絞ってくれ。

「俺、さ。ずっと思ってたんだ。多分。前から言いたかったんだけど。言葉が出なくて、その」

口が回らない。頭が困惑する。口が渴いてしょうがない。すべてがかみ合わない。でも仕方ないんだ。初めてなんだ。こんなこと。不審に思い始めている彼女に、もう一度口を開く。

「多分、なんだけど。ずっと逃げてたんだ。俺はいつも言葉で伝えられなくて、臆病で。怖くて否定されるのを嫌がってたんだ」

そうだ。そうなんだ。言葉で伝えられなくて。否定されるのが怖くて。

「でもさつき、このままでいられないって聞いたとき、俺は思ったんだ。強く。これ以外考えられなかったんだ」

ようやく、言える。怖いけど、仕方ない。そういう日があったっていいじゃないか。そう思ってたなきゃ、やってられないんだ。だから、言葉にしよう。

「っ、好きなんだ。誰よりも。希のことが」

言ってしまった。怖くて、顔を見れない。いつの間にか、目をつぶっていて。

無音が場を支配する。それが何時間もたっている気がして。

恐る恐る、目を開けてみる。希の顔を見ると。

大粒の涙が流れていた。

それから、すぐに返答が飛んでくる。

「つ、嬉しいんよ。ずっと、うちも思ってたから。同じこと、思ってるなんて。信じられなくて」

「あ……」

抱き付かれる。初めて感じるぬくもりにただ受け止めることしかできなくて。今存在してるのかどうかさえも分からなくなるほどに。

「うち、駄目や。涙が止まらんから、顔見れないやん」

顔をうずめられる。ようやく気付く。思いは届いたんだと。

そのまま、空を見た。オレンジジュースとミルクを混ぜたような色をしていた。数分経ってから、両腕からゆっくりと離れ。目元を赤くしながら、俺に言う。

「来年も誕生日、祝ってくれる？」

俺には、一っしか答えはなかった。

本編

第一話

うららかな春の日が窓から射しこみ、朝の空気が体を覚醒させる。まだ眠気眼だった僕は、いつものようにリビングの雨戸を開けた。

さわやかな空気と共に、聞き覚えのある甘い声が傍から聞こえる。体がこそばゆくて震えた。

少しため息をつくとき、そちらに顔を向ける。綺麗な笑みと共に目線が三つも刺さる。これもいつも通りであった。

「何か用？ことりねえ、海未ねえ、穂乃果ねえ」

「え、用がなくちゃ来ちゃいけない？」

少し不思議そうに首をかしげる穂乃果ねえ。後ろで呆れたようにしている海未ねえとは真逆に、綺麗な、陰りも見せない笑みを浮かべることりねえ。

いつも通りの光景だった。と言っても半年ほど前に一人暮らしを始めてからだ。

「いや、別にそう言う訳じゃ無いんだけど。それにしても毎朝来なくても。学校から遠いでしょうに」

「だって、心配なんでもん。みーくん、ちゃんと起きれるかなって」

「そうですよ、湊。一人暮らしを始めたからには、自堕落な生活など送ってはいけません」

「そうだよ！穂乃果、とーつても心配なんだから！」

「そつくりそのままお返しします」

「むー！最近はこちらと起きてるもん！」

そう言えば、そうかもしれない。数か月前まで、寝坊が多かったのに。ここ最近しなくなつたみたいで。

穂乃果ねえの母親から涙ながらにお礼が来たのだが、いったい何だったんだらうか。寒気がするのは、気のせいであつてほしい。

苦笑すると共に、時計を見る。そろそろ出なくてはいけない時間だ。

「ちよつと待つてて。着替えてくるよ。お茶でも飲む？」

「うーん。いや、大丈夫だよ！外で待つとくね！」

「海未ねえとことりねえは？」

「いえ、大丈夫です」

「ことりも大丈夫だよ！」

そうなる、速く着替えなくてはいけない。あまり女の子を待たせるのは良くはな

い。

すぐに自分の部屋に行くと、昨日のうちに用意してあつた制服に着替える。

机の上に置いてあつた鞆を持ち、扉を開けた。

その瞬間。コルク色の髪が目の前でさらりと流れ。体に少し衝撃が走る。とつさに抱き留めてしまう。それが、ことりねえである事を認識するのに数秒を必要とした。

「つと、ことりねえ?」

両手でことりねえの両肩を軽く押し、立たせる。顔を見ると、何か言いたげだった。

「ね、みーくん。ちよつとお部屋入つてもいい?」

「え?」

「この間ね、遊びに来た時に忘れ物しちゃつたの」

と言つて困つたように笑う。両指をクロスさせるかのように合わせる。

果たして、忘れ物なんてあつただろうか。まあ、すぐに見つかるだろう。広くもない部屋であるし。

「いいよ。すぐに見つかる?手伝おうか?」

「ううん。大丈夫。ヘアゴムだし、すぐに見つかるよ!」

「そつか。じゃあ先に玄関にいるから」

そう言つて、玄関に向かう途中。リビングに置いてある受話器が落ちているのが目に

入った。

「いったい何時落ちたんだろう？少し疑問に思いながら、元に戻す。何だか幸先が悪いというか。何というか。苦笑してしまう。」

そのまま玄関に向かい、靴を履いて外に出た。そこにはいつもの様に話し合っている2人がいた。

「あ、来た来た」

「ごめん、待たせちゃった？」

「いえ、そんな事はありませんよ。ことりはどうしたのですか？」

「すぐに戻ると思うよ……って言ってる間に来たね」

「じゃあ、学校に向かって出発！」

と、穂乃果ねえが元気よく言って、先に進む。そのあとを追っていく。

何時もの、風景だった。先を行っていた穂乃果ねえがくりと向いて、そういえばと口火を切った。

「今日は練習見に来る？」

「あー、もうそろそろ次のPVの演出考えないとなあ」

「そうですよ。次のPV撮影までそう時間はないんですから。歌もダンスも仕上がってますから、後は演出だけですよ」

厳しい一言を貰ってしまう。しかし、そう言われても構成を考えるのは難しいことなのだ。

今の所、考えなど纏まっていなかった。μ s の演出家担当として抜擢されたのはいいが、そう何度も上手く考えが付く訳では無いのだ。

「ま、学校が終わったならそっちに行くよ。その間に何か考えとくね」

「みーくん来るんだあ……。いろいろ用意しておかなくっちゃー」

「そんな用意されると逆に行きずらいんですけど……」

足を進めていくと、いつもの分かれ道にでた。鞆を背負い直し、別れを告げる。

刹那、ことりねえの忘れ物の事に気付いた。結局の所あったのだろうか。

「ことりねえ。忘れ物あった？」

その言葉に対して、ことりねえは首をかしげる。何か、おかしいことでも言ったかどうか。

それとも言葉が足りなかっただろうか。もう一度、しっかりと肉付けして言う。

「ヘアゴム。僕の部屋に忘れたんでしょ？ あったのかなって」

「あ、うん。あったよ。あった」

「ならないけど。気を付けてね」

何だか、返答に乏しいというのだろうか。しっかりと返してこないと、気になってし

まう。

穂乃果ねえに負けず劣らず、抜けたところがあるからだろうか。

「じゃあ、また。学校終わりに電話するね」

「うん。それじゃあね」

そういつて別れる。今日も、長い一日が始まる。

第二話

携帯のバイブが震える。先ほど放課後になった瞬間に着信が来ていた。指で画面をスライドさせると、掛けてきた人物の名前が画面に出る。

そこには、“南 ことり”と書かれている。掛けてきた時刻はちょうど学校が終わった時であった。もしかしてもう全員で待っているのだろうか。

少し焦りを感じ、電話を掛け直そうとする。その時、曲がり角から見知った顔がこちらに來ているのに気付く。

風に靡く、蒲公英の様な色をした髪を手で御淑やかに抑える彼女は、こちらを見かけると笑みを浮かべ寄ってくる。

なんだか、面を食らったような気分だ。

「絵里先輩？何故こんな所に……？」

「迎えに來たのよ。そろそろ学校が終わるころかなって。出てくるのを待ってたの」
いたずらに微笑む。その小悪魔の様な妖艶な笑みに鼓動が早くなる。少し顔が赤くなるのを感じて顔を背ける。

そのことを気付かせない為、彼女を窘めることにした。

「絵里先輩はアイドルでしょう？それにここらじゃあとても人気があるから、こんなことしたら——」

「噂になっちゃうつて？ふふっ」

手を取られる。ゆつくりと僕の手を頬へと導く。

触れた瞬間、色々な感触が襲ってくる。彼女の頬は少し熱く。まるでシルクの様なきめ細やかな肌。

そして僕の手を引っ張る。突然のことに対応出来ず、よろける。そのまま抱きしめられる。

豊満な体に、絹糸の様な髪。彼女が持つ特有の良い匂い。

耳元で囁くように、言葉を紡いだ。

「私は、それでもいいわ」

開いた口が塞がらない。なんだ、これ。まるで別人じゃないか。自分の中で抱いていた人物像が破壊される。

もつとしっかりしていて。アイドルでいる自分のことも理解していた筈で。

頭の中の回路がショートし始める。彼女はゆつくりと体を預けると、薄いリップグロスを塗っている瑞々しい唇から言葉を発する。

「……。――」
聞こえない。耳の中に入っては、すぐに溶けるような感覚だ。でも、それは聞きなれていて。体が受け入れてしまっている。

彼女の曇りもない空色の瞳が、こちらを向いている。視線が交差する。何度もしたような、気がした。

僕は、彼女の――。

刹那、携帯が鳴り響き。僕を現実に戻す。

「あ……」

「……。携帯。鳴ってるわよ？出ないの？」

体をゆっくりと放すと、無表情のまま言う。

携帯を取り出すと、画面には「南 ことり」の文字が出ていた。その着信を受け、耳に当てる。

焦ったような声が聞こえてくる。

「みーくん！今、何処？」

「え、あ、学校出たとただけど。どうかしたの？」

「良かった……。あ、えつとね。もしかしてそこに絵里ちゃんいる？」

少し、胸がざわめく。あんなことがあつた直前だからだろうか。

「いるけど。それなら絵里先輩の携帯に掛けたほうがよかつたんじゃない。」

「絵里ちゃん、携帯忘れてちやつてたから」

「そう。変わろうか？」

「ううん。大丈夫。みーくん、待つてるから早く来てね」

そう言うと、電話を切られてしまう。

果たして何のために、掛けてきたのか。それよりも絵里先輩はなぜこんな事を――。

そう思い、目線を彼女に戻す。彼女は笑っていた。

「ふふふ……。冗談よ？」

「え？」

理解が出来ない。予想の反中を超えてしまっている。

楽しそうに笑うと、悪戯が成功したかの様に舌を出す。

「まったく。μ、sの演出家がこんなのでどうするのよ」

「どういうことですか？」

「私達の演出家が、他の女の子に捕まってしまうかどうか、よ。あなたも男の子なん

だから分かるでしょう？」

嗚呼、なるほど。色仕掛けというやつか。確かに他に捕まり、スパイとなるのは自分が一番可能性が高いからか。

それにしても、やり方があるのではと思ってしまう。

「初めからそう言っておきよ……。しようがないでしょう、僕も男なんですから」

「そうね。まんまと嵌まってくれたもの。心配になるほどにね」

そう言つて、また笑う。恥ずかしさが全身を襲う。

ああ、もう。さつさと学校に行つてしまおう。まともに顔を見ることもできない。

「もう、さつさと学校に行きますよ。ことり姉えにも催促されちゃいましたし」

「そうね、そうしましょうか」

音ノ木坂へと足を進める。刹那、何かか聞こえたが無視をした。

まだ感覚が残っているのが、なんとも言えない。忘れたくもあり、忘れたくもないからだ。

足が速くなってしまふ。後ろを振り返るなんてできない。

「他の女の子に捕まるなんて、私が許すわけないんだから」
彼女が先程と同じような妖艶な笑みで僕を見ているなんて、知るよしもなかった。

第三話

音ノ木坂には良く来ているが、未だに門を入るのにためらいがある。

この学校の理事長——ことりねえのお母さんにも認めてもらい、許可書も発行されてはいるのだが。

どう考えても理事長以外の教師が目光らせるのは当然のことだと思う。

だからこそ、この状態を解除してほしいのだが。

腕を組むようにして歩く絵里先輩に視線を向けるが、取り合ってくれず。道行く生徒から好奇な目にさらされるのは時間の問題だろう。

色仕掛けなどには引っかけかりませんと、神に誓ってもいい。やめてください。恥ずかしさでこつちの身が持たない。

そう思っていると、いつの間にやらアイドル研究部の部室についていた。

「さ、中に入りましょ」

「そろそろ離してくださいよ、絵里先輩。恥ずかしさで死にそうなんですけど」

「んー。まあ、いいでしょう。他の女の子に靡かない。約束できるかしら？」

「ええ、そりやもう。色仕掛けなんて引っかけかりませんから」

胸を張って言える。というか、これ以上の色仕掛けがあるなら受けてみたいものだ
が。

先程からの柔らかい感触にどうにかかなりそうだった。

「……。じゃあ、離してあげる」

体が離れる。暖かで、柔らかい感触が離れる。名残惜しかった。

声に出せるわけもないが。溜息をつき、ドアを開ける。

中には全員がそろっていて、その全員とも部室に置いてあるパソコンに向かってい
た。

「あー。どうも?」

「う、ええ!」

声をかけると、比較的自分の近くにいた真姫が声を上げる。

それに全員が気づき、こちらを見る。

ぷつんと言う電子音が聞こえる。パソコンの電源を落とした音、だろうか。

「あ、別にパソコン落とさなくてもいいのに。てかびつくりさせちゃった?」

「もう! ノックぐらいしなさいよね!」

「ごめん、忘れてたよ。皆そんな真剣に見てるなんて知らなくてさ」

そう言って笑うと、いつもの席に着く。鞆を置いて一息つくと、それほどまでに夢中

になつてゐるのが何なのか氣になつた。

「何を見てたの？なんかすごい真剣だつたけど？」

「あはは……まあそれは女の子の秘密っちゅーことで」

少し焦つたように希先輩が言う。そんなに焦る事だろうか。

何だかこのことに突つ込むと危険な感じがしたので、深くまで掘り下げはしないが。

「そう言えば、みーくん。もう演出のほうは決まつたのかにや？」

「うん。大体はね。2つ案があつて、どっちか決めてもらうと思つて」

「ほえええ。速いんだねえ。この間頼んだばかりなのに」

「ふふーん。もつと褒めていいんだよかよちん」

胸を張る。褒められるのは嫌いじゃない。むしろ好きだ。

尊敬の目で見るかよちんは更に、瞳の輝きが増した。

「湊。今日の朝まで考えていなかつたでしょう？」

「う、いいのさ海未ねえ。適当に考えたんじゃないやなくて、しっかり考えたんだから。まあ学

校にゐる間だつたけど」

「本当にしつかりと考えたんでしようね？にこの目はごまかせないわよ？」

「それは見てからのお楽しみですよ、にこ先輩」

鞆から、ノートを取り出す。演出ノートと題されたそれは、僕のアイデアが詰まっ

た物だ。

アイディアと言ってもそう大事な物ではないけども。

「えーと。とりあえずなんだけど、今回の——」

「と、まあこんな感じでもいいかな？」

自分のノートに付け足ししながら、全員を見る。どうやら、大丈夫らしい。

あれからかなり議論をはじめ、気が付いたら遅くなっていた。

ノートを鞆の中にしまい込み、伸びをする。

真剣に議論したこともあって、なかなかの出来に仕上がった。

外を見ると、日はもう傾いている。そろそろ帰りだろうか。そう言えば、今日は一切練習してないのだが良いのだろうか。

気になるので聞くことにする。自分のせいで出来なかったとでもなってしまうたら、申し訳なさで一杯だ。

「今日の練習は良かったの？」

「ええ、大丈夫よ。今日は奏が来る日だし」

「しつかり聞いておかなあかんしなあ」

そう言つて、笑いあう。演出の事だろうか。気になったが口には出さない。

口に出したら、そのことについて弄られて終わりだ。

そうですかと相槌をうつて、机に体を前のめりにして倒す。

冷たい机が心地よかつた。皆が皆雑談をしている。こんな空間も悪くない。

少し顔を上げると目線の先には、こちらを向いている真姫ちゃんと目線が交差した。

「お、何だい真姫ちゃん。そんなに見つめられても演出の案は出てこないよ？」

「何言つてるのよ。たまたま目線があつただけでしょ」

「うーん。手堅い」

少し赤くなつて顔をそらしている。何というか、ちよつかいが出したくなつてしまいたくなる。

スキンシップをするとそれはそれで問題になつてしまうが。からかう程度なら大丈夫だろう。

「ね、真姫ちゃん。こつち向いてよー」

「嫌よ。向く必要がないもの」

「えー。可愛い顔が見れないじゃん」

「何言つてんのよ！」

更に赤くなる。これはやばい。やめられない。

でもこれ以上すると怒られるからやめる。辞め時が大事だ。

ごめん、ごめんと少し謝る。そうしてまた先ほどの体制に戻る。

少し先にあつた、かよちんが持つてきたスクールアイドルが取り上げられている雑誌を手に取る。

表紙はA—R—I—S—Eがでかどかと乗つていた。3人で仲良くこちらに向かつて笑つている。

センターにいる綺羅 ツバサの顔が印象深く残る。これが頂点に立っているもののオーラだろうか。

それに加え可愛さもある。これは世の男も釘づけになるのも分かる。

「うーん。綺羅 ツバサは確かに可愛いなあ」

瞬間。部屋の温度が下がった気がした。

異変に気付く。あ、と思つた時には遅かつた。

隣に座つていた絵里先輩が、僕の手を握り、引き寄せる。

引つ張られて、顔を見ると無表情のままこちらを見ていた。

「ねえ、湊」

「え」

「私、言わなかったかしら」

パニックに陥る。頭回転が止まったしまったかのようにだった。

どんと顔が近づく。やばい。体が動かない。

「絵里ちゃん。ダメだよ」

「穂乃果……？」

「その気持ちは分かるけど、決めたでしょ」

「そう、ね」

納得したような顔で僕の手を放す。穂乃果姉えが両手を頬に添える。

顔だけを穂乃果姉えのほうに向けられる。こんなに力が強かっただろうか。

真剣な目で、こちらを見ている。

「ねえ、みーくん」

「な、なに？」

「穂乃果達だけを見てればいいんだよ。穂乃果達のことを考えてればいいの。他の女の子に気を取られちゃダメ」

そのまま優しく抱きしめられる。状況が速過ぎてついていけない。

みんなの視線がいつせいに僕に向く。この後の展開を知っているかのように微笑ん

でいた。

「だから、決めたの。みーくん」

息を吸い込む。そのまま耳元でささやく。

それは僕にとっての日常が変わってしまう一言。

「穂乃果達はずっと傍にいるって」

ここから、僕の人生は大きく動いていく。

第四話

あの一言が引き金になつてから、すぐに周りの態度が急変した。

持っていた雑誌は取り上げられるだけでなく、僕の鞆に入っている携帯を取り出される。携帯が帰ってきたときには、他の女の子のアドレスはすべて消えていた。

また、すべてにおいて距離が近くなつた気もする。今にいたつてもそうだと云える。

いつもの帰り道、僕の両手は穂乃果ねえと、ことりねえに取られている。すぐ後ろには海未ねえが監視をしているかのように、ぴったりとくっついて歩いている。

他の皆は、部屋を出るとき何か相談しながら帰つて行つたが何だつたのだろうか。

いつまもならば気にもしないのだが、あんなことがあつた手前どうやつてもそう考えるのは無理があつた。

そう、まだ僕の頭は困惑している。いつからあんな好意を持たれていたんだろう。そんな素振り一切なかつたのに。

「ねえ、みーくん」

穂乃果ねえが語り掛けてくる。耳元に近い為か、ゾクゾクしてしまふ。

顔だけを向けると、満面の笑みで言葉を紡ぎ始める。

「お泊まりするの久しぶりだね！穂乃果すっごく楽しみ！」

いつの間にそうなったのだろうか。記憶を思い出してもそんな会話一つもしていない。

普段なら別に良いのだが、今のまま家に上げるのは危険だと思う。きつと、いやそうに違うない。

だけでも、そんな反論もできないほど凄みのある笑みを向けられる。穂乃果ねえの笑みが初めて怖いと思った。

少し気を紛らわすために、話でもしよう。そうしなくてはこの雰囲気になんて耐え切れない。

「そう、だっけ？そんなに久しぶりだっけ？」

成るべく普段通りに。そう心がける。

怖がっているとばれたら、さらに何をされるかわからない。

すると、後ろにいた海未ねえが微笑みながら答える。

「ええ、とても。27日7時間24分18秒ぶりだと思えます」

「え？」

「海未ちゃんさすがだね！ことりそう言う計算あんまりできなくて……」

「あまり気にしなくても良いかと思えますよ、ことり」

「そうだよことりちゃん！いつもお世話になってるし！」

「そうかなあ……、えへへ」

マテ。待つてくれ。何だ今の。そんな会話聞いたことないぞ。

体が固まる。歩く足並みが止まりそうになる。今は平常心を装うので精一杯なのに。少し遅くなった足並みに、海未ねえが不思議そうに問いかける。

「どうしましたか？湊。食材の心配なら必要ありませんよ。3日と1時間13分7秒前、買い物に出かけたでしょう？何なら中身を教えましょうか？」

「い、や。大丈夫」

「そうですか。なら速く行きましょう。今日は私達3人で作りますから」

「期待しててね！」

「穂乃果ちゃん料理できたっけ？」

「あー！ひどいよことりちゃん！最近はお母さんに教えてもらってるんだから！」

頭が痛い。これ以上僕の周りのことを聞いたらどんどんと出てきそうだ。

逃げ道なんかなくて、これも運命だと受け入れたほうがいい気がしてきた。

もうすぐ、家についてしまう。3人とも楽しそうに笑いあう。

僕は、笑えそうになかった。

家にあがるとすぐに料理の準備へと取り掛かっていた。鞆を部屋に置き、リビングへ

と向かう。

穂乃果ねえがふぎけて、海未ねえに怒られていて。ことりねえはそれを楽しそうに見ている。微笑ましい空間がそこには広がっていた。

あんなことがあつた後とは思えない。僕はこのままでいいのだろうか。降りてきた僕にことりねえが気付いた。ゆつくりと僕の隣に座る。

「どうかしたの？ みーくん」

優しく、語り掛ける。今思っていることをぶちまけてしまいたいけど、それは出来なくて。

なんでもないよ、と笑おうとする。けど、それは出来なかった。ふわりと抱きしめられている。

「そうだよね。皆変わっちゃって怖かったんだよね」

思っていたことを言われてしまう。少しどきりとした。それと同時に優しく頭をなでる手つきが心地良い。

涙が、でてしまう。本当に怖かったんだ。知らない人になってしまったよう。

「どうして、なんだろ。僕なんかじゃなくても」

「ううん。それは違うよ。みーくんだからだよ。それ以外の人になんかに触れて欲しくないし、他の子に目移りしても欲しくない」

「……」

「だからいつでもみーくんのこと、見てるよ。笑顔も、涙も、普段の顔も、寝顔も。ずっとずっと」

なんだかどうでもよくなってくる。嫌なことなんて忘れてしまう。そう言えば、子供の時もこんな感じに慰めてもらった気がする。

霧がかかったかのように、あたりが見えない。どんどんと海に沈んでいくように、意識が落ちていく。

「だから、ことり達を愛して。怖くないから」

言葉が、ぼくのなかに、しずんで、いく。

気が付くと、ちようどご飯を並べている穂乃果ねえ達が目に入った。

体を起こす。伸びをすると、僕の目がうるんでいることに気付いた。はて、泣くこと

なんてあったらどうか。

可笑しいこともあるもんだと思って、立ち上がる。

「手伝うよ」

「大丈夫だよ、みーくん。穂乃果達の料理楽しみにしてて！」

そう言つて、色とりどりのおかずを並べていく。キッチン奥では海未ねえとことりねえが4人分のご飯を盛り終わった後だった。

やることもなくなつてしまったので、とりあえずテーブルに座る。目の前に広がる和食に中華。どれもおいしいそうだった。

3人が同時にテーブルにつく。何というか、幸せだ。いただきます、と4人同時にする。さて、どれに手を付けようか悩む。

とりあえず、餃子に手を伸ばす。もっちりとした皮に、肉汁があふれ出る。絶品だ。あれもこれもと手を伸ばす。まずいものなんて一つもない。

「うわ、どれも美味しいや」

「良かったあ……」

「でしよー！」

「穂乃果、調子に乗つては駄目ですよ。まだまだここからです」

「うう……相変わらず海未ちゃんは厳しいなあ」

唇をとがらせる。その可愛らしい行動に笑みがこぼれる。さて、と食べることを再開しようとしたときに気付く。

「あれ、3人とも怪我なんてしてたっけ？」

と、聞く。3人共々指に絆創膏が貼つてある。慌てて隠しているが、血が滲んでいるのが見えた。

大丈夫かと聞くが、心配しなくて良いと帰ってくるので心配するのはやめにする。

でも、アイドルだ。傷なんか残しちゃだめだよ。

「気を付けてね。傷なんか残しちゃだめだよ。」

「ありがとうございます、湊。ですが本当に大丈夫ですのよ。」

「そう。ならいいけど」

何気なく、テレビのリモコンを手取る。

一応、点けても良いかどうかは聞いておこう。

「テレビ点けてもいい？ニュース見ておきたいし」

「ことりはかまわないけど……」

「穂乃果も平気だよー」

「ええ、かまいませんよ」

「ありがとう」

テレビの電源を点ける。画面にはスクールアイドル特集とテロップが出ている。ゆつくりと画面を見ると、綺羅 ツバサの姿があった。

刹那、頭が痛くなる。まるで地響きのように頭の中で反響し続ける。次々に今日の出来事がフラッシュバックしていく。

座れなくなつて、そのまま地面に倒れこむ。誰かが近寄ってくるけど、認識できない。そうだ。今日はあんなことがあつて。どうして忘れていたんだろうか。

そう思うと同時に、また意識が遠のく。でも今度は沈んではいかなかった。

目が覚めると、僕の部屋で寝ている。両隣に穂乃果ねえとことりねえが寝ていた。さらにその奥には海未ねえがぐっすりと眠っていた。

少し整理しようと思ひ出そうとするけど、どうにもこうにも家に帰ってから、ご飯が出来るまでの記憶が抜け落ちていた。

だが、その間に今日の出来事を忘れさせてしまうような何かをされたのは事実だ。

……見当もつかないが。寝ている穂乃果ねえの顔を見る。どうして、こうなつたんだろうか。

顔を見てみると、ゆっくりと寝言を放った。

「みーくん……行かないで……」

すとなと、言葉が僕に落ちる。僕も覚悟を決めるしかない。

また笑顔で元に戻るようにと。

第五話

意識が、少しずつ覚醒していく。窓から日が射しこんでいる。

鳥の声と共に、目を開けていく。同時に体に感じる重さに気付く。体が動かないと言
うよりは、何かが乗っているみたいだ。

あたりを見渡すと、ことりねえが僕の胸の上で寝息を立てていた。両手は穂乃果ねえ
と海未ねえにホールドされていて動かさなかった。

どうにかして動かしたかったが、寝顔を見てしまうとそんな気も起きなくなってしまう。
う。

はあ、と息を吐き、時計を見る。もう少しで7時をまわる。今日と明日は休みだから
いいが、もしこれが続くのなら、僕はこの家から出られるのだろうか。

不安がよぎる。だけでも打開策なんて思いつかず、時間が過ぎていく。

30分ほど過ぎたところで、もぞもぞと僕の上でことりねえが動く。どうやら起きた
みたいだ。

「おはよう」

「あー、みーくんだー。寝ても起きてても一緒にいるなんて、幸せだよー」

抱きしめられる。動けない為、されるがままで。手が僕の脇腹から、首筋に行き。そのまま唇を撫でられる。

ゆつくりと線をなぞるようなその手つきは、とても厭らしくて。僕は、その事を悟られないように表情を我慢する。

その表情を見て、ことりねえは楽しそうに笑った。

さらに顔を近づけてくる。何だか嫌な予感がする。ごそりと、両隣が動く。

耳たぶを優しく、唇で挟まれる。生暖かいその感覚にぞくりと震える。

「ふふふつ、湊は可愛いですね……。ここはどうですか？」

海未ねえが笑った。耳たぶを一度離すと、優しく噛み。耳輪の部分を唇で撫でられる。

耳の間近で聞こえる水音と息遣いに鼓動が早くなる。その間にもことりねえは抱きしめることをやめてくれず。

ただ耐えるのを待っただけとなった。ただ、それだけ。

「皆ずるい！穂乃果だって！」

耳の中を舌でなぞられる。耳の縁を確かめるかのように。吐息が耳にかかる。

耳たぶを唇で挟んだり、遊ばれたりしている。両方からされる感覚はどちらも違くて。

穂乃果ねえのはたどたどしいと言うのか、何というか慣れていなくて。逆に言ったら海未ねえのは恥じらいがなくなつたと言えればいいのだろうか。

大事なものを扱うかのように、ゆっくりと丁寧だ。

僕はその快感の波に乗りこまれない為にも、目を閉じた。

「だーめ。目を開けて?」

「ことりねえ、勘弁してよ。無理、だつて」

瞬間、アラームが鳴る。自分でかけた覚えはない。すると、両隣にいた彼女たちは残念そうな顔をして離れた。

ことり姉えは、少し寂しそうな顔をした。

「あーあ、残念。ここからだつたのにいー」

「しようがないですよ穂乃果。決めたのはこちらなんですから」

「ううう……。そうだよねえ」

「へ?何のこと?」

何の事を言ってるのだろうか?僕の中で疑問が走り回っている。

昨日からこんな調子だ。あまりの展開の速さについていけない。

「すぐに分かるよ。さあ、みーくん。起きて?」

ことりねえが立ち上がって僕の手を引く。

されるがままに立ち上がる。こうして、僕の朝は始まった。

「成程ね。こういう事かあ」

目の前には凜ちゃん、かよちん、真姫ちゃんと、僕と同じ1年組がそろっている。ことりねえ達と入れ替わりに来ている。あつという間に入れ替わっていた。

朝ご飯もそこそこにあわただしかった。

「まあ、いいや。多分泊まり、だよな?」

「そういう事にや」

「ご、ごめんねえ……」

「まあ、当然よね」

そう三者三様の反応を見せる。

はあと息を吐く。とりあえず、買い物に行かなければいけない。

予想通りならば明日も来るはずだ。

「じゃあ、買い物に行つてくるよ。冷蔵庫に何も残つてないからねえ」

「ううん。行かなくていいにゃ」

「え？」

凜ちゃんを見る。得意げな表情で僕にスーパーの袋を掲げていた。

中には肉や野菜などの食料品がそろっていた。

「どうやらここに来るまでに買い物をしてきてくれたらしい。僕は感謝しつつその袋を受け取った。」

「ありがと。お金は後で払うね」

「いいのよ、別に。私達が押し掛けたんだもの。それくらいはこつちで持つわよ」

「それでもだよ。女の子に養ってもらおうヒモみたいなことは、嫌だからね」

「……そう。じゃあ一人分を払ってもらおうかしら。これならどう？」

目線でこれ以上は譲渡しないという意思を感じた。

了解とうなずくと、袋の中身を冷蔵庫に入れていく。

「凜達も手伝うにゃ！」

「お、ありがと。とりあえず掃除しなくちゃね。昨日穂乃果ねえ達が泊まってそのままだし」

「み、みーくん。じゃあ、私お掃除するね?」

「うん。じゃあお願いしようかな。えーと、真姫ちゃんはお布団干してもらっていいかな?」

「しようがないわね。干すところは2階でいいの?」

「そうだよ。かよちん、掃除するのは僕の部屋だけでいいよ。掃除機はその中に……ってあれ?」

いつの間にか掃除機を持っている。場所など言っていないのに。勘で開いたのだから。

まあ、いいか。どつちにしろ言う手間が省けた。

「じゃあ、凜ちゃん。お風呂掃除をお願いしていいかな?」

「まかせるにやー!」

「じゃあ、お願い。終わったらかよちんか真姫ちゃんを手伝ってあげて!」

全員がそれぞれの持ち場へと移る。少しバタバタしてしまうが中々こんな生活も悪くない。

すべての物を冷蔵庫にしまい込み、次に進む。次は洗濯をしなくてはいけない。

凜ちゃんが掃除しているであろう風呂場が隣接している洗面所へと向かう。

中に入ると、洗面所で屈みながら、何かをしている凜ちゃんの姿があった。手にはメモリーカードのような物を持っていた。

「凜ちゃん？何それ？」

「にやーび、びつくりしたー」

飛び上がるように体を硬直させている。かたんと音を立てて何かを落とす。レンズがこちらを向く。

「デジカメだ。しかも、どこかで見たことのあるものだった。何でこんな物がここにあるのか。」

「これ、デジカメ、だよ。なんでこれが——」

「あちゃー、ばれちゃったかあー。まあ、しょうがないにや」

舌を出して愛想笑いをする。デジカメを拾い上げ、中のメモリーカードを抜く。なんだかとても慣れている手つきだった。

「みーくんが聞きたいことは分かるにやー。きつと誰が設置したのかだよね？」

「あ、うん。そうだね」

いろいろ聞きたいけれど、頭の中で整理できなかつた。言われるがままに頷く。

凜ちゃんは無邪気に笑うと、デジカメを僕の手に乗せる。

「これね、さつきことりちゃん forgot して言つて凜にお願ひされたの」

ああ。さつきから感じていたこのデジカメの既視感は、ことりねえのだからか。

少し前に遊びに行つたとき、新しく買ったと言つていた。確かにそうだ。

「いつからとか、知つてるかな。何だか最近だと思ふんだけど」

「うーん。凜はみーくんの昔の姿もみたことあるし、結構前からじゃないかによー」

「え」

「少し前から皆で見てたけど、ことりちゃんと穂乃果ちゃんと海未ちゃんはもつと前から見てたと思うによー」

頭痛がする。僕は前から穂乃果ねえ達から盗撮されていたのか？それを皆で見えてた？

どういふことなんだろう。僕の意識が揺れる。でも良いのだろうか。僕に話したら今度から注意して生活するのに。

「そこまで話していいの？皆から怒られるんじゃないよ——」

「もう必要ないによ。みんなそう言つてるよ？」

「そう、なの？」

もしかして、飽きたのだろうか。それともその事自体におかしいと気付いたのか。

少し気分がよくなる。いくら好きな彼女達であったとしても勘弁してほしいものである。

すると、凜ちゃんが僕の胸に収まるように抱き着いてくる。

ふわりと、僕の鼻腔に柔らかなお日様の匂いがした。僕の顔を見上げるようにしてにつこりと笑った。

「だって、凜達はもうずーつと見る事が出来るにや！もう離さないにやー！」
僕を抱き締める腕の力が強くなる。それがまるで首輪のように感じた。僕はどうしたらいいだろう。

凜ちゃんを見る。無邪気に笑う。まるで太陽のように僕を照り付けていた。

そのまま、僕に甘く囁く。

「好きだにや。みーくん。他の誰よりも」

その太陽に身を焦がされそうだった。

第六話

凜ちゃんを退ける事に成功して、リビングへと向かう。

どうしようもない気持ちだが、僕を蝕んで行く。

自然と足並みが速くなってしまふ。

リビングに置いてある麦茶の容器からグラスへと注ぎ込み、一気飲みする。味なんて到底分かるはずもない。

ただ、乾き切った口を潤すために飲み込む。何かに逃れるように。

予想はしていた。少々ながらもこんな感じなんだろうと思いついていた。もつと軽いぐらゐに捉えていた。そんなに昔からなんてどうやって予想出来る？

僕の中をグルグルとその事実だけが回る。どうすれば元のように戻れるのか分からなかった。

元のように、笑って過ごしたい。みんなの事を好きでいたい。

ただそれだけだった。きつと、そう。

「なに悩んでんのよ?」

「っわー!」

すぐ後ろから喋りかけられる。びっくりして振り向く。

不思議そうに僕を見る真姫ちゃんの姿があった。

持ち場を終えたのだろうか。

「ああ、びっくりした。布団干し終わったの？」

なるべく、普段通りに装う。あの時を分析するなら、全員がそうである可能性があるため普段を崩してはいけない。

表情もいつものように明るく振る舞う。

「……そうね。終わったわよ」

「速かったね。かよちゃんの方はどうだった？」

「もう少しかしら」

そう言っただけの僕に正面にあるソファに座った。僕もゆっくりとイスに腰掛ける。ふくと溜め息を吐く。

「あ、真姫ちゃん何か飲む？ 麦茶と紅茶ならピッチャーに入れてあるけど」

「そうねえ。紅茶を貰おうかしら」

「了解」と

立ち上がって、冷蔵庫からピッチャーを取り出す。グラスに氷を入れて注ぐ。ガムシロップとフレッシュミルクを持って運ぶ。

「どうぞ。ガムシロとミルクは好みで入れてね」

「ありがとう」

自分の席に戻る。ついであつた麦茶を飲む。

あれ。こんな味しただろうか。それとも落ち着いたから？

まあ、いいかと思ひ飲み干す。

それと同時に真姫ちゃんが立ち上がつてこちらに来る。

「どうしたの？真姫ちゃん。麦茶の方を飲む？」

「いらないわ。ねえ、湊」

僕に全体重をかけるかのようにしなだれる。きめ細やかな髪が舞う。

顔が僕の肩に置かれる。何とも言えない、女の子特有の甘い匂いが鼻をくすぐる。それと同時に程よい柔らかさが僕の間を襲う。

「湊。その麦茶、変な味がしなかつたかしら？」

「え、そう言えばそんな気がしたような」

聞かれて答える。今の状況をはぐらかされた気がする。

慌てて聞こうとするが、できなかつた。

「それ媚薬入れたのよね」

「は？媚薬？」

何言ってるのか分からない。でも冗談だとは思えないほど真剣だ。

もし、いや本当に入ってるのか？分からないままだ。

「どうやら信用してないみたいね。ほら、これよ」

瓶の中に入っている液体を見せてくる。中は蛍光色の黄色のような色をした液体が入っていた。

どうやら本物らしい。それに真姫ちゃんは手に入れる事が出来る。

何だか体が熱い気がする。まずい、効いてきたかも。

「じゃあ、どいて？真姫ちゃん」

「いやよ。チャンスじゃない」

「ダメだつて。真姫ちゃんが許しても、僕は僕自身を許せないよ」

こんな事で僕は彼女を傷付けたくない。僕の意思じゃないんだ。

彼女にそんな事させたくない。いや、彼女達にだ。

熱さがまして行く気がする。感覚が敏感になつてるのか。

「関係な……」

刹那、電話のベルが鳴り響いた。真姫ちゃんは少し顔をしかめると僕から離れる。何が起きてるんだ。それと同時に電話は鳴り止んだ。

「はあ。もう少し緩くてもいいじゃない」

「え？何が？」

「何でもないわ。それと、媚薬は嘘よ」

何だそれ。嘘つて、体が熱くーっつまさか。何処かで聞いた気がするなんだったかな。聞いた覚えがある。

「プラーシーボ効果よ。前に教えたでしょ？」

確か、思い込み効果のような物だったろうか。詳しくは覚えていないけど。前にそんな会話をした気もする。

「それよりも。湊の言葉は裏を返せば、同意の上なら良いのね」

「そんな事言ったかな。忘れたよ」

惚ける。勢いもあつたが、あの場の雰囲気ではそう言うしかなかった。その事が事実で有ったとしても。

真姫ちゃんはそう、と言って僕に近づく。

「何を悩んでいるのか知らないけど、私には関係ないわ」

「え、悩んでなんて……」

普段通りを装う。知って欲しくないし、知らないままでいい。

きつと、それが一番良いに決まってる。

すると、真姫ちゃんは僕の耳に口付けをする。そして、そつと耳打ちした。

「だって、そんな事考えなくても良いぐらい一緒にいればいいのよ」
僕のポーカーフエースは脆くも崩れ去った。

第七話

真姫ちゃんとの情事があつた後、彼女は満足そうに台所に向かった。

「どうやらお昼ご飯を作るらしい。あまり作れなさそうなイメージがあるのだが、どうやらそれでもないみたいだ。」

「手に持っていたレトルトの Pasta ソースが気になるのだが、あまり突っ込むのはよしとおこうと思う。」

「藪をつついて蛇を出したくなんてないから、僕は料理を彼女たちに任せることにした。」

「残念ながら凜ちゃんには台所に立つことも許されなかつたのだが。」

「まあ、しょうがないにや。凜の手料理はお腹壊しちゃうから、やめといたほうがいいにやあ。」

「うーん。僕もそれは勘弁したいしなあ。レトルトならはずれはないしね。」

「その内上達するのを待つにや！」

「他人事だなあ。ま、いいけど。」

横にいる凜ちゃんが、僕のほうを向いて笑う。お気楽だなあ、なんて思いながら背伸

びをする。

ふと、かよちんがまだ下りてきていないことに気付いた。

もしまだやつてるなら手伝いにも行こうか。そう思い立ち上がる。

それに気づいた凜ちゃんが僕に尋ねる。

「あれ、みーくんどこ行くにや?」

「かよちんのとこ。多分降りてきてないから、手伝いに行こうと思って」

「じゃあ、凜も行くにや!」

「了解。じゃ、行こっか」

二人で階段へと向かう。僕の家の一階には二部屋しかなくお願いしたのは寝室の一部屋なので、そんなに掃除するのに時間はかからないと思うのだが。

登り切って、ドアを開けようとすると、ちょうど中からかよちんが出てきた。

「うお、つと。もしかして掃除終わっちゃった?」

「あ、うん。丁度終わったとこだよ」

「あれま、そっか。手伝おうかなって思ったんだけど、タイミングが悪かったかな」

頬をかく。さて、どうしようか。こうなってしまうては、僕は手持無沙汰になってしまった。

「あ、真姫ちゃんは?」

「料理中。手伝おうかって言ったんだけど、作れるからって言われちゃって」
「あはは……」

苦笑される。どうやらその情景がすぐに浮かんだらしい。

僕の後ろにいた凜ちゃんが、僕の肩から顔を覗かさせて言う。

「真姫ちゃんはりきってたにゃー!」

「空回りしなきゃいいんだけどねえ。レトルトに手を加えるとか言いそうだけど」

多分だけど、そんなに料理経験はないはずだ。少し手付きを見たけど、あまり慣れていなそうだった。

少し心配になる。食べれる、食べれないとかではなく、ただ単純に怪我しないかと思う。

「そうだ、2人とも真姫ちゃんの手伝いに行ってくれる?僕が行くとまた何か言われそうだし」

「うん。分かったよ」

「まかせるにゃー!」

「あ、凜ちゃんは見てるだけでいいからね」

「う、わ、分かっているにゃ」

3人して笑いあう。同級生だからか、気を遣わなくていい。何と言うか、軽口を言い

やすいというのか。

とにかく何にも考えずにいられる仲だ。僕に向けられている好意は別にして、だけでも。

「それじゃ、僕は自分の部屋にいるよ。出来たら呼びに来てもらってもいいかな」

「了解にや！それじゃ行こ！かよちん！」

「ま、待つてよ！凜ちゃん！」

階段を降りていく背中を見送り、扉を開ける。いつもより綺麗になった自分の部屋があった。

寝室だけでよかったのに、僕の部屋までやってきてくれたのか、と思い中に入る。

入ってから、ここ最近で自分に起きたことを思い出す。疑いたくなかったが、どうしても払拭できない不安がある。

すぐさま自分の持ち物をチェックするが、特に異常は見られなかった。

と、言うより僕も今まで気づかなかったぐらいだ。気づかないほうが普通なのか。

そう納得させて、机に置いてあるパソコンをつける。

「さて、なるべく早く終わらせなくちゃね」

そう声を出して、やる気を出す。パソコンにインストールしてある3DCGソフトを立ち上げる。

そのロゴを見た瞬間、少し苦笑が漏れてしまう。そのままいつもの通りファイルを選択する。

ファイル名には“μ s P V 製作中”と書かれていた。

ソフトを扱うのに四苦八苦してた頃が懐かしく思える。

少し、昔を思い出す。

そもそも、作り始めた切っ掛けは彼女たちが本格的にPVを撮り始めた頃からだった
と思います。

それと、僕がμ'sの演出家だけでなく、PVを作り始めたのはメンバーの誰にも話
していないことだ。

彼女たちにはほかの人に依頼している、と嘯いている。

それには色々理由があった。

僕は当時、それ程スクールアイドルというものを知らなかった。穂乃果ねえ達が学校
を廃校にしたいくないから、始めると聞いたときに詳しく知ったぐらいだ。

前から何をするにも4人で相談していた僕たちは、僕を演出家として雇うことで、い
つもの結束とした。

僕は少し興味もあって、参加した。学生がやることだし、本格的じゃないだろうと思
い込んでいた。

それから初ライブまで色々あって、僕の今から見れば余りにも幼稚な案は通ってしま
い。

散々な結果に終わってしまった。

「ごめんね。みーくん。折角考えてくれたのに」

終わった後、彼女たちが諦めずに立つ中。僕にそんな慰めの言葉をくれて。

僕は激しく後悔した。

それから、彼女たちはどんどんと成長して、仲間も増えていき。僕は取り残されていく気がしていた。

だから、努力した。バイトも増やして、演出の本も買って、色々な勉強をして。

果てにはPVを作ろうと思った。映像だけじゃなくて、しっかりとした本格的なものを。

あの頃を振り返ると馬鹿らしく思える。日々衰弱していく体は、すぐには対応なんて仕切れるはずもなく。

限界を迎えているなんてわからなかった。でも、表面を嘔くのは得意で。

μ'sのメンバーは3人を除いて、騙せた。3人には顔色悪いよ、なんて言われた。それも長く続かなかったけど。

今でも覚えている。朝から体はおかしく、眩暈がして、頭痛は収まらなくて。吐き気を催していた。

そうして、いつものように雨戸を開けようとしたところで、記憶は途切れている。

記憶が再開したのは白い病室のベッドの上で。目を覚ますと、皆が泣きながら僕を見ていた。

それを見て、悟ってしまった。倒れたのかと。

それでも当時の僕は、取り残されるのが嫌で、足手まといになりたくなくて。

僕は彼女たちに謝ったことを覚えている。なんとも思い出すのも嫌な記憶だけど。

「ごめんね。でもすぐに頑張つて案を出すから。迷惑かけてごめん」

僕は誤った選択をしたんだと、当時の僕でもすぐに分かった。皆の安堵する顔が変わつていったからだ。

言葉を紡ごうとしたけど、そんな事できなかつた。

頬をたたかれた。初めてことりねえが手を出しているのを見た。

「っ！馬鹿！みーくんの馬鹿！いつも自分のことは後回しで！そんな事して欲しくないのに……！」

泣き崩れてしまう。どうしたら良いかわからない。想定外だつた。

今いる場所が、何だか居てはいけないような、張り裂けそうなほどの罪悪感が僕を襲う。

穂乃果ねえは僕に抱き着きながらごめんと謝り続ける。海未ねえは僕の手をずっと握りながら泣いている。凜ちゃんはいつもの元気なんかなくて、僕に寄り添いながら怒つて。かよちはうつむいて、床に水跡を残している。

真姫ちゃんも怒るのだろうか、どこか他人のように考えながら見ると、呆然としたまま泣いていて。にこ先輩は僕を怒りながら泣いて、希先輩は震え、何かを言いながら

泣きはじめて。絵里先輩は、僕が見たこともないほど号泣しながらずっと謝っていた。

それから、僕は二度と無理をしないということを彼女たちの目の前で誓った。

だから、彼女たちに言うことを避けているんだ。

やはり、思い出して恥ずかしくなる。何もわからなかったと今なら言える。

と言つてもやっぱり、僕は自分で作りたいのだけど。ソフトを操作しながら、そう考
える。

そう思いながらも、あまりにアマチュアだし、これから先に行くなら僕は要らなくな
るのだろう。とも思う。

僕は裏方で、メインじゃない。スポットライトが当たつて輝くのは彼女達なんだ。そ
こに行くならベテランに頼むのは必然だし、当然の道理だ。

でも、焦りなんて感じていない。悔しさもない。僕は彼女たちに使つて捨てられるな
ら十分だ。この先どうあつても。

だから、今出来るすべてをぶつきたいんだ。他でもない彼女達だから。

少しくさかったかな、と思ひ作業に戻る。いつものように本棚からテクニックを自分
なりにまとめた冊子を取ろうとする。

だけど、そこにはなかった。ここにいられたと思つただけだ。

同時に部屋のドアが開く。そこにはかよちゃんが立っていた。

「あれ、かよちゃん。どうしたの？ご飯できた？」

「ううん。違うの」

僕に近づいて、見覚えのある冊子を出す。それは探していた冊子だった。

「あ、これ」

「知ってるよ。みーくんが花陽たちにPVを内緒で作ってるんだよね」

「え」

驚く。誰も見てもわからないような専門的な言葉が一杯のはずなのだが。

当てられたということによって、動揺が生まれてしまった。

動揺から生まれた、無言を肯定と取ったのかさらに言葉を紡ぐ。

「でもいいんだよ。分かってたもん」

こちらを見る。笑っている。僕は、かよちゃんの目を見て少し恐怖を感じた。

どろどろと泥のように引き込まれそうな、光を写さないような混沌の目が、僕を射抜

いていて。

表情を変えずに告げる。

「睡眠時間は前より2時間も増えてるし、ちゃんとご飯は食べてるし、バイトも少なくし

て」

つらつらと話し続ける。いつものおどおどした感じはどこかに消えてしまったかの

ように。

僕は見ることが出来ずに、そむけてしまう。

「ごめん。また僕が言わなかったから」

「え、ち、違うよ！みーくんが悪いんじゃないの」

いつものかよちんに戻る。どこかおろおろとしていて。

僕に近づいて、冊子を渡す。

「いいの？僕に渡して。また作ってしまうけど」

「う、うん。皆いいよって言ってたから。花陽もそう思うし、それより怖いことのほうが

あるもん」

「何それ。どういうこと？」

気になる。少し問い詰めるように聞く。

それと同時に、僕の胸に飛び込んでくる。また、同じような笑みを見せる。

「みーくんが、離れるほうが嫌なの」

「へ？」

「何でもするからいなくならないで。お願い。花陽、いなくなるって思うと、どうして
も」

涙を流しているんだと、僕は気付く。何だか表情が二転三転しているようだ。

見たことない表情に困惑してしまう。

「どうして、そんなこと言うの？ そんな事言ったことないけど」
「……それは」

口を開こうとする。刹那、ドアが開く。

「みーくん！ ご飯できたにゃー！」

「あ、凜ちゃん」

「あれ？ かよちん、どうしたの？」

凜ちゃんがかよちんに近寄る。僕の胸から離れる。

泣いていた表情をどこか抑えたように笑う。

「なんでもないよ。凜ちゃん」

「んー？ そつか。ほらー！ ご飯できたから食べるにゃー！」

「あ、うん」

引つ張られる。さつき抱いていた疑問はまだ胸に残ったままだった。

立ち上がった時、かよちんが僕にしか聞こえない声で呟く。

「誰かに取られたくないんだもん」

疑問が、晴れてしまう。僕はどうすればいいのだろうか。

元に戻りたいんだ。けど、許されないのだろうか。

僕の中でぐるぐると巡る。この疑問は簡単に晴れそうになかった。

第八話

「ご飯が食卓に並ぶ。意外と、温めただけのレトルト食品でも並ぶと少し豪勢に見えるから不思議だ。

数種類の Pasta に、コンソメスープ。それと、昨日穂乃果ねえ達が作って置いておいた残り物。

皿を並べている真姫ちゃんを見ると、僕に少し勝ち誇ったような笑みを向けてくる。

いや、まあ、大丈夫かなとは思ったけども。でも、ほとんどレトルトじゃあ勝ったとは言えないのではないか。

僕は苦笑を漏らすと同時に、お腹を空かしていたらしい凜ちゃんが僕の手を取り、席に強引につかせる。

そのまま自然に僕の隣に座る。他の二人はそれに対して少し思うところがあるのか、表情がこわばるがすぐに戻し対面に座る。

頂きます、と礼をして Pasta に手を伸ばす。自分の皿に少し取り分け、口を付ける。やっぱり、可もなく不可もなくと言ったところだろうか。

「ねえねえ、みーくん！」

「何？凜ちゃん？」

「はい、あーんにゃ！」

目の前にパススタを絡めとったフォークを差し出される。なかなか綺麗に巻かれている。

いや、そうではなくて。もつと注目することがあった。すぐに意識を逸らすのは、前からの僕の悪い癖だ。

「凜ちゃん、僕、普通に食べれるんだけど」

「でも、トマトソースとカルボナーラを同じフォークで食べたなら、味混ざっちゃうにゃ」
一理ある、のか。こちらに向ける笑顔は、純粹無垢な笑みだった。

あまり、そういうことは気にしてないのか。それに僕に害もなさそうだし。

何故だかわからないけど、*μ s* のメンバー内ならそういうことをされても、御咎めはなかった。

テレビに映るアイドルを3秒以上凝視すると、怒られるのに。違いが分からなかった。

「そう、かな」

「そうだにゃ！」

更にフォークを口の目の前に差し出される。他の二人も止める気はないみたいで。

僕は選択の余地なんかなかった。

「ん」

「にや！どう？美味しい？」

「んー。レトルトの味」

「もう！みーくんはわかってないにやー」

そう言うと、悪戯な笑みを向けたまま、自分の皿に乗っているパスタを口にしていた。心の中でため息をつき、視線を戻すと、対面に座っていた真姫ちゃんから同じようにフオークが差し出されていた。

恥ずかしそうに、目を逸らしていて。顔を赤らめていた。

「ほ、ほら。食べなさいよ」

「あー、うん」

こうなったら拒否することなんてできないだろう。毒を食らうならば皿まで、だ。だけど、新しく発見したこともある。真姫ちゃんは、意外と普通に恋人みたいなことをするのに恥ずかしさがあるみたいだ。

僕に迫ってきた時とは、まるで別人のようだ。

ギアが入ってしまったえば、と言う事か。と言うより、こんな総評してる場合じゃない。

「っん、んー。あ、この明太子ソース美味しいかも」

「そ、そう？まあ、私が作ったものだし」

「いや、レトルトじゃんか……。ま、いいけど」

「いいの！私が作ったんだから」

「うん、感謝してるよ。ありがと」

そう言つて笑う。真姫ちゃんは顔を赤くしながら、そつぽを向く。さて、ここまで来たならば後は、一人か。

恐る恐る僕にフォークを向ける子が、一人。何だか遠慮してるみたいだ。

「あ、ねえ、かよちん。そのパスタどんな味ー？」

「えーあ、ど、どうぞー！」

勢いよく目の前に突き出されて、思わず体が後ろに傾く。

ゆつくり姿勢を戻し、口の中に運ぶ。

ぎこちなく引かれるフォークに、少し引っかけりながらパスタを取る。

ジェノベーゼ特有のバジルの風味が広がる。意外とレトルトでも再現される物なんだなあと思う。

「お、これいいなあ。馬鹿に出来ないね、レトルトも」

「そ、そうだね。花陽もこんな味があるなんてびっくり……」

「ねえ！かよちんのも食べさせてにや！真姫ちゃんも！」

口を開けて凜ちゃんが待つ。真姫ちゃんが恥ずかしがり、かよちゃんが苦笑する。いつもの僕らの会話に戻ってきたような気がする。僕の中にあるもやもやさえ消えてしまえば、だけでも。

それから、時間は悪戯に過ぎていく。テレビを見たり、話をしていたりするだけで、もう夕方だった。

あれから迫られることは一回しかなくて、不思議なほどだった。緊張が解けた僕は久しぶりに気を使わない会話をした気がする。

時計が6時を指す。誰かの携帯のアラームが鳴る。

「あー、もう時間かによ」

「しょうがないじゃない。これも決めたことですよ」

立ち上がって、帰りの準備をし始めている。はて、何か用でもあったのか。

「どうしたの？何かあった？」

「う、ううん。違うよ」

頭の中にハテナマークが生まれる。それと同時に玄関の扉があいた。

蒲公英色の、髪が見える。

「絵里、先輩。それに希先輩に、にこ先輩？」

「そ、次は私たちってこと」

「ごめんなあ。次々に押し掛けてもうて」

僕の目の前に、絵里先輩が来る。

小悪魔のような笑みを浮かべて、僕に言った。

「さあ、夜はこれからよ？」

果たして、夜は明けるのだろうか。

第九話

僕の中で、アイドルという物は偶像であると思っっている。

一種の崇拜の対象であるような、物であると。そのためには、偶像も偶像であるためにそのあるべき姿を崩さないようにするものだ。

分かりやすく言えば、アイドルがアイドルでいる必要条件がある訳で。それには色々束縛されてしまうのだろう。

人付き合いや、性格、趣味や好きな物など場合によつては書き換えなくてはいけない。恋人に至つては、もちろんだ。

とにかく、何が言いたいのかという。穢れないままでいるためには、男の影など感じさせてはならない。

そう、教えてもらったんだけど。

「にこ先輩。アイドルの基本はいいんですか？」

僕の隣で座ってテレビを見ているにこ先輩に語り掛ける。そうそうに僕の家に入ると、いつもやっているかのように分担をし始めた。

いつものツインテールを解いて、ロングにしている。新鮮な感じだ。

くるりとこちらを体を向け、訝しげに聞いてくる。

「何よ？急に」

「いや、前に話したじゃないですか。二人で」

「ああ、あれね。いいのよ、別に。ここはしっかり守ってるし」

「え、あ、そうですか」

おかしいな。男に聞かしては僕がいるからか、すごく言われたのに。

もしかして、僕は男に見られてないのだろうか。それはそれで悲しい気もする。

「ねえ！湊！スビョークラってあるかしら？」

キッチンのカウンターから、絵里先輩が問いかける。

しかし、なかなか聞きなれない名前が出たなあ。スビョークラって、食材だった気がする。

「いや、ないですね。ロシアの食材ですよ？多分、近所の輸入スーパーにあると思うんですけど、買ってきましようか？」

そう問いかける。希先輩は忘れたものがあるらしく、自分の家に取りに行っているし、僕とここ先輩なら僕のほうがこのあたりの地形は知っている。

僕がそう言うと、絵里先輩はエプロンを脱ぎ玄関へと向かう。

「いいわよ。私が持つてくるのを忘れたのに、買いになんて行かせられないわ。それに、

このあたりの輸入スーパーって一か所しかないから買いに行ったこともあるし」「そうですか。料理で見ておくものもないですか?」

「ええ。食材を切っただけだから大丈夫よ。じゃあ行ってくるわね」

そう言つて、外へと出る。それを見送つてからリビングへと戻る。

にこ先輩がソファーにあつたクツションを抱きながら、こちらに顔を向ける。

「ねえ、絵里はもう外に出た?」

「ええ、買い物に行きましたよ」

「そう」

そう言つて、またテレビへと視線を移す。番組は切り替わり、バラエティ番組が始まる。

にこ先輩から少し離れたソファーに座ろうとすると、不満そうな顔で睨まれる。何か用だろうか。

そう思っていると、にこ先輩が口を開く。

「なんで離れたところに座ろうとするのよ」

「え、お邪魔かなと思つて」

いくら知り合いで、仲のいい先輩だとしても隣に座るような度胸は持ち合わせてないのだ。

どうしようもないことだし、分かってほしいところもあった。

しかし、こちらの思想などお構いなしのようで。さらに不機嫌になっていくのが手に取るようにわかる。

「隣来なさいよ。いいから」

「そう、ですか」

隣に座る。甘い匂いが僕の鼻をくすぐる。やっぱり慣れない。

どうしてこうも男と女では違いが生まれるのか。心臓の動悸が聞こえてくるほど五月蝿い。

そんな僕を見て、満足そうに笑う。そのままテレビを見始めた。

僕たちじゃない笑い声が部屋に充満して、擬似的な団欒のような空気を作り上げる。そんな空気のおかげで僕の心臓は収まっていくことが出来た。

テレビを見つめるにこ先輩の顔は笑っているわけではなく、無表情のまま。ただ見ているような気がする。

二人とも何も喋らないが、こんな空気は嫌いじゃなくて、むしろ好きだった。少ししてから、にこ先輩が語り掛けてきた。

「面白くないわね。何だか」

「そうですかね。僕はこういうの好きですけど」

「ここは駄目ね。何が面白いのかさっぱりだわ」

「何だか、笑えるとかじゃなくて。惰性で見られるからいいんだと思いますよ」

テレビのテロップに、人生を変えた人と出る。それについて色々話を聞いていた。

感動的なものから、笑い話まで色々だった。少し興味があるのか、ここ先輩が食いついて見ていた。

逆に言えば僕はこういうのは苦手だ。何故だかわからないけど、興味が一向に沸かないのだ。

それを見ていたここ先輩が、僕に聞く。

「あんたはこういうのがあるの？」

「人生を変えた、ですか。うーん、僕はないですね。これから出てくるのかもしれないけど」

「何だか湊は冷めてるものね。納得だわ」

「そこで納得されるのはあんまり嬉しくないんですけど」

笑いあう。ああ、と一呼吸置く。そう言えば、いたと言えはいた。

あまり言葉に出すのは恥ずかしいのだが。こういう話をするのは珍しいから言っておいたほうが良いのかもしれない。

「*Ms*の皆と会えたのは人生を変えたと言っても良いかもしれませんね」

「へえ、そうなの」

「きつと、こんなに一生涯命に誰かのために動くことなんてないと思いますから」

「これから先もあるのにそういう事を言ってもいいの？」

「ええ。未来にあつたとしても、今をないがしろになんて出来ないでしょう？それに、僕に理由をくれた一つですから」

「理由？何の理由かしら。働くための理由？」

興味を持ったのかさらに聞いてくる。目が輝いているのがわかる。

聞いても面白くなんてないと思うんだけど。でも話をそらすことは出来そうになかった。

「いえ、違いますよ。僕を変えたとも言えはいいでしょか」

「変えた？何よそれ」

首を傾げながら聞いてくる。話そうとして、昔のことを思い出す。

そういうえば、そんな事もあつたなあと思う。恥ずかしい事だつた。

「昔、穂乃果ねえ達と会つてからの話なんですけど。昔の僕はませていたというか、達観している子供だつてよく言われてたんです」

何事にも興味が持てなくて。ただ何かを眺めているだけの人形のようなだつた。

穂乃果ねえ達が遊びに誘つてくれなければ、何もしない無気力な人間だつたと思う。

「よく穂乃果ねえ達が遊びに連れて行ってくれたんですけど。僕はただそれを受け入れるだけで、何もしなかったんです。僕は何も進歩しなくて」

一呼吸置く。胸の奥が苦しくなる。ただそこにいれば与えてくれると思っていた自分が、殺したくなるほど後悔の念でいっぱいだ。

どこかでそんなことはないんだって思えば良かったのに。そんなことも思えないほど泥沼だったんだろう。

黙って聞いてくれてるにこそ先輩の顔が少しずつ変化してるのがわかる。

「特にひどかったのは中学時代でしょうか。普通なら友達を作ろうとするんでしょうけど、僕はそんな事しなかった。いつもの4人でいられるとずっと思っていた。」

きっと人間としては駄目なくらい人との繋がりを求めなかったんです。僕はきつと4人でのいるって言う現状に甘えてたんだと思います」

それこそ友達なんて要らないぐらいに思っていた、と思う。ぼんやりとしてあまり覚えていないけれど、学校にいるときはずっと無口で。終わってからすぐに穂乃果ねえ達といたと思う。

それくらい中学には思い出がなくて、高校も同じようになるとこだった。

「それから、高校生になって。同じように成りそうなところでスクールアイドルの話があったんです。それから、μ'sの皆と会って。繋がりを知ることが出来て。変わるこ

とが出来たんだと思います」

だからこそ、誰かのために働くことが出来ることを知って。多分会わなければ、同じような自分から動くような人にはならなかっただろう。

そこからは同年代の友達や先輩も出来て。今思えば、本当に人生の岐路のように感じる。

「だから、きつと。この先に人生を変える出会いなんてないと思うんです……つて自分が過ぎましたね。こんな感じですよ」

自虐気味に笑う。こんなこと語る必要なんてない。心の内に秘めといたほうが良い。ふと視線をにこ先輩に向けると、少し震えていた。心配になつて声をかける。

「にこ先輩？どうかしましたか？」

「……から、なのね」

「え？」

小さく何かを呟いた。それは僕の耳に入ることはなくて。聞き返すことになつてしまった。

顔を上げる。にこ先輩の真紅の両目は濁つてしまつて見えるように見えて。引き込まれそうだった。

真紅の両目が僕を貫くように見つめる。少しずつ詰め寄ってくるのが分かり、どんど

んと押し倒されるような形になっていく。

柔らかな小さい掌が、僕の手の甲に重なる。ゆっくりと開く唇が一つ一つ言葉を紡いでいく。

「湊が、変わってしまったから、私から、離れていくのね」

「何を、言つて——」

「何を、ですつて？ そうでしょう？ 違う？ 変わらなければ離れなくて済んだのに。そうやって皆から離れていくのね。そんなの許せないわ」

「離れるつて、誰もそんなこと言つてないですよ」

「言わなくても思うことは出来るわよ。にこはそんなの許さないわ。思うことも駄目よ」

僕の手首を締め付けるように握る。少しの痛さに冷静さを取り戻す。とにかくどうにかして元に戻さないと。

「このままの状況は好ましくない。

「何の話を、してるんですか。ほら、態勢を戻してください」

「どうして、話を逸らすのかしら。にこは騙されないわ」

「騙すも何も、ないですつて。離れる気なんてないですよ」

離れるとか、騙されるとか良く分からないけれど。とにかく今の状態をどうにかしな

ければいけないと思つていた。

多分だけど離れるというのは禁句なのだろう。今の状態ではそこまでしか推理することは出来ない。

「本当かしら」

「ええ。絶対に。何を思つてそう言ったのは知らないですけど、今のまま皆を見捨てるわけじゃないでしょう」

これが正解かどうかは知らないけれど。今言える精一杯であつた。

それを聞いたにこそ先輩は少し安堵をしたようで。僕にしなだれる。

「ならいいの。でも駄目よ。あんたの痛みも、思いも、存在も、体もすべて——」

息を吸い込む。二度と離さないようにきつく抱き締められる。

痛みで、少し顔をしかめるが我慢する。

「にこの物よ。これからもずっと離す気はないわ」

似たようなことを誰かに言われた気がする、僕は他人事のように思つていた。

第十話

僕がにこ先輩から詰め寄られてからすぐに絵里先輩は帰ってきて。数分もしないうちに希先輩も帰ってきていた。

にこ先輩は絵里先輩が返ってきたとき、不機嫌な顔をしていたが、僕は見ていないふりをした。

そこをつつくのは藪蛇だと思うし。つついてかまれるのも好きではない。

絵里先輩はすぐに料理に戻り、あつという間に出来上がってしまった。

食卓に並ぶあまり食べたことないロシア料理に、僕の心は踊っていた。

確か得意料理と言っていた、ボルシチとペリメニだったのだろうか。美味しそうな匂いがするそれに食欲は沸いている。

席に着くと、かなりの速さで僕の隣に絵里先輩が座っていた。それに対して二人とも抗議したがっていたが、食事を作ったからという理由で諦めていた。

それに苦笑しながら、いただきますと号令をかけ食べ始める。ボルシチを掬うと鮮やかな赤色のスープと野菜や肉がゴロゴロと入っていた。

確か、先ほど買ってきたスピョークラが赤くする元だっけと思いつつ食べ始める。トマ

トの酸味とビーツの甘みがうまく混ざり合つてとても美味しかった。

絵里先輩によるとビーツが入っていないボルシチはボルシチじゃないとのこと。そんなに変わるものなんだと思ひながら食べる。

しかし、鮮やかな赤色だなあ。この中に血が入ってもわからないぐらい。そう思つていた。

ペリメニは水餃子のようなもので、皮がもちもちしていて美味しかった。

しかし、ボルシチというのはとても赤くできているものだと思つた。中に血が入つていてもわからないぐらい。

なんて。冗談でも思うことではなかったかなと思ひながらスプーンを口に運ぶ。

満足そうに絵里先輩がこちらを向いて笑つている。しっかりと美味しいですよと、感想を言つておいた。

料理はとても満足で、すぐに食べ終わつてしまった。片付けも終え、僕はお風呂を溜めに行く。

それから、団欒の時間があつた。他愛のない話から、三年生でしか聞けない苦労話など。聞いていて楽しい物ばかりだつた。

あつという間に時間は流れて。お風呂が溜まったことを知らせる音楽が鳴る。

僕は寝る準備もあることだし、先に譲ることにした。もちろんレディーファーストの

意味も込めてだけでも。

「どうぞ、お先に入ってきてください。僕は寝る準備をしますよ」

「そう、悪いわね。何だか押し付ける形になってしまった」

「いえ、大丈夫ですよ。ああ、僕の家のお風呂広いで、三人で入っても大丈夫ですよ」
「へえ、そうなんや。普通じゃないんやね」

「僕もそこは謎なんです。なんでか昔から大きかったんですよ。理由はわかんないんですけど」

僕が生まれた時から、お風呂は大きくて。それこそ一家で入っても全然大丈夫であった。

穂乃果ねえ達が小学生の時、一緒に入っても全然広くて。そこが僕の家 of 自慢だった気がする。

大きくなるほどに謎になっていくんだけど。でも今考えるとそこがこだわってるポイントなんだろう。「両親が温泉好きだし、そういうことなんだろう」。

「にこ達が先に入るからって、覗かないですよ？」

「ええ、そりやももちろん。穂乃果ねえ達にきつく言われてますから」

そう言うのと少し残念そうな顔をした。なんとも正解が見つけにくい。まるでパズルを解いているかのようだ。

頭の中がぐるぐると回っている。たけども僕の中のジュークボックスは答えの歌を歌ってはくれなかった。

「とにかく、覗いたりしませんから。ほら入ってきてください」

僕はその場から逃げ出すように二階へと上がった。お風呂場がある場所を行ってないことに気付いたけれど、どうやらわかってくれたようで。

僕が恐る恐る戻ったころには三人ともお風呂に入っていた。

四人分の布団を敷き終えたときにふと、思った。なんだかいつもの癖の様に四人分並べてしまっていた。

何だか四人分引いて一緒に寝るのがまるで習慣の様になってしまっていて。少し苦笑する。

一人分の布団を持って、リビングに卸す。そのまま、全員が上がるのを待たためテレビを見る。

どのチャンネルを回しても面白いものはやっていなかったの、僕は点けっぱなしにしたまま携帯を操作する。

アプリを起動させて、会話している内容を見る。μsと書かれたグループ会話にはいつもの様に会話している皆がいた。

僕はその中には入らずに少し眺めてから、携帯の電源を切る。何というか、誘われた

のはいいのだが喋ることがない。

ここでも男と女の違いと言うものが分かってしまうほどに。独特の空間が出来ているものだ。

テレビを見ると、どうやらバラエティのゴールデンタイムも中盤に差し掛かっていた。華やかに移り変わる画面にめまいさえ覚えた。

「あれ、何してるん？みーくん」

「あ、希先輩。テレビを見ていただけですよ」

「いや、うちが言いたい人はそういう事や無くて。なんで布団がここにあるん？」

「ああ、これですか。いや、僕が寝る用の布団ですよ。さすがに先輩方と同じ空間で寝るのはいけないと思って」

「ええ？そんな事無いと思うけどなあ。そんな仲間外れなの寂しいやん？」

「いや、寂しいって……そういう事じゃないんですけど」

なかなか理解してくれない。何とか論点がずれているというか。そんなことをしている内に二人がやってきた。

「あら、何してるのかしら」

「あ、絵里先輩にここ先輩」

「えりちも寂しいやんな！」

「い、いったい何のことかしら?」

戸惑っている。そりやそうだ。僕は一から説明することにした。

説明しているうちに少しずつ顔色が変わっていた。

「それは駄目よ。湊。別々なら泊まりに来た意味がないでしょう?」

「にこもそれには賛成かしら」

「にこ先輩まで……。はあ、まったく。穂乃果ねえ達と違つて慣れてないんだから勘弁してくださいよ」

同じ女の子だとしても、付き合つてきた年数が違う。

僕からしたら穂乃果ねえ達はお姉さんのようだが、絵里先輩たちは先輩と言う女の子だ。

そう言いたかつたんだけど。僕に権利はないようで、布団を持つていかれてしまった。

僕はそれを見送る事しかできなかつた。その後にもなかつたかのようにしてドライヤールで髪を乾かしていた。

はあとため息をついて、お風呂場に行く。とりあえず、入つてしまおう。

脱衣所のドアを開けると、いつもと違う甘い匂いに戸惑つてしまう。これに関しては穂乃果ねえ達が泊まりに来た時も同じだ。

慣れって言うものはないんだろう。僕が男である限り。

そんな雑念を振り払うかのようにして、服を脱いで脱衣所のかごに入れる。

どうやら絵里先輩たちは服を持って帰るようで、脱衣所のかごには服がなかった。お風呂場のドアを開け、イスに座ってシャワーを出す。

頭からかぶって、頭を冷やす。刹那、占めたはずの脱衣所のドアが開いた音がした。

もしかして、忘れ物でもしたのだろうか。そう思つてシャワーを止める。

水滴が付いている顔を拭いて、問いかける。

「どうかしたんですか？忘れ物ですか？」

返事はなかった。不審に思つたその時、ドアが開いて、バスタオルをまいた絵里先輩が入ってきた。

僕は言葉が出なかった。理解に頭が追い付いていない。だけれども僕の体は意外と動くようで。とつさにタオルで体を隠していた。

艶やかな笑みを浮かべた彼女は、僕に話しかけてくる。

「どう？びつくりしたかしら？」

「あ、え、え？」

「ふふつ、ハラショー。ここまでびつくりしてくれたなら、やった甲斐があつたわね」

そのまま僕にくつつくようにして近づいてくる。肌と肌がふれる。瑞々しい白い肌

が近くにある。

それはまるで宝石の様な艶やかさと美しさがあった。妖艶な体が僕の目の前にあつて。僕の視線は宙を舞っている。

直視なんてできない。そんな度胸なんて僕にあるはずもなかった。だけどそれを許してくれなくて。

僕の両頬を優しく手で包むと、視線を絵里先輩に固定させるように顔を持っていかれてしまう。

「こーら。こつち向きなさい？ 駄目よ、他のところに目を向けるなんて許さないわ」

「え、絵里先輩。駄目ですつてさすがに。僕はこういうの耐性ないんですから」

「あら、そうなの？ じゃあこういうのはどうかしら？」

不意に体を押される。尻餅を付いてしまった僕の胸に収まるかのようにして絵里先輩が寄ってきた。

いわゆる、雌豹のポーズと言うやつだ。長い蒲公英色の髪が水を含んで鮮やかだ。

身体のラインもまるで陶芸品のようで。その一挙手一投足に目を奪われてしまう。

そう言えば、雌豹のポーズを見たときはそうでもなかったのだが、状況によつて変わるという事か。

絵里先輩の手が僕の体に触れた瞬間、引き戻される。どうにも現実逃避する癖を直さ

なくてはいけない。

「綺麗な体ね。傷一つもない、湊の体」

「男の体に綺麗と言われても……。つてか、離れてくださいよ。僕からしたら絵里先輩のほうが綺麗ですよ」

「ほら、こんなにも綺麗なのよ？」

僕の体を指でなぞる。ゆっくりと、丁寧に。それから、首に移って。そのまま僕の首を甘噛みするかのように顔をゆっくりと近付け、首にキスマークを付けるように吸われてしまった。

そこからまるで壊れ物を扱の様に、ゆっくりと僕の胸にキスを落とした。

空間に反響する水音が僕の耳に強く残った。

「っ、何してるんですか」

「ねえ、知ってるかしら？私が胸にキスした理由」

「何ですかそれ。聞いたことありませんよ」

何のことを言っているんだろうか。僕の頭は追いついてくれるどころか、もつと離されてしまった。

僕の困惑しているかを見て、満足そうに笑って。瑞々しいその唇から、言葉を紡ぐ。僕にキスををとしたところを撫でながら。

「首筋は執着、胸は所有。そして——」

僕の唇を指で押す。ゆっくりりと、まるで口づけをするかのように。

「唇は愛情の印。どう？わかったかしら？」

「っ、なるほど。よく知っていますね」

納得をしたふりをしながら、彼女を遠ざけようとする。

だけど、そんなことで来ているなら始めからしているわけで。

肩のあたりに爪でひっかき傷を付けられてしまう。そこから、ジワリと血が出てくる。

それを吸い取られる。まるで猫の様に何度も何度も舐められてしまう。

「嗚呼、湊の血が私の中に混ざっていくのが分かるわ。誰にも渡さない、私だけの湊。もう、どこかに行くことさえも許さないわ」

僕の両目が、彼女のアイズブルーの目とあつてしまう。目をそらすことは出来なくて。

僕は袋小路に立たされたような気分だった。

「ねえ、湊。ロシアにはね、こんな諺もあるのよ？」

一呼吸おいて。僕にそう告げた。

「狼は自分の脚で餌を探さなければならない」

妖艶な笑みが、なぜか僕にはオオカミに見えて。

第十一話

それから、僕は微笑みに魅入ってしまった。様子がおかしいと思ったのか、お風呂を見に来た二人に見つかり。

いつの間にか、僕はお風呂をあがっていた。二人に御咎めを受けている絵里先輩は僕の方を向いて、ウインクして見せた。

僕は何だか恥ずかしくなってしまう。鮮明に思い出しそうになる頭を振ってリセツトさせる。

それでも僕の本心は思い出してしまふ。何だか恥ずかしくなってそつと、僕はその場を離れた。

リビングを出て、玄関へと向かう。寝巻のままだったけれど、構わずに外に出た。

ちよつとした庭に置いてある、イスに座つて空を見上げる。星が良く見えて、さえぎるような雲が一つも見えなかった。

息を吐いて、心を落ち着かせる。昨日と今日に関してはいろいろありすぎた。僕のキヤパシテイが超えてしまっているようなことばかりだった。

どれもが僕にしたら衝撃的で。初めて体験したようなことばかりで。一生を過ぎて

も今日の様な驚くことは中々に体験できないだろう。

そんなことを思っていた。それと同時に僕の脳裏に少し不自然な点が残るような気がしていた。

いや、気がしていたとか、そう言う物ではなくて。僕の中で確定的になって行っていた。

思えばおかしいことばかりだ。僕の中でどうしようもなくぐるぐると回っていたはずの心が少しずつおさまっていく。

だけれど、僕はそれを確かめるほどの勇氣はなくて。どうしようもなかった。

きつと、関係を壊してしまうのが怖いとかそういうことではなくて。その真実を知ることがただ単純に怖くて。

知ってしまったえば、戻れない気もするから。なんて、思っていた。

そう考えていたら、玄関が開く音がした。僕はとっさにそちらの方を向くと、希先輩が僕に向かって笑いかけながらこっちに向かっていた。

「あ、希先輩。どうかしました?」

「どうしたやないよ。もう。みーくんが急にいなくなるから、心配したやん」

少し頬を膨らませ、怒ったようなふりをしている。僕は何だか可笑しくなつて笑つてしまう。それと同時に希先輩も噴出したように笑った。

少し考えていることが和らぐ。ああ、そうだ。こんな感じで僕はゆつくりとやっていきたいんだろう。

希先輩はそのままテーブルを挟んで向かい合わせに座る。

「すいません。ちよつと、考え事をしていて」

「へえ、考え事なあ。それって相談できない悩みなん？」

と、僕の目をのぞき込むようにして言う。相談は、できないことだ。

これは僕らの事だから。相談しては意味がない。

「ええ、ちよつと。まああんまり大したことじゃないんですけど」

そう言つて濁す。本当は大したことなのにわざとそう言つておく。詮索されたりしたくないからだ。

希先輩は残念そうな顔をしたが、すぐに何か思いついた顔をして僕に告げる。

「それなら、これから先の事とかはどう？これなら参考ぐらいにはなるんやない？」

確かに。そうかもしれない。できればそのことに対する自信もつけたいことだし、本当に当たるから参考になるかもしれない。

僕はそう思った。軽々しくお願いするのはどうかとも思つたけれど、今では少しでも後押しがほしかった。

「じゃあ、お願いします。希先輩」

「うん、任せてな！」

どこからともなく笹竹とカードなどを取り出した。と言うより、ポーチに入れてあったらしい。

僕の目の前にはあつという間に簡素的だが星の見える占い屋が出来ていた。

希先輩は慣れた手つきでタロットカードを混ぜ、三角形になるように三つ置き、さらに真ん中に置いた。

確かこれは大三角の秘宝法とかいう方法だったか。まあどうでもいいのだけれど。

そのままゆっくりと捲っていく。なんだかドキドキしてしまう。

「一枚目は、恋人の正位置やな。これにはいろいろな意味があるんやけど、恋愛とかのほかには絆とかいう意味もあるんや」

そう語りながら、二枚目を開ける。これは、隠者の正位置だろうか。

真剣な顔をしている、希先輩が目映る。

「隠者の正位置、やね。慎重だとか、思いやりとか言われてるんよ」

そして、そのまま三枚目へと移る。タロットカードをなぞるように捲る手付きに目は釘づけにされていた。

「月の、正位置。不安だとか、幻惑を意味するんよ。もちろん違う意味もあるんやけどね」

三枚を捲り終わる。その時点で、希先輩が僕に告げる。真剣な目で僕を見つめてい
る。

なんだか言葉にできない不安が僕を襲った。こういう占いなんかじゃよくある雰囲気だ。

「今のところやけれど、絆や試練への克服——つまり、今考えている悩み事やな。これに慎重でいると、不安なままで猶予ない選択を迫られることがあるかもしれんよつてことやな」

「っ。そう、ですか」

思いつく点でいっばいだ。こども当たつてしまうとどうしようもなく今考えていることが崩れていくような感覚に襲われる。

これは、どうしたら良いのだろうか。このままではいけないってことだろうか。

そして、希先輩は僕の顔を見ると。静かに真ん中のカードをめくった。

「吊るされた男の正位置。これは、自己犠牲や忍耐を示すカードやね」

「つてことは——」

「そうやなあ、この状態にならへんためには自己犠牲も問わずに動いたほうが良いってことやろうね」

つまりは、僕のこの悩み事は早々に決着をつけたほうが良いということだ。

僕の中にすとんと落ちていく。

「どうやるか？参考になつたやろか」

「ええ、そりや勿論。ありがとうございました」

「そう、それならやつた甲斐があつたもんやなあ」

そう言いながら片づけしていく。慣れた手つきで片付けている時、僕に希先輩が語り掛ける。

「でも、みーくんの悩みが解決できてよかつたなあ。うちも皆に打ち解けるためにやつとつた占いが役に立って嬉しい限りやん」

「そう、なんですか。占いも趣味のうちとかじゃなかつたんですか」

「うーん。そういうわけでもないんよ。うちには昔つから竜神さんやらおキツネさんやらぎよーさん見えてなあ。皆が告げてくれるんよ」

僕はこういった類の話はあまり得意ではないのだが、希先輩の話に至つては聞かざるを得ないような。

そんな不思議な気がする。僕は相槌を打つて次の言葉を聞く。

「だから、みーくんの居場所とかわかるんよ。どこに行つても、どこで何をしてても、うちにはお見通しなんよ？」

「……えっ？」

「ふふふ、わからへんかな。ほらまたそうやって、うちから逃れようとするやん？」
体が勝手に後ずさりする。僕の意味とは無関係に、だ。指摘されて初めて思う。

しかし、何だか変な感じだ。僕の意味では動かないで思っているのに。初めて体験している。

「別のこと考えたらあかんよ？なあ、みーくん。聞きたいことがあるんやけど」

「っ、なんですか？」

「どうして、うちから逃げようとしたん？あんだだけ一緒にいて、一緒に過ごしてきたやんか」

「まだだ。この話ばかりされてしまう。何だよ、それ。思ったことなんて——。」

「そう言いながら、少し引つかかる。何だか、大切なことを忘れているような。」

「何だっただろう、僕は何を見逃しているんだ？」

「……分からないです。どうしてそんな事言われるかも、理解できない。僕はみんなから言われて、離れる気なんてないのに」

「なあ、みーくん。本当にそう思ってるん？思ってることとうちらが感じてることって違う物なんよ？」

「思ってるものと、感じるものの違い……？何ですかそれ——」

「刹那、頭の中ではじける。ぐるりと僕の中で駆け巡る感じがする。ああ、そういうば。」

でも、そういうことなんだろうか。本当に？

「……もしかして、みんながアイドルだから距離を取っていかなくちゃって、ことですか？」

「そう、そういうことや。うちらはめっちゃ寂しかったんよ？みーくんがどんどん遠くに行ってしまうからなあ」

「でも、そんな事で？そんな事当たり前だし、離れてても僕は忘れることなんてしませんよ？」

「そうだ。一言僕に言ってくれば僕も考えられたのに。こんな大がかりなことをして気付けなくっても。」

「なんだか気が抜ける。びっくりしたこともあつたからだろう。」

「そこを感じる違いなんよ。うちらはもつとずつと一緒においてほしいのに。みーくんが離れて行ってしまふ未来なんて想像したくないんよ」

「そう、なんですか。それならそうと一言言ってくればいいのに。というかよくみんな手伝ってくれましたね」

「ふふふ、うちが占いでそういう未来があるかもしれんなあつて言ったら一発やつたで？」

「あはは、希先輩の占いはよく当たりますから」

笑いあう。そうやり取りをしながら、僕はまだ納得していないことがあって。僕は立ち上がって希先輩に告げる。

「それじゃあ、家に入りましょう。そろそろ肌寒くなってきましたし」

「そうやね。今日はいっぱいお話しよか！」

「いいですね。僕はホットミルクでも作りますよ」

そう言いながら、目を盗んでメールを送る。

要件は簡単に、場所と時間だけにする。即座に携帯をポケットの中に戻す。

「今日は長くなりそうやね——、みーくん」

僕の後ろで希先輩が笑う。吊るされた男のカードの後ろにいる悪魔の正位置のカードに気付かずに。

最後のお話

虫の声が聞こえる。静かに寝息を立てているのがわかるほど静かだ。

時計は、夜更けごろを指している。僕は布団をかぶり中で携帯を見る。そろそろ時間だ。

メールに新着の知らせが出ていたけれど、確認する必要もなかった。

絶対に来てくれると言う、確信があるからだろう。僕はゆっくりと布団から出て、寝ている三人を起こさないように部屋から出ていく。

階段を降り、玄関を開ける。夜とはいえ夏に入ってきている今の季節では、寒くはなく、蒸し暑さを感じるほどであった。

音をたてないように玄関のドアを閉め、鍵をかける。そこから、公園へと歩いていく。僕らの、思い出の場所へと。

思えば、こんな話をするなんて初めてかもしれない。ましてや、今から話すことでさえも経験なんてなかった。

どうしようもなく、心臓がはじけそうなくらい痛くなってくる。こんな真面目な話なんていつ振りだろう。

僕は少し思い出に耽る。足は止めずに歩いていく。

スクールアイドルになるといった頃だろうか。それとも僕が倒れた時？

それとも……。僕の思い出は止まることを知らず、色々な思い出がめぐる。

そのうち、公園についてしまっていて。僕はベンチに座って待っていた。

時間は、十二時半。携帯を開いて時間を確認し、気持ちを落ち着かせる。

ふと、公園の入り口に目を向けると姿が見えた。

「いきなり呼び出してごめんね。穂乃果ねえに海未ねえ、ことりねえ」

「ううん。大丈夫だよみーくん」

「海未ねえは出ても大丈夫だったの？僕からメール送ったから、こんなこと聞くのもおかしいかな」

「ええ、苦労しましたけど、他ならぬ湊のためですからね」

「そっか。ありがとう」

そう言つて、三人にベンチへとエスコートする。僕は立つ形になってしまったけれど、それも予想の内だ。

息を整えるために、深呼吸をする。いつもと違って、あまり心臓は収まってはくれなかった。

まるで、爆弾の様にいつ爆発してもおかしくはないかのように、一触即発な僕の心臓

を撫でるかのようにして落ち着かせる。

さて、どう切り出そうか。

「それで、湊。私達を呼んだ理由は何でしょう？何時もならこんな時間に呼び出したりなんてしてないでしょうに」

「そうだよ、みーくん。穂乃果びつくりしちゃつて、雪穂に可笑しそうな目で見られたんだから！」

「あー、うん。ごめん。ちょっとばかり聞きたいことがあつて、さ」

「ん？どうかしたの？」

「みーくん？何かあつたの？」

「うん。きつと、僕にしたらとても大切なことなんだ」

息を吸い込む。ここからだ。

占いだつて、動かなくちやいけないつて出てたんだし。いつものようにひよつてたんじや駄目なんだ。

「ここ数日のことなんだけど。皆、僕の家に来てくれてたよね。僕は最初あんまり意味は分かつてなかつたんだけど」

「ええ、確かにそうですけれど。——それについて、何か？」

「あ、うん。そうなんだ。さつき、希先輩から理由について聞いたんだ。皆がスクールア

アイドルでいるために、僕が距離を取るのは違うってこと」

「うん。みーくん、私達に一言も相談しないんだもん。とつても寂しかったんだよ？」

「それで、穂乃果が皆に言って協力してもらったんだ！」

「……。そう、なんだ。僕は痛いぐらいに気付かされたよ」

「そのことを言いに来たのですか？嬉しいですけど、何も今呼び出さなくても」

三人はとて嬉しそうな顔をして、僕に笑いかける。

でも、僕は笑うことは出来なくて。むしろ、ここからが本題なんだから。

僕は少し息を吸って、また話をし始める。

「……、痛いぐらいに気付いて、それでも僕には何かが残ってるんだ。ねえ、皆は少し昔から僕のこと隠し撮りしてたんだよね？」

「あ、うん。ごめんね。みーくん。また前みたいに倒れちゃったらどうしようって思ってた」

「穂乃果達も知ってて、止めなかったんだ。ごめんね」

「ごめんなさい。本来なら私が止めるべきでしたのに」

「僕が倒れた時からなんだね」

「うん。そうだけど……どうかしたの？」

「いや、なんでも。そう言えば、こここの公園も懐かしいね。僕が中学生の時、皆とここで

待ち合わせしたっけ」

「え、うん。そうだね。穂乃果達が終わったらここに集合って言ったんだっけ」

「そうそう。皆と学校違ったから、よく先に来て待ってたんだ」

「どうか、したのですか？」

僕に疑問を持ったのか怪しむような目線で僕を見る。僕はなるべく笑って受け流す。笑えているかどうか分からないけれど。

「うん。あのさ。どうしても繋がらないんだ。やつぱり。ことりねえは僕が倒れた時って言うってたけど、凜ちゃんも昔と昔って言うってたんだ」

「え、む、昔の、小学生の時の写真とかだよ？」

「昔のみーくん可愛かったもんね。覚えてるよ」

「違うんだ。違う。僕の、中学生の時のデータが、残ってたんだ。よく遊んでたからとかじゃなくて、部屋の映像が残ってたんだ」

僕のパソコンで確認したから間違いない。データがいくつか残っていた。それもどれも、僕の中学生の時の映像だった。

どうみても、僕の部屋だった。僕はゆっくりと目を見る。そこには三人とも動揺が見て取れた。

「それにね。僕が未だに分からないことがあるんだ。穂乃果ねえ達が泊まりに来た時。

僕は学校から帰ってから記憶が曖昧なんだけど、僕の頭に一つ残ってるんだ

そう。曖昧な記憶に、残ってた物。それは、ことりねえの声だった。

優しく、蕩けてしまいそうになる声。僕が僕の頭に残ってたんだ。

「ことりねえの声と、抱き締めてくれたような気がするんだ。堕ちてしまいそうなほど優しく」

「……。みーくんは気付いてたの？いたことに」

「うん。なんとなくだけけれど。でも声が聞こえたんだ」

「湊。それは——」

「待って、海未ちゃん」

「っ、穂乃果？」

何かを言おうとした海未ねえを穂乃果ねえが止める。僕を見る目線は、とても力強く。何かを決意したような目だった。

僕は、少し固唾を飲むほどに、何かを感じていた。

「みーくんは、分かったんだよね。分かっちゃったんだよね。何かがあるってことに。それが知りたいんだよね」

「……。うん。きつと、僕が皆とまた元に戻るためにも、知らなきやいけないことだから。だから——教えてほしい」

そうだ。僕が決意したんだ。何があっても知らなきやいけないことがあるんだと。皆を想っているからこそ、知らなくちやいけないことに。

僕がそう言うのと、穂乃果ねえは二人をみてアイコンタクトを取ったのか頷いて僕を見る。

「みーくんは、覚えてる？穂乃果達と遊ぶようになってから、中学生に上がる時のこと。穂乃果達は先に中学生になって——みーくんとあまり遊ばなくなった時のこと」

「え、どう、だったかな。ちよつと曖昧であんまり覚えていないけれど、でも確かその時はどう接していいのか分からなかったかなあ」

靄がかかったように思い出せないけれど。小学生からしたら大人になってしまったようで。恥ずかしさと同時に遠くに感じてしまった気もする。

よくあることだ。きつと思春期の入りたてだったんだらう。

すると、今まで黙っていたことりねえが喋り始めた。

「私達は、また遊べるんだって思ってた。みーくんが中学生になったらって。でもみーくんはあんまり私達と喋らなくなっちゃったよね」

「それは、僕は違う中学に行っちゃったし。それに、まだ覚えてるかどうかも分からなかったんだ」

きつと昔の僕のことだから、気にはなつてたけど行く勇氣はなかったんだ。まるで違

う人の様に感じてしまっていたし、中学生ともなればそういう事にも敏感だった。

僕の悪い癖だ。直さなくちゃいけない癖が二つもできてしまった。

「それでね。私達が会いに行つたこと覚えてる？」

「そんなことあつたつけ。なんか急に遊ぶようになったことしか覚えてないんだけど」

「そつか。その時ね、思つたの。ああ、また毎日遊べるんだーつて。でもね、みーくんは思つてなくて。私達に言つたの。『またいつか遊ぼうね』つて」

「え、それは言葉の綾なんじゃ」

「ううん。私達は壁を感じたの。まるで昔のみーくんじゃないみたいだつて」

それは、どうなんだろうか。でも、僕にはそれを違うと言えるような確信はなくて。

昔の僕ならそう思つてたのかも知れない。疑心暗鬼な気持ちが僕を埋め尽くして行く。

けれども思い込みが激しい気もしていた。それを言葉にはできなかつたけれど。

「それで、思つたの。元に戻つてくれるにはどうしたらいいんだろうつて」

刹那、隣で俯いていた海未ねえが僕のほうを向く。ことりねえが微笑んで、話すのをやめる。

そうしてゆつくりと言葉を紡いでいく。

「私達はそれから、話し合つて——そうして、一つの答えを見つけたんです」

何だか、聞いてはいけないような気がした。聞いては戻ってこれないような気もする。

だけれどももう逃げることは出来なくて。僕は不安定な足場にいなながら最大の問題に立ち向かうだろう。

そうして、まるでスローモーションかのように僕の耳に一言ずつ入ってくる。

「だったら、私達のことしか思えないようにしたらいいんじゃないでしょうかと」

「つ、そうなんだ。でも無理じゃないかな？僕にどうやって——」

「ええ。ですから、ある方法を利用したのです」

「ある、方法？何それ、どういうこと？」

僕は問いたただすように聞く。すると三人がゆっくりと僕に向かって笑いかける。

けれどその笑みは笑っているように見えなくて。瞳が引き込まれそうなほど光を写して居なかった。

そうして、穂乃果ねえが口を開く。僕に教えるかのように、一言一句をしつかりと。

「それはね。洗脳したんだ。みーくんを、監禁して」

「え、あ、え」

言葉が出ない。聞き間違いだと、僕の意思が言うけれど。それは本当のことで。

僕の理解が追い付かないうちに、次々と話し始める。

「みーくんは穂乃果達と急に遊ぶようになったって言ったよね？その間の記憶ってあるかな」

「ない、よ。昔の記憶だし、覚えてない」

「だよ。でもその時はね、学校にいる以外はずっと穂乃果達といたんだよ？みーくんのお父さんもお母さんもよく仕事で帰ってくることあんまりなかったもんね」

「その間に？僕が受けたって言うの？おかしいよ、僕が受けたならそのときだって覚えてたはずだし。それにどうやってそんなやり方仕入れたのさ」

「やり方はね、ことりちゃんのお母さんが持ってた本に書いてあったの。最初良く分からなかったけど、とつても効果があるものなんだって分かったし」

「びつくりだ。ことりねえのお母さんが？でも、そう言えば、ことりねえの家に行った時も父親の姿を見たことがなかった気がする。」

「泊まりに行った時もそうだったかもしれない。でも言われないと気付くことなんてできない。」

「そんなこと分かる筈もなかった。」

「それに、記憶がないのは穂乃果達がそう決めたからだよ。だから、穂乃果以外の人といると罪悪感とかいろいろ感じるようになって、ずっと一緒にいれるようになったんだ」

「そう、なんだね」

もう、聞いていられなくなりそうだ。まるで僕の存在が否定されるような気分になる。

このまま倒れてしまいそうになるけれど、話はまだ続くようだった。もう、聞きたくもないのに。

ことりねえが僕の手をつかむ。びっくりして振り払おうとするけれど、体は動かなかった。

「ほら、みーくん今、私の手、振り払おうと思っただけど払えなかったね。ずうっと私達のことを思うようにしてたから拒否できないの」

「っ、そんなの」

「でも、ほんとはね。振り払うことも思わないはずだったの。ことり達は安心して、やめちゃったからかな。高校生になって、μ、sの活動を始めてから少しずつ元に戻って行っちゃったの」

「え?」

「みーくん、高校生になって。私達以外の友達、作っちゃったよね。協力してくれるのも私達じゃなくてμ、s皆のためだったよね」

僕が中学生の性格を変えたんじゃないやなくて、洗脳が切れ始めてたからそうなたただけでことなんだ。

もう、理解できない。感情がどうにかなってしまいそうなほど、動き回っている。どうしたら良いのか分からない。分かりたくもない。

もう片方の手を、海未ねえに握られる。僕はもう抵抗する気もなかった。

「私達はそれに気付いた時にはもう、遅かったのです。湊の言っていた悪い癖と言うのは、徐々に解けかけている合図でしたから」

「僕の、悪い癖？それって——」

「そうです。現実逃避する癖。それは、二元の意識が戻ってきているということです。いわゆるペンキがはがれ始めているという物でしょうか」

「あ、え」

僕の人格は作られたものってこと？じゃあ、僕の元はどこに行ったんだ。

そもそも僕は僕なのか。僕は——。

「私達はどうにかしなければ、また離れてしまうと思っていました。現に私達が朝いかなければ会わない日だってあったのですから。でも嬉しい誤算もありました」

「誤算？どういうこと？」

「μ、sの皆さんが少なからず、湊に好意を抱いている。それは私達からしたらまたチャンスが出来たということですよ」

「チャンスって……皆が頷いてくれるわけないでしょうに」

そう自虐的に言うのと、穂乃果ねえが僕の胸に抱き着いてくる。満面の笑みはいつも見た穂乃果ねえの笑顔で。でも、笑っていないようにも見えて。

僕は、どちらを信じればいいのかわからない。そう思っていると、ことりねえにさらにきつく握られる。

「私達は皆に言ったの。しっかりと昔のこともちろんと伝えて。それで、皆が争っている間に、どこかに行っちゃうかもーって」

「どこかについて……。僕はそんな事しないよ」

「そうかなあ。でも皆はそう思わなかったみたい。誰かに奪われるぐらいならって皆が協力してくれたの。でも、そうだよ。いなくなっちゃったら、私なら死んじゃうもん」

「ことりちゃんだけじゃないよ。穂乃果も、海未ちゃんも、皆そうだよ。みーくんがいなくなるなんてありえない。いなくなるなら、死んじゃったほうがいいよ」

「つ、じゃあ、あの僕の家に泊まる出来事も？」

僕の家に泊まる引き金になった出来事。僕が気を抜いていたから分からないけれど、A—R—I—S—Eの表紙を見てしまった時のことだ。

あれも協力して、仕組んでいたってことだろうか。

「かよちゃんに持ってきてもらったんだ。本当はきつかけなら何でもよかつたんだよ

「？」

「そっか。通りで皆の反応が早いはずだ」

元々その日に決行することは決まっていた。僕がたまたま表紙をほめたからなんだろう。

と言うことは、どうやろうと逃げれなかったんだろう。

それを考えているうちに僕はどれが仕組んだものなのか分からなくなってきてしまった。

「ほんとはね。最初に泊まった時、みーくんを元に戻そうとしたんだ。でも失敗しちゃったから、皆にかわりがわりで来て貰うことにしたの」

「それって、僕がことりねえに抱き締められた時の？」

「そう。直接、今まで通りで大丈夫かなって思ったんだけど。穂乃果が思うよりみーくんは離れてちゃってて。だから時間を決めて交代することで、刷り込む形に変えたんだ」

僕の中の穂乃果ねえの像が壊れていきそうだ。もつとピュアなはずだったのに。

僕の知らないところで皆は変わってしまったって知っているんだということを知ってしまった。

そう思っている間に、三人ともまるで宝物を扱うかのように、ぎゅつと握られてしま。僕を上目遣いで見るかのような感じになってしまっていた。

僕は少し後ずさりする。体に必死で逃げようとしても動かなかつた。

「ねえ、みーくん。穂乃果、最初に言ったよね？ずっと傍にいてるって」

「私達、もうみーくんがまた離れてほしくなんてないんだよ？」

「湊はどこにも行きませんかよね？」

「っ、僕は」

今更、戻りたいと思うのは過ぎたことだろうか。希先輩の占いも仕組まれてたのかな。僕は僕何だろうか。皆は僕の何を知ってるんだろうか。僕は逃げたいのだろうか。

体は動いてくれない。感情がもう定まってくれない。頭が痛い。僕は元に戻りたいんだっけ。元に戻るってなんだっけ。

僕は、僕は、僕は。

僕はこんなこと望んでないのに。

「――」

「え」「うそ」「みーくん？」

「みーくん」「私の」「好き？」

「どうして」「どこに」「逃げ」

「どこ」「カエルの」「ミークン」「ネエ」

声がぶつ切りでしか聞こえない。認識できない。ここにいたくない。僕じゃない。僕のことを好きなんじゃない。

僕の姿をしたダレカを好きなんだ。死にたい。死ねば、誰かが肩代わりしてくれるのかな。

逃げたい。逃げたい。逃げたい。逃げたい。楽になりたい。

言えば楽になるのかな。じゃあ、言ってしまうかな。

「ぼくはきらいだ。ぼくじゃないぼくがすきなら。ぼくはみんなきらいだ。きらいなんだ」

「そっか。残念」

「え」

後頭部に何か痛みが走る。立てなくなつて、倒れる。意識が朦朧とする。ぐらりと横になつた世界に、うつすらと皆が見える。何か話している。聞こえてくる。

「穂乃果は焦りすぎなのよ」

「ごめんね、皆。失敗しちゃつた」

「えりちはずつと心配してたもんなあ。ばれるんやないかーつて」

「凜もそう思うにや。わざと中学生の時の映像を残すなんて勘ぐられたら終わりにや」

「うう、そうかなあ。みーくんのことだから大丈夫だと思つただけだなあ」

「そ、それより。みーくん大丈夫かなあ。け、結構強かつた気も」

「大丈夫じゃない？死ぬような殴り方じゃないし。て言うか死なせるわけないじゃない

「い

「で、でも。真姫ちゃん」

「わかつたわよ」

「てか、殴つて倒すなんて結構野蛮よ。にこ、びつくりしたじゃない」

「し、仕方ないじゃない。希が私が一番運がいいからつて」

「んー？そんな事いつたやろかー？」

「ち、ちよつと！」

「にしても、湊はほんと可愛いわねえ」

「もー絵里ちゃんがいなくなつたから、あの時は焦つたよー。私急いでみーくんに電話したんだから」

「ごめんね。ちよつと抜け駆けしちやつた」

「ほら、皆さん。喋つてないで湊を運びますよ。誰かに見られるかもしれません」
皆が返事をして、僕を持ち上げる。抵抗したいけれど、力が入らなくて。

僕は、そのまま気絶してしまった。

る。
日差しがまぶしい。ゆっくりと目を開ける。いつものように、僕は目覚まし時計を見

時刻は七時を少し過ぎたぐらいだ。ゆつくりと目を開け、布団から出る。

眠気眼のまま、僕はリビングに向かう。そこにはいつもの様に料理をしている、穂乃果ねえ達がいいた。

「おはよう。穂乃果ねえ、海未ねえ、ことりねえ」

「あ、みーくん。おはよう」

「おはようございませす。湊」

「みーくん、おはよー!」

僕は席に座る。もう準備は終わっていて、後は僕を待っていたみたいだ。

僕が席に着くと、すぐに三人とも席について。

いただきますと号令をしてから、食べ始める。ここから僕の一日は始まっていく。

会話をしながら食べ、片付けをして。歯を磨きに行く。

歯を磨いている際、何気なく洗面台を見る。

すっかりと色分けされた九つの歯ブラシがそろって綺麗だった。

全員で支度を終え、家を出る。

学校に行く途中の分かれ道まで、一緒に登校する。

僕達は皆と他愛のない話をする。

「あ、そう言えば、食材もうなかつたつけ。真姫ちゃん達と買い物に行つてこなきや」

「それじゃあ、穂乃果達が伝えておくね」

「うん、お願い。早く終わったら迎えに行くって言うておいて」

「はい」

「ねえ、みーくん。私、お願いがあるんだけど……。今度の日曜日シヨツピング付き合つてくれない？」

「いいよ、ことりねえ。てか、多分海未ねえと穂乃果ねえも一緒でしょ？何か買うの？」

「水着買いに行くの！」

「ええー！き、聞いてませんよそんな事！」

「だつて言つたら海未ちゃんこないじゃん」

「そ、それは……」

どうやら凶星だつたようで、言葉が尻すぼみになる。

それが可笑しくて、笑つてしまう。

すると、ことりねえが僕をうるんだ目で見ている。なんだか嫌な予感がする。

「ねえ、みーくん。キス……してほしいな？」

首をかしげる。その仕草に顔を赤くしてしまう。

僕は未だにこういうことは慣れていない。

「ずるいよー！ことりちゃん！」

「こ、ことり。その、人の往来がある場所では……」

「だ、駄目だって。そういうのは」

僕は声が裏返りそうになるが何とか押しとどめる。そう言うと残念そうに、従ってくれる。

何とか、助かったらしい。

僕らは、また歩いていく。学校との分かれ道が近付いて来たとき、穂乃果ねえが僕に告げた。

「みーくん！これで元に戻ったね！」

僕にはどういう意味だか分からなかった。

外伝、短編集

μ, s から見たお話 高坂 穂乃果の場合

変わりゆく季節に、変わりゆく環境。

全てが変わっていった、新しくなっていく。でも、変わらないものもあって。

それは、友情とか生活とかもそうだけど、それよりも大事なこと。きつと、自分の中にある気持ち。

ずっと一緒にいたいって気持ちなんだ。それは、思っているだけじゃなくて。そうじゃなくちや嫌なんだ。

これは、そんなことを思っている私、高坂 穂乃果のお話。

放課後。μ, s の練習が終わって着替えをしている。今日もいっぱい踊って歌って、どんどんと上達していくのが嬉しい。

きつと、その嬉しいはその事だけじゃないんだけど。携帯を取り出して、画面を見る。新着メールが一つあった。

みーくんだ。どうやら向こうも学校が終わったらしい。きつと、みーくんのことだから迎えに来てくれるんだろうか。

なんだか、穂乃果の顔は赤くなってしまっ。これじゃあ恋人みたいだなんて——。きつと向こうはそんなこと思っていないだろうけど。

にやにやしていると、それに気づいた絵里ちゃんが話しかけてくる。

「あら？ 何だか、嬉しそうね。何かあったのかしら」

「うん！ 今日みーくんが家に来るんだ！ 久しぶりだから穂乃果嬉しくて」

「え、二人つきりなのかしら？」

「いえ、打ち合わせなので私とことりも行きますが」

「もーばらさないでよ、海未ちゃん！」

そう、打ち合わせのために来ることになっていて。いつもの四人で話すことにしたんだ。

といつてもその内容は後で皆とスカイプを使って内容を話すんだけど。それならみーくんも自分一人でもいいよなんて言いそうだから、無理矢理家が近いってことで穂乃果の家に集合ってことにしたんだ。

でもとつても楽しみで。今日一日楽しくてハッピーな気分なんだ！ 着替え終わって、皆で校門まで行く。ふと、校門に目を向けると携帯を手に持ちながら待っているみーくんが見えた。

やっぱり待っていてくれることが嬉しくて。急いで走って行った。

「みーくん！」

「お、来た。結構速かったんだね、もうちよつとかかるかなって思ってたよ」

携帯をしまってこつちを向いて笑う。そして、後から来た皆に挨拶をしていた。

言葉を交わし終わると校門で別れる。海末ちゃんことりちゃんは一回家に帰って

から来るらしくて。

帰り道は自然と穂乃果とみーくんの二人つきりになった。嬉しくなって顔が綻んで

しまう。

不思議に顔をこちらに向けてくるみーくんが可愛くて。何だかいつまでも見てしま

いたくなるほどに。

そうして穂乃果がニコニコしてたらみーくんが喋りかけてくる。

「どうかしたの？何か嬉しい事でもあった？」

「うん！久しぶりに喋りながら一緒に帰るなあって思ってた！」

「あー、そっか。確かに久しぶりだね。最近忙しかったし、μ'sの練習とかもあった

から」

「最近一緒に帰ることなくて、寂しかったんだよ？」

「……。そう、だよな。ごめん、僕のほうも忙しくて」

ぎこちなく、頭を撫でられる。やつぱり違和感を感じる。昔ならもつと自然に優しく撫でてくれた。昔、と言っても数か月前だけだ。

それでも小さいころから撫でられることを強請ってきた穂乃果からしたら、とても不自然に思えて。それでも今は気にしないことにするんだ！

だって、みーくんが家に来るなんてほんとに久しぶりだし、こっちの楽しみのほうが勝っちゃうからしょうがないよね！

撫でられていた手を両手でとって手をつなぐ。一緒に、離さない様に。

「ううん、知ってるよ。みーくんが頑張ってくれてるの。穂乃果わかるから、無理しないでね？」

「あ……はは、うん。ありがと穂乃果ねえ。体を壊すような無理はしてないから大丈夫だよ」

「そっかー！じゃ、早く穂乃果の家に行こー！」

手を引っ張っていく。苦笑しながらもついてきてくれているみーくんがとっても愛しくて。

このまま一緒に居ればなあ……なんて。冗談だけど本音も交じってしまう。

誰にも渡したくない気持ちがあるんだけど、でもみーくんの事が好きな子はいっぱいいて。

きつと穂乃果じゃなくて誰かを選んだならきつと耐え切れないから。ううん、穂乃果だけじゃなくて皆だけど。

だから皆が幸せになるような方法なんて一つしかなかったんだ。きつと。これが幸せだから。

家に着くと、穂むらの扉を開ける。店番をしているお母さんがいた。

「ただいまー！」

「あら、お帰りなさい穂乃果」

「お邪魔します」

「あら、みーくんいらっしやい。なんだか久しぶりねえ」

「そうですか？あんまり感じないんですけれど」

と言って、みーくんは苦笑する。どこか気恥ずかしそうにしていた。

自分でも思う所があつたからなのかな、なんて。

少し勘ぐつてしまう。きつとこれも最近一緒に帰ってないからだ。うん、多分。

「そうよ。ここの所全然来なかつたじゃない」

「あはは……忙しかったものですから」

「まあ、そうよね。みーくんも高校生になったのよね」

お母さんが昔を懐かしむようにして、目線を上にあげる。

どれ程遡ってるのかは分からないけれど——きつと、穂乃果も覚えてないような昔のことには違いないはず。

すこし、と言うかほんの数秒ほどでその時間は終わってしまったけれど。

「あ、どうぞ上がって。穂乃果、おまんじゅう持っていきなさい」

「ええー！もう餡子飽きたようー」

「ああ、そんな大丈夫ですよ」

「こらーこの間も言ったけれど、和菓子屋の娘なんだから飽きたとか言わないの。みーくんも遠慮しないで」

お母さんに怒られる。そうは言っても飽きたものは飽きたんだからしょうがない。

ぷくーつと膨れる。たまには他の物だつて食べたい。

「じゃあ、お言葉に甘えて。すみません」

「いいのよ、そんな事。息子のように思ってるんだから、ね？」

「あはは……ありがとう、ごさいます」

「それと、穂乃果。ちよつと頼まれごととしてくれないかしら」

「う」

なんだか嫌な予感がする。お母さんがこういう言い方をするときは大体決まって――

「お店のことなんだけど」

的中した。多分だけど店番、かな。

少しすまなそうな顔をしながらお母さんが言う。

「店番、頼んでもいいかしら。ちよつと用事が出来ちゃったの」

「うう、分かったよう」

渋々ながら了承する。お母さん以外に店番をできるのは穂乃果しかいないから。

雪穂はまだ中学生だし……、ちよつと不満だけど。

折角、みーくんが来てくれたのに。これじゃあ意味ないじゃん。でも、しょうがない

かあ……。

「えつと、じゃあ。みーくん先に穂乃果の部屋に行つて？穂乃果も後ですぐ行くから」

「あ、うん。りよーかい。じゃあお邪魔するね」

と言つてみーくんが奥に消えていく。すぐに割烹着を取り出して着る。

着替えている時に、お母さんがにやにやしなからこつちを見ていることが分かった。

何か、用なのかな。

「ね、穂乃果。みーくんとはどこまでいったのかしら」

「うええええ!!」

なんだか真姫ちゃんみたいな驚き方をしてしまった。

なんてことを言うんだろうか。まだ進んでもいないのに。

いや、そのままだって言うのは言葉の綾であって。好きだけど、どうしたらいいか分かんなくて。

ことりちゃんや、海未ちゃんとか皆と相談しているというか。

色々と考えてしまう。あたふたと言葉に詰まる。そんな姿を見てお母さんが笑った。

「その様子じゃまだまだみたいね」

「もう！びつくりさせないでよ」

「そうかしら。穂乃果だってみーくんのこと、好きなんでしょう？」

「それは、そうだけど」

好き。ううん、大好き。きつとみーくんがいらないなんてことありえないくらいに。

だけど、この思いは伝えたらきつと壊れてしまうような——そんな思いなんだ。

伝えきれないことにもどかしさを感じてしまうけど。きゅつと胸のあたりを握りしめる。

「伝えられないことだってあるんだよ」

「……そう」

「だから、きつと」

今は、ただ。この瞬間を感じていたいから。

伝えることはまだ、やめておこう。苦しくて切ないこの思いを閉じ込めるために。
穂乃果は、穂乃果であるために笑うんだ。

μ 's から見たお話 南 ことりの場合

初めては会ったのはいつだったか忘れてしまったけど。私がみーくんに初めて会った時、抱いていた感情は怖いだったと思う。

まるで、カモの中に白鳥がいるような。何とか浮いているとかじゃなくて、周りの男の子たちと違う雰囲気が出ていた。

あんまり難しい事はことりには分からなかったけど——でもどう接していいか分からなかったかな、なんて。

それから、穂乃果ちゃんや海未ちゃん達と出会って。それから、毎日のように遊ぶようになってから、少しずつ分かっていった。

みーくんは和菓子が好きなこと。じゃんけんが強くないこと。中で遊ぶほうが好きなこと。いつもことり達を見守ってくれてたこと。

笑うと可愛い事。友達思いなこと。ちよつとだけ意地悪なこと。それから、それから、それから——。

一杯在りすぎて数えきれないほど、みーくんのことを知って。いつの間にか“怖い”だなんて感情はとつくに消え去っていて。

みーくんは私の……、ううん。私たちの中で欠けてはいけない存在になっていったのかな。

風邪で学校に来なかった時も私達は心配でしようがなかったと思う。みーくんは来ない、どうしよう、なんて。

そんな心配性の、南　ことりのお話です！

がらりと、穂むらの扉を開ける。もう、海未ちゃんは来てるのかな。ちよつと遅れちゃったし。

「いらつしやいませー！って、ことりちゃんだあ！」

「あ、穂乃果ちゃん。お邪魔するね」

「うん！」

「あれ、穂乃果ちゃんのお母さんは？」

「うう、それがね。折角、みーくんが来たのにお店番してーって！」

ぷくりと、頬を膨らませる。その可愛らしい動きに自然と笑みが漏れてしまう。

扉を閉めて、中に入る。

「そうなんだ。でもしようがないよね」

「うー、そうだけどー」

「私にも出来ること、ある？」

少し穂乃果ちゃんが寂しそうに見えたから——なんて、そんな事じゃなくて。

ただ、困っている顔を見るとどうにかしてあげたくなって。そう、多分。そういうことなんだと思う。

「あ……ううん、ありがと、ことりちゃん。でも大丈夫！」

「それに、お母さんもうすぐ帰ってくると思うし。みーくんが上にいるから私の部屋に行つてて？」

穂乃果ちゃんが上を指す。そういう事なら、先にお邪魔してしまおうかな。

「そっか。じゃあ先に上がるね？」

「うん！どうぞどうぞ！」

階段を上がって、穂乃果ちゃんの部屋へと向かう。

あたりと少し静かに開ける。そこには少し寛ぎながら座っているみーくんが見えた。

「ん？あ、ことりねえ。早かったね」

「うん、ちよつと急いできたからかな？」

「そっか。そんなに急がなくてもいいのに。まだ皆そろってないし」

そう言つて、微笑を浮かべながらノートパソコンを操作している。

荷物を入り口のそばに邪魔にならないように置いておく。そのまま、みーくんの隣へと座る。

——若干、離れたよね。みーくん。

少し、ほんの少し。離れたのを見逃さなかった。でも、この事を言うべきじゃない。みーくんがどう思ってるかわからないから、だと自分でも思う。意識してくれているのか、それとも——。

そう思っていると、操作してたみーくんが声をかけてきた。

「ことりねえ、どうかした？」

「え？」

「いや、なんだか。考え事してたみたいだから。なんか悩みがあるのかなって」

「あ……ううん、大丈夫だよ。ちよつと衣装のことで考えてただけだよ」

「……そう。手伝えることあったら言ってね？」

「うん。その時はお願いね」

多分、嘘つてことばれてる。でも、みーくんは昔から深く聞いてこない。

でも、薄情とかそういうことじゃなくて。私達が悩みを打ち明けたら、真剣に相談に乗ってくれるし。

どう言えばいいのかな。うまく言葉にできないけど、見守ってくれてるような気がする。

みーくんはそれだけ聞くと、またノートパソコンに向かう。

「でも、ほんと早いね。まだ誰もログインしてこないから家に帰ってないんじゃないかな」

「ほんと？ちよつと急ぎすぎちゃったかなあ」

「あ、いや。そんなことないよ。もうそろそろ皆来るから。急ぎすぎじゃないよ」

カタカタとキーボードを打つ音が心地よく聞こえる。みーくんの真剣な横顔を見るだけで、早く来た意味があつたかななんて。

じつと見つめていると。少し困つた顔でみーくんがこつちを向いた。

「そんなに見つめられるとやりにくいよ、ことりねえ」

「あ、ごめんね？」

「いや、いいんだけど」

困つたように笑う。その顔も可愛らしくて。

みーくんは息をついて、操作してる指を止めた。そのまま傍らに置いてあつた携帯をとって見ていた。

「休憩つと。もうすぐ集まりそうだしね」

と言って自分のカバンを漁っている。ノートとペンを取り出して、ノートパソコンの上に乗る。

「でもまだ早いんじゃないかな。穂乃果ちゃん、店番してたし」

「んー？そんなことないよ。多分だけど——もう来るね」

そう行つたと同時に穂乃果ちゃん和海未ちゃんが話しながら入ってくる。

少しびっくりしてみーくんを見る。悪戯な笑みを浮かべてこつちを見ていた。

「言つたとおりでしょ」

「そうみたい。でもどうして分かつたの？」

「携帯だよ。さつき海未ねえが着くつて送つてきてたから。ことりねえにも行つてると思ふよ」

携帯を取り出す。確かに海未ちゃんから来てた。ちよつと、ううん。結構びっくりしたかも。

「なになに？何の話ー？」

「穂乃果ねえ達がいつ来るかなって話。さてと、じゃあ始めよつかな」

ノートパソコンを見ると皆ログインしていた。慣れた手つきで会議通話を立ち上げる。

穂乃果ちゃんと海未ちゃんが座る。なんだかいつもの空間のようで落ち着いていく。

「それじゃあ、μ、s会議の始まりだよー！」

「あいあいさー」

「それじゃあ、P V撮影の場所はここでいいかな」

『ええ、異論はないわ』

「それじゃ、業者の人に頼んでおくね」

そう言つて、携帯を取り出す。みーくんは私達に、電話してくると言つて外に出ていった。

見送つてから、私達は話し始める。

「ねえ、穂乃果ちゃん、海未ちゃん」

「うん、分かつてるよことりちゃん」

「ええ、私も分かっています」

二人ともわかつてるみたい。それに皆もきつと。

「ねえ皆。みーくんのことなんだけど」

『言わなくても分かるで。みーくんのことやし無茶するんやないかーつてことやろ?』

「そう、なんだけど」

『確かに心配ね。また無茶して倒れたりしたら』

『そうね。前みたいなのはもうごめんだもの』

「うん。私もそう思う」

穂乃果ちゃんの声が張っている。きつと強く思つてるから、かな。

でもそれは、穂乃果ちゃんだけじゃない。私も、皆も、同じ。

『でも、どうするにや? 凜達が練習してる時にしてるなら、確認することが出来ない

にや』

『そ、それに、みーくんにはれない様にしないと…』

『そうよ。あいつ、意外とそういうところ鋭いから、ばれない事は大事よ』

どうしようか。心配と言うことだけが前に出てきてしまつて、考えてなかつた。

皆、考え始める。どうしたら、安全に、みーくんにはれないだろう。

『ねえ、いいかしら』

そう、思つていたら絵里ちゃんから、声がかかった。

『PV撮影の場所は学校よね。だつたら、明日は練習がないつてことを湊に伝えるの』

『もちろん、嘘だけど。そしたら——』

話を聞いていく。皆も聞いた上で、どうやら異論はないみたい。

後は、みーくんに実行するだけ。

帰つてくるのを待っている。少し、鼓動が早くなる。罪悪感から来るものか、それと

も——みーくんを、そばで監視することの喜びなのか。

分らない。それでもいい。

階段が少し軋む音が聞こえる。どうやら、帰つてきたみたいだ。

「よつと。ただいまー」

「おかえり、みーくん」

「おかえりなさい。湊」

「おかえりー」

パソコンの前に座る。さて、どう切り出して行くのかな。

「ああ、P Vの設備だけ。明日から着工するみたい。完成は明日の夕方ぐらいだつて」
「そうですか。その間学校は出入り禁止になるのですか？」

「ううん。撮影に使う場所だから大丈夫。それに理事長に許可もらったし出入り禁止はないと思うよ」

『そう。それじゃあ予定通り、明後日がP V撮影つてことでもいいのかしら』

「ええ、そうです。天気予報も晴れましたし、何かなければ明後日で」

ふうと、息を吐く。少し言葉を出すのに躊躇してしまう。

「ねえ、みーくん。明日の練習なんだけどね」

「あ、ごめんね。明日は行けないかも」

「ううん。そうじゃなくてね。明日練習なくなったの」

「あれ、そうなの？」

「そうなんだー。皆予定が合わなくなっちゃって。私は練習したかったんだけど」

「あはは……。穂乃果ちゃんには悪いんだけど、そういうことになっちゃって」

上手く、出来てはるはず。表情を取り繕うことが出来てるかどうか確認できないけど。

「そっか。じゃあしょうがないね」

みーくんが残念そうに笑う。きつと騙せたのかな。

分からないけど、みーくんを見る限りそう思える。

『なあ、みーくん？みーくんは明日なんか用があつたん？』

「ああ、いえ。そんな大した用じゃないんですけど。少し行くところがあつて」

『そうなんか。まあ、丁度よかつたつてことやな』

「ええ、そうですね」

苦笑する。みーくんが携帯を取り出して時刻を見る。

少し、目を細めた。

「つと。それじゃあ僕は帰るね」

「え？」

「明日、早く出なくちゃいけないんだ。ごめんね」

「そう、なの？」

「うん。明日行くところがちよつと遠いから早めに済まそうかなつてね」

パソコンの前から立ち上がって、鞆を持って行く。

肩にかけて、私達に振り向く。

「それじゃあ、皆。お先に」

そのまま部屋を出ていく。何というか急いでいるみたいだ。そんな感じだった。

見送ってから、話し始める。

『なんだか、急いでる感じね。湊のやつ』

にこちゃんがそう言い放つ。でもみんな同じことを思ってるみたいで。

『にこちゃんの言う通りね。なんだかそんな感じがするわ』

「うん……。そう、だね」

『私も、そう、思う。この間あつた時も』

『凜も、何だかそう感じるにや』

『何だか、嫌な感じがするわ……。前に倒れたときみたいなの、そんな感じ』

そう言われて、思い出がフラッシュバックする。

空いていたドア。物音しない部屋。肌寒くなるような空気。横たわっている体。青

白い、顔。

まるで、しんで、しまった、ような。わたしは、どうしていいか、わかんなくて。

ただ、こわれてしまったかのように、なまえをよんで。

はつと、我に戻る。やめよう、こんなこと思い出すの。みーくんだって、二度としな

いって。

ほんとに、ほんとに、そうなのかな。

「や、やめてよ。絵里ちゃん。みーくんだってそう約束したよ？」

『そうかもしれないけど……』

不安が募る。どうしてこんなこと思うのだろうか。

刹那、海未ちゃんの気付いたような声が聞こえる。

「穂乃果、ことり。そう言えばこのパソコン、湊のですよね？」

「あ……」

「もしかして、ですけど。この中に何かあるかも……」

「で、でも。それはよくないんじゃない？」

『でも、確認できる一番の近道かもしれないよ？』

「の、希ちゃんまで」

『少し、少しだけなら。湊も許してくれるんじゃないかしら』

「うう、そう、かなあ」

罪悪感が芽生える。とつくに消えたはずなのに。

でも、誘惑には勝てなかった。

穂乃果ちゃんがパソコンの中を見ていく。P V撮影の案や、構成がたくさん残されていた。

私達が知らないような物までも残されていて。

「凄いね……。これ、皆、みーくんが作ったんだ」

「ええ、本当に……」

その中に無題と書かれたメモ帳が幾つもあるファイルを見つけた。

これは、なんだろう。

「これ、なんだろう」

『何か在ったの?』

「ちよつと待ってね」

開いてみる。どうやら日記のような走り書きが残されていた。

言葉がつつらと並んでいるだけの様な。

そんな感じだった。

「日記、かな。なんだかそんな感じみたい」

『そ、それ。気になるね』

『読んでほしいにや!』

「う、うん」

目を走らせる。どうやら、倒れた時から書いてるみたいだった。

少し手に力が入る。

「今日から、日記と言うか走り書きみたいなのを残すことにする。自分のことを振り返るためでもあるから。それに、もうあんなことごめんだ。」

女の子に泣かれるのはもう味わいたくない。自分が招いたことでもあるけど、こんなに心配されていると分かったから」

「一週間ぶりに書くことになる。何というか、今まで以上に心配されている気がする。でもこの状況に甘んじているわけにもいられない。」

皆が皆、先に進んでいく。僕も必死に食らいつかなきやいけない」

「 μ 's が一つにまとまつている。そんな事僕が言えるわけじゃないんだけど、そんな感じがする。僕も皆を輝かせるために頑張らなくては。」

今日はそういう目標を立てた日だ」

「ことりねえが留学するらしい。僕はその事実が理解できなかつた。穂乃果ねえには伝えないで欲しいと言われた。ライブで一生懸命だからと言うことだ。」

僕には何と言つていいかわからなかつた。何を声をかけていいかわからない。僕はなんて言つたらいい？

行かないでほしい？ やりたいことをすればいい？ 何も浮かばない。後悔ばかりが浮かんてくる。僕は役立たずだ」

「穂乃果ねえが倒れた。どうやら無理が祟つたらしい。何年もそばにいて、近くにいたのに気付かなかつた。雨の中も練習をしていたらしい。」

僕のせいだ。近くにいて、最近頑張つてるなぐらいしか思つてなかつた。自分のこと

ばかり嫌悪して周りに目も当てられない。希先輩が僕のことを気遣って優しく慰めてくれた。

本当は僕が気にするところなのに。馬鹿みたいにまた後悔ばかりして眠れない。それでも構成も思いつかない。僕のいる意味って何だろう。今日も眠れずにいる」

「皆がお見舞いに行く。ラブライブのエントリーは取り消しと言われてしまった。僕はお見舞いに行く勇氣もない。でもずるずると来てしまった。

まるで、流されているように。皆が皆、自責を感じている。絵里先輩達はそういうけれど、僕はそれが苦痛にしか感じなかった。僕が出来たことなのに、僕が気付けたことなのに。

真姫ちゃんは自分に出来ることとして少しでも安らぐようにしている。皆も穂乃果ねえのことを案じている。僕も同じだ。でも僕は何ができるんだろう。

雪穂ちゃんから、穂乃果ねえが泣いていたとメールが来た。僕はどうすればいいんだろう。慰めることをして、それが良いことになるんだろうか」

「廃校取り消しになったらしい。よかつたと思う。一応の目標を達成できた。でもまだ問題はあつた。僕はとりあえず話を聞いてあげることしかできない。

言葉が紡ぐのが怖い。正しいとかそういうことじゃなくて。どう答えたらいいいのかからない」

「μ'sがバラバラになつていく。ことりねえの留学が伝わったらしくて。そこから穂乃果ねえは辞めると言つたみたいだ。μ'sは休止になった。

皆からメールが来る。絵里先輩からいつかはこの問題に直面する時が来ると書かれていた。そして今まで舞台の構成やPVまでありがとうと。

僕はこれでいいのだろうか。答えは出ない。に先輩の誘いにはどうしても答えが出せなかった。練習をしているから見に来なさいと言われた。

そこには、に先輩と凜ちゃん、かよちゃんがいた。皆は先に進んでいるんだろう。本当に凄い。僕には踏み出す勇気がない。こんな性格、嫌になる」

「留学のことを海未ねえとことりねえで話す。海未ねえは行つて欲しくないみたいで。でもことりねえには届いているのかわからなかった。

僕も同じだ。行つてほしくなんかない。ずっと、皆で今を過ごしたい。でもそれはことりねえのためになるのかはわからない。海未ねえはしっかりと自分の言葉で話す。

言葉が出ない。のどに詰まる。僕は思ったままのことを言えない。僕はその場を濁すようにやりたい事をすればいいと言つてしまう。こんなこと伝えてどうするんだ」

「穂乃果ねえが戻つたと、海未ねえから電話がきた。わがままかけるけどなんて、と笑っていた。穂乃果ねえはすごい。人を動かす力があるんだ。ことりねえも待つてた。

皆が皆、先に進んでいく。僕はライブの準備をしながら思う。皆が僕にまた一緒に行

こうと話しかけてくれる。僕はまだこの場所から動けないでいるのに。

どれだけ追いかけたら皆の様になれるのだろうか。僕の悩みはほとんど沈んでいくばかりだ。とは言え。皆がまた一つになった。嬉しいことだ。僕ももう二度とこんなことにならない為に

しつかりしなければ」

日記はここで終わっている。穂乃果ちゃんが読み終わった後、涙を流していた。ううん、穂乃果ちゃんだけじゃない。私も、海未ちゃんも、皆も。

誰も、みーくんのことを分かたてあげられなかった事が悔しくてしょうがない。昔から一緒にいたのに。私はあの時から、みーくんがそばにいてくれるだけでいいと思つた。

留学のことだつて。みーくんに止められたら行かないつもりだった。勿論、穂乃果ちゃんも同じだけど。ちゃんとみーくんが私を見てくれるか心配だったの。

これから一緒にいるためには、しか考えてなかった。涙が、出てしまう。

「つく、ごめんね。みーくん。私、知らなくて。そんな事わからなくて」

「つ……、違うよ、私が自分の事を分らないから倒れてつ……」

「ごめんさい、湊。私がもう少しあなたのことを……」

皆の泣いている声も聞こえてくる。私達はきつとみーくんが見守つてくれていると

思ってた。

思い込んでいた。ひとしきり泣いてから、心の中に思いがあふれてくる。

「ねえ、皆。私、みーくんのことが好きなの」

穂乃果ちゃんを見る。びっくりしてしまう。皆が皆思っていることだろうから。避けていたことだ。

「みーくんのこと好きだから。傷ついている姿なんか見たくない。ずっと笑ってほしい」

決意した目が光っている。涙が頬を伝う。

「だから、聞かせてほしいんだ。皆がどう思っているか」

答えなんて決まっていた。

μ s からみたお話。

絢瀬 絵里の場合。

初めて会ったとき、彼はどう感じていたのだろう。知る事も出来ない思いにもどかしくなってしまう。

聞いてみたいけれど、聞いてはいけないような。きつと、彼にとってはそうでもないことなんでしょうけど。

それでも私は気になってしまう。どう考えていたのだとか、全部。彼の思いから何から何まで、彼のことを知り尽くしてしまいたい。

頭の中でぐるぐるとその欲求が回っている。何だか病気にかかっちゃったみたい、なんて。

でも、病気でいい。この気持ちに嘘はつきたくない。だからこそ、思う。

私の知らないところで、何かをしていることがとても嫌な気持ちになってしまうのも。

私が見ている前以外では、泣いて欲しくないのも。

私以外に、そんな笑顔を見せて欲しくないのも。

私が、あなたを好きなことも。

全部、全部。ずっと、病気になってしまっているから。

——そんな、病気にかかってしまった、絢瀬 絵里のお話。

ふと、目が覚めてしまう。ゆっくりと視線だけを動かして目覚ましを見ると、時刻は3時を少し過ぎたところだった。

上半身だけ、起こす。まだ、夜明けには早い。時刻を刻む針の音が、部屋に反響する。眠れない。数時間少し寝ては、起きての繰り返しだ。体に悪い事は知っている。けれども、胸の中で渦を巻いたように、ぐるぐるとまわっている物がある。

あの、日記のことだ。私は穂乃果が読み上げるのを聞いていたけれど、それは私にとつて大切な事だった。

湊が悩んでいるなんて、そんな事思いもしなかった。ううん、違う。きっと、私は湊の事に何も分かっていなかった。

一緒に、私達は、 μ 's は、成長しているんだって思ってた。湊もきっと、同じ考えなんだって、勝手に思い込んでた。

でも、どうしたらいいんだろう。私に何かできるんだろうか。

その思いが、ずっとループしている。あの時からずっと。

——穂乃果が湊を好きと、話してから。私は、私達は、きっと湊のことが好きなんだって再確認した。

それぞれの思いがあるからどう思っているのかわからないけど。少なくとも私はそう思う。

長い年月を共にしたわけではないけれど、湊の人柄に惹かれてしまったのは本当のこと。

あんなに、人のために努力して、泣いて。でも私達に心配させないために表情を繕ってまで。

自分の身なんて、どうでもいいみたいに動いている、彼のことか。

どうしても、目で追ってしまっていた。心配でしようがないけれど、それ以上に気になっってしまう。

それに、あの時も。

「……、ホットミルクでも飲もうかしら」

ベッドから降りる。一階に降りてマグカップを用意する。

冷蔵庫から、牛乳を取り出して、マグカップに入れる。

電子レンジに入れて、温める。その様子を少し見つめる。

皆の思いを確認した後。どうしたらいいか、話し合った。どうやったら、湊の悩みを解決できるのか。

悩みについては、結論から言えばまだどうしたらいいかわかっていない。

どうやったら、自分が進歩しているのか分からせることが出来るのだろう。結果がすぐに出てくる物でもない。

真姫がカウンセリングの様なものをすると言っていた。

もうひとつ、の事だけど。これに関しては、いけないことだつて分かっている。きっと湊に知られたら嫌われてしまうかもしれないことも。

でも気付かなければ。湊を監視するだけじゃなくて、私が知らない湊を知ることでもきる。

だからこそ、迷ってしまう。この件についても、保留となった。

はっと、気付く。ホットミルクはもう出来上がってしまった、薄い膜が出来てしまっていた。

その薄い膜を見ていると、今の気持ちと重なってしまったっているようだ。

私は、薄い膜をとって、ホットミルクを飲んだ。

明日は、練習はない。本来なら、湊の行動を探る日だったけれど、そんな気力はなくて。

息を吐く。ホットミルクが今の気持ちを落ち着かせてくれていた。

少しだけ、上を見つめる。キッチンのタイルに目を移す。意味はないけれど。呟くように言葉を紡いだ。

「……明日も早いし、もう寝ましよう」

自分に言い聞かせるように、そう呟く。明日は、学校に行かなくてはならない。生徒会の引継ぎとして、仕事がある。だから、早く寝なくては。

ホットミルクを飲みほして、マグカップを洗い、食器洗浄にかける。

ベッドに入って寝付くまでには、そう時間はかからなかった。

朝。制服に着替え、学校に登校してきた私は、学校の校門に入って、少し驚く。

もう、P.V.のセットのために着工していた。忙しく現場には人が動き回っている。

ラブライブには出れなくなってしまうけれど。学校の廃校には免れて。でも、まだ人を集めるには十分じゃないという理由でP.V.を撮影することになっていた。

でも、ここまで大掛かりだなんて思ってもいなかった。動いてる人たちを横目に私は生徒会室に向かう。

休日には部活で登校している子もいるけれど、皆物珍しそうに見ていた。ロッカーに鞆を入れ、生徒会室への階段を上がる。

生徒会室を開けて、いつもの席に座る。希は、少し遅れてくるとメールが来ていた。生徒会他のメンバーは部活が終わった後に来る。

それなら、やることをやってしまおう。書類を引き出して、一つ一つ確認していく。そうして、処理しようとした瞬間。思い出した。

ロッカーの中に入れた鞆の中に、筆記用具を入れたままだということ。

席を立ち、ロッカーに取りに戻る。ふと、窓の外に目を向けると、講堂の裏に見慣れ

た人影を見た。

少ししか見えなかったけれど。確かに、あれは。

階段を下りて、講堂の裏へと回る。歩いていくと、いくつかの書類を持った湊が見えた。

湊がこちらを確認すると、少し苦笑いをした。

「どうも、絵里先輩。おはようございます」

「え、ええ。おはよう」

「絵里先輩は、生徒会の用事ですか？ 大変ですね」

「……、湊？」

はぐらかそうとする湊に、問い詰めるように聞く。訝し気な顔になってしまうのはしょうがない。

湊を見つめると、ばつの悪そうな顔をする。

「ちよつと、その書類見せてみなさい」

「あ」

少し強引に、書類の一つを抜き出す。そこには図面に手書きで色々と注釈が書かれていた。

これは、多分。いや絶対に。

「湊。あなた、これ」

「あー、えつと。いや、あの。ちよつと自分の目で確かめないとイケないかな、なんて」
目線を服にずらす。所々汚れている。絶対に目で確かめに來ただけではない。

「その割には、服は結構汚れているのね」

「あはは……。あの、勘弁してください」

「……。湊、無理はしないって約束したわよね。それに、こういう事は皆でやろう、つて
」とも」

「そう、ですね」

「皆、業者の方がやってくれるのならって理由なのに。それを湊が一人でやっても仕方
ないでしょう?」

「ええ。その通り、です」

少し、言い過ぎたかしら。でも、また前みたいになってほしくない。

だからこそ、言ってしまう。

「……、心配なの。前みたいになって欲しくないの」

「……」

「あの時も、本当に心臓が止まってしまおうかと思った。あなたが倒れたって聞いて。
きつと無理をさせたんだって皆思ってた」

「つ……」

「だから、皆あなたに無理をしてほしくない。ううん、一人で背負ってほしくない。私達は10人でμ、sよ。例えステージ上は9人でもね」

「ありがとう、ごこぎいます」

「ここまで言つて、日記を思い出す。きつと、今が話すべき時。

変わっていることを感じてほしい。湊も、私達も。

少し、昔を思い出す。あの時、初めて会ったとき。

「ねえ、湊。覚えてるかしら。私と湊が初めて会った時の事」

「ええ、よく覚えていますけど」

——— μ、sの初ライブ。μ、sがここから始まる時。誰もいない講堂を見て、

彼女たちと話した後。

講堂の端つこで、泣いている湊を見つけたのが出会いだった。男の人がいることにびっくりしたけど、様子が可笑しくて話かけたのよね。

恐る恐るだったけれども。でも生徒会長として見過ごすわけにもいかず。ゆっくりと話しかけた。

「何をしているのですか？」

「あ……、すい、ません。えと、これ」

首に関係者と書かれた、ネームプレートを見せてくれた。なるほど、納得したけれど。何故泣いているのだろうか。

そのことを聞いていいのか良く分からない。

「ご、めんなさい。邪魔ですよ。すぐに、移動しますね」

「あ、いえ。その」

目じりを袖で拭っている。顔を見ると、とても若くて。高校生ぐらいの彼がどうして関係者なのだろうか。

何のために来たのか、興味を持った。勿論、泣いている理由も。

「少し、待ってて」

「え?」

小走りをして、自販機に向かう。ポケットから小銭入れを取り出して、硬貨を投入する。

一瞬、迷ったけれど、ミルクティーを押す。2つ分の缶を持って、彼の場所に行く。

そこにはまだ待っていてくれて。まだ目には涙が溜まっていた。

「これ。飲んで」

「あ……すいま、せん。お金わた、しますね」

「いいのよ。いいから、飲みなさい」

「あり、がとう、ごさいます」

缶を受け渡す。少しずつ飲み始めたのを見て、隣で缶を開けて、飲み始める。暖かくて、ミルクの甘い味と紅茶の匂いが、広がる。

長く、沈黙が続く。ちらりと盗み見ると、涙は止まっていた。

沈黙を破るために、合わせていた唇をゆつくりと開く。

「ねえ、聞いても、いいかしら」

「なんででしょう」

「どうして、泣いていたのかしら。何かあったの？」

「……」

「あ、いえ。不躰な質問だったわね。ごめんなさい。忘れてね」

「……あの。今ここで、ライブをしていたのを知っていますか？」

そのことを言われて、少し鼓動が大きくなる。

彼女たちの強さを見た後だから、なのかしら。

「ええ。知っているわ」

「そう、ですか」

「……それが、どうかしたのかしら」

「僕は、彼女たちの演出を任されたんです。でも、僕はこんなにも彼女たちが本気だった

のに。僕は」

少し声が涙交じりになる。少しこらえて、ミルクティーを飲んでいる。

「僕は。彼女たちに何もできてなかった。謝って欲しくなんてないんです。僕は、軽々しく受けて、中途半端だったんだ。あの言葉を聞いて、彼女たちは本気に動いてるのに」
「皆が折角、手伝いに来てくれて。僕にどうしたらいいか聞いてくれるのに。僕は曖昧なことしか言えなかったんです」

思い出す。あの強い意志と、前を向く強さに。

普通ならやめてしまいたくなるのに。

「……ごめんなさい。こんな事、あなたに言ってもしょうがないですよね。お話、聞いてくださってありがとうございま——」

彼の目じりをぬぐう。それから、ゆっくりと頭を撫でる。

びっくりしている彼の顔が見える。こんな事、するべきじゃないかもしれない。

でも、見捨てられるほど薄情じゃない。それに、なんだか今の彼を見ていられなくなってしまう。

「涙を流しなさい。今は、泣いていいの。それから、強くなりましょう。一步ずつ、しっかりと、ね？」

「っ」

彼女達をまだ、認めたくわけではないけど。でも、きつと本気なんだろうなと思う。分かってはいるけど、本心はそう思っている。今の自分に語り掛けてみたい。なんて――。

「あの時のこと、覚えてる？」

「ええ、とつても良く。僕が恥ずかしくて消してしまいたい、記憶の一つですから」

「ふふふ……そうかしら。あのことがあったから、きつと私も元気づけられたんだと思うわ」

「やめてくださいよ……もう」

「いえ、本当にそう思っているのよ？」

湊の顔を斜め下から見上げるように見つめる。少し顔が赤くなっている。

意地を張ろうとしてこちらを見つめるが、恥ずかしくなったのか、少し頬が赤みを帯びてくる。

なんだか、何とも言えない空間がそこにはあった。

どちらともなく、顔を背ける。

「あー、と。そうですか？僕にはあの時に話してよかったとは思いますが」

「ううん、そうじゃないわ。その後の話よ。私に勇気をくれた、君のこと」

「なんですか、それ。そんな事しましたっけ？」

「あら。湊は覚えてないのかしら」

そう言って、目を見ると少し動揺していた。覚えがない、のだろうか。

私は懐かしむように、少しずつ声を思い出に乘せながら出していく。

「私が、 μ 'sに入る時の事よ。思い出して？」

「えつと……」

「教室に居た時。君が来てくれて——」

彼女たちが輝いているのが目に見えて。自分がしていることが良く分からなくなつた。

希が私のことを全てわかっているようで。訴えかけてくれたけど、そう簡単には認められなくて。

その場から逃げて。私は自分の教室で、外を見ていたわ。自分の中で整理をつけようとして、けどそう上手くいかなくて。

どうしたら良いのか、まったくわからなくなつてしまった。

まるで、子供みたいね。本当。今思い返せば、そう思うわ。でも、そこに君が来たのよね。

何も言わずに、あの時の様にミルクティーを持って。

「これ、どうぞ」

「え?」

外を見ていて、気付かなかった。ふと、声のしたほうに顔を向けると、μ sの演出家さんがいた。

少し、びつくりしてしまふ。彼は微笑んで、ミルクティーの缶を置いて少し後ろへ離れる。

「ミルクティーです。僕にくれたお返しですよ、生徒会長さん」

「あ、ありがとう」

缶のプルタブを開けて飲む。暖かい紅茶の匂いと甘いミルクの味が、心を落ち着かせてくれる。

彼を盗み見ると、同じようにゆっくりと缶を傾けながら飲んでいる。

でも、どうして。何をしに来たんだろうか。

「あなた、どうしてここに?」

「いえ、少し。気になって。先程走り去っていたのが目に見えたので」
嘘は言っているように見えない。希に頼まれたわけでも、なさそう。

じゃあ、何のために。気になってしまふ。

「……落ち着きました?」

「え」

「いえ、何だか困惑してる、と言うか。そんな感じだったので」
ゆっくりと微笑む。そのまま、缶を持ちながら少し移動した。

私はまだ喋ることが出来なくて。まだ、どうにも整理がついていないのだろうか。それとも、ただ単に弱い所を見せたくないのだろうか。

「そう言えば、前にもこんな事ありましたね。あの時は逆でしたけど」
「そう、ね」

「まあ、生徒会長みたいに気が利いたことも言えないんですけど、ね。何だか男として情けないなあ」

おどけたように笑う。少し、楽になる。

彼は、缶に口づけて、またゆっくりと飲み始める。

同じように、飲む。ゆったりとした時間が過ぎていく。

「さて、僕は行きますね」

「え、もう?」

そんな、まだ来て経ってないのに。

そう思った時、口が勝手に動いてしまっていた。

「ええ。そろそろ、時間でしようし」

「時間?」

「あ、こつちの話です。それに」

一呼吸置く。そのまま出口に向かう。

「僕は手伝うだけですから。あの時の様に、背中を押してあげるような言葉なんて出ませんし」

「あ……」

「僕が出来るのはこうやってお話するぐらいですよ。それじゃあ、また」

そう言つて出ていく。それから、すぐに彼女たちが来て――。

「そんなこと、あつたでしょう？」

「ああ、何かありましたね。でもそれは励ました訳じゃ――」

「ううん。そんなことないわ。私にとっては凄く励ましになったの」

ほんの少しの間のことだったけど。私にとっては何も言わずにしてくれた君のことが。とても、とても。

動き出すきっかけをくれた、あの微笑みが。今でも鮮明に残っている。

ミルクティーの甘さも。あの暖かさも。何もかも。切り取ったみたいにな、保存されている。

「そう、ですか。なら、良かったです」

「あの時から、私達は一緒に歩んできたわよね」

「……ええ、そうでしょうね。きつと」

「なら、どうして。……いいえ、ごめんなさい。こういう事が言いたいんじゃないの」
「あ、え？」

ゆつくりと抱き締める。湊が持っていた書類はゆつくりと地面に落ちて行って。どうしたらいいのか分からなくなっている、彼の頭をしつかりと抱きとめる。

どこにも行かない様に。ゆつくりときつく抱き締めるかのように。

一つの思いが胸に宿る。頼って欲しい。と言うことが。

「お願い。私達を、頼って。きつと、ううん。必ず、力になって見せるから」
「っ」

ふと顔を見ると、恥ずかしさのために顔が赤く色づいていた。まるで果実の様に、熟れていく。

刹那、頭に何かがよぎる。それは、もっと見たことのない顔を見たいという心と。

——他の誰にも湊を見せたくないという心が。

混じり合って、落ちていく。

「ねえ、湊。顔、赤くなってるわよ？」

「あ、ち、違うんです、これは」

「ふふ、どうだったかしら？もっと、もっと。溺れてみない？」

「つ——」

なんて、可愛らしいの。なんて、愛らしいの。なんて、愛くるしいの。

どうして、私以外に見せてしまふんだらう。どうして、湊は皆に好かれているんだらう。どうして、皆に笑顔を振りまくんだらう。

私以外に振り向かないでほしい。私以外のところに行かないでほしい。私の目から離れないでほしい。

「絵里、先輩？」

「あ、ごめんなさい。冗談よ？」

「やめてください。心臓に悪いですよこれ。」

「ごめんなさいね。本当。でも、言ったことは本当よ？頼って欲しいの」

「ええ、そうですね。今度からは、心配はおかけしませんよ」

そう言って、私から離れる。名残惜しい。ずっとあのままでいたかった。

でも、やっぱり。あの思いは私から消えない。あれは、きつと。

私の、本心。

μ 's からみたお話 東條 希の場合

まだ恋だなんて——ウチには早いって、思ってた。だからこそ、皆からの相談を一步引いて見れて。

皆が皆、周りが見えないぐらいの恋をしていて。そんな事になるんやろかって、どこか他人事のように思ってた。

だけどそんな事、どこかに飛んでしまった。みーくんに出会ってから。

底抜けなぐらい優しく。悩みがあったらいつの間にか聞いてくれて。すぐに誰かの為に一生懸命になって。

それで自分が傷ついていても、それを隠して笑ってる。自分の事なんか後回しな彼の事が、好き。だからこそ、甘えている自分が嫌になる。

好きだから、傷ついて欲しくない。好きだから、甘えて欲しい。

好きだからこそ、相談して欲しい。好きだからこそ、笑って欲しい。

好きだからもう、隠して欲しくない。好きだからもう、離れて欲しくない。

好きで仕方ないから、嫌なことから、全部守ってあげる。

好きで仕方ないから、ずっと、ずっと。

そんな過保護な、東條 希のお話。

あたり、と音を立てて自分のロッカーを開ける。エリチのロッカーを見ると、どうやらもう先に来ているみたいで。

少し急ぎ気味に、荷物を入れていく。入れていく途中、頭の中に昨日の事が過ぎる。みーくんの事だ。

昨日の事があつてから、少ししか眠れなかった。どうして、相談してくれなかったんやろ。ウチは、ううん、皆も同じ気持ちのはずやんね。

だからこそ、一層強く思う。笑みを偽つてまで頑張つていたなんて。そんな事、誰も望んでないのに。

止めていた手を再開させる。筆記用具だけ取り出して、階段を上がる。さっきまで思っていた事を胸に秘めて。

このまま暗い気持ちで行ったら、きつと暗いままやもんね。エリチもそう思つてるはずやし。そう思う。

階段を上がりきり、生徒会室の扉を開ける。

「おはよ……う？えは？」

「あら、希。おはよう」

「えーと、おはようございます。希先輩」

何時もの席に座っている、エリチと共に隣に座っているみーくんがいた。

理解が追い付かない。いつもなら大抵の事は冷静になれるのに。こうもさつきまで思っていた彼がいるなんて。

「な、なんで、みーくんがおるん？」

「いや、その。まあ、なんと言うかですね。成り行きと言いますか、その」

しどろもどろになっている。みーくんの手が宙に浮いていた。

じつと見つめる。怪しい。何かを隠そうとしてるみたいで。穴が開きそうなほど見つめる。

見つめれば見つめるほど、焦っているみたいだ。視線を合わせようとしなかった。

どんとどんと近づいていく。テーブル一つ分の距離から、拳一個分の距離に。そして、吐息がかかる距離へと。

少し鳶色がかかった目が潤んでいる。目尻は少し下がっていて。男の子にしては肌がとっても綺麗だ。

頬に赤みが浮いてくる。一秒一秒が、長く感じる。ふと、視線が交差する。瞬間、刹那。ほんの一瞬だけ。

こんなに近くに、みーくんがおるのに。心は、近づいてはくれないやね。自分の中でそう独り言ちた。

すつと、ウチとみーくんの間に、紙が差し込んでくる。紙が来た方向を辿れば、エリチがこちらを見ていた。

「近付きすぎよ。少し離れなさい」

「んー、しようがないなあ」

「ほら、湊も。誤魔化せることじゃないわよ?」

「そうです、よね」

「まったく……じゃあ、私先生に用事が出来たから、少し席外すわよ」

そうエリチが言つて、席を立つ。みーくんは、言いづらいのか顔が硬いままだ。

ウチは、みーくんを挟む様に隣に座る。そのまま、みーくんの手を両手で握る。

……暖かい。みーくんの体温がウチに移つてくれて。それがとても嬉しい。

そのまま、みーくんの顔を覗き込みながら話す。

「なあ、みーくん。なんでか聞かせてもらつてもええ?」

「……ええ」

ぽつりぽつりと話し始める。みーくんが生徒会にいる事。今日ここにいる理由も含めて、業者の人と一緒にセットを作っていることも。

皆に内緒にしていたこと。エリチが少し不機嫌だった理由もわかる。そんな事誰も思つてない。

皆が皆、無理をして欲しくない。そう思ってる。みーくんが自分を傷つけている姿を見てられない。昨日の事もあったから。

気付くことが出来なかった自分が不甲斐ない。皆そう思っているから、より一層、強く。

みーくんを見ると、何だか怒られるのを怖がっているように見えて。

……そう、じゃないんやけどなあ。

全て聞いた後、みーくんの両手を優しく握りしめる。びくりとみーくんの体が震える。

「なあ、みーくん。ウチは怒らんよ？」

「え？」

「ウチはみーくんが無理して欲しくないし、秘密にしたことも嫌なんや」

「……」

「でも、それはな？心配もあるけど、ウチらは皆仲間やろ？」

「……ええ」

「仲間として、一人で背負い込んで欲しくない。そうウチは思うんよ」

勿論、みーくんの事が好きだからと言う事もある。でもこれは今言うことじゃない。

皆がそう思っただけに仕舞い込んでいるから。

ウチも我慢しなきゃいけない。

今だけは、そう。今は。

ゆっくり、優しく。両手を包み込むように。親愛も愛情も込めて。

傷ついて欲しくないから。そう思つて、握りこむ。

「みーくん、分かつた？」

「はい、とつても。絵里先輩も、希先輩も、皆も。僕を案じてくれているんだつて、思います」

「……それと、sの一員だつてことも」

そう、眩くようにして言う。俯いていた顔を、ウチに向けてくれる。いつものみーくんがそこにはいた。

みーくんに笑いかける。吊られて微笑んでくれる。嗚呼、やっぱりみーくんには笑つていて欲しい。眩しいぐらいの純粹な笑みが好き。

好きだから、守つてあげる。誰からもこの笑みを曇らせない。

「でも懐かしいなあ。初めて会つた時もこんな感じに手を握つたやん？」

「ええと。その時は丁度、穂乃果ねえ達の練習を見に行つたときですよね」

「そうそう、影から見つて、話しかけたのが最初やつたよなあ。心配そうに無理とかしてないですかーつて聞いてきたんよね」

「恥ずかしいですよ……もう。でも穂乃果ねえ達が慣れないことをするんですから、心配だったんですよ。あれから、幾度となく相談に乗ってもらっちゃいましたけど」

「へえ、その話気になるわね」

音を立てて、扉が開く。

書類を持ったエリチが、少し楽しそうに入ってくる。

聞き耳を立てて居たんだらう。タイミングがぴったりだった。

そのままみーくんの隣に座る。挟む形となった。

「ふふーふ。内緒やんね、みーくん？」

「え、あ、そうですね」

「あら、私には内緒なんてちよつと妬けるわね」

「誰にでも秘密はあるもんやで、エリチ！」

にっこりと、笑みを浮かべる。少し“違う意味”も含めて。

数少ない、みーくんとウチの秘密。二人しか知らない、二人以外知ってはいけない。

二人以外知って欲しくない。

だから、笑みにその意味を乗せる。それに気付いたのか、エリチは肩を竦めるように

してそれ以上聞かなかった。

きつとエリチも、同じ事を思っているだろうから。

「なあ、みーくん。思うんやけど」

「ん、何でしょうか」

「もし、もしやけど。ウチ等が卒業して、みーくんと今みたいに喋れなくなっただとして
も」

「……?」

「ウチは、ずっと、ずーっと。みーくんの事、思ってるから。だから、『変わってしまった』
た』なんて思わんというてな?」

「ウチも、エリチも、にこっちも。卒業して、変わる事なんてないから、な?」

不思議そうに、こちらを見ているみーくんの手を取る。男の子なのに、肌がきれい
ウチよりも大きい手をゆつくりと撫でるように。

目を見て、しっかりと伝える。今は、分からなくていいから。分からないままで、い
いから。今は聞いて欲しい。

エリチは何かに気付いたようで、ウチに説明して欲しいと目を向ける。

後でと、だけ伝える様に、アイコンタクトをしてウインクする。みーくんの目がぐる
ぐると渦の様に回っているように見える。

コーヒーにミルクを入れて、混ぜるように。きつと、理解しようとしているんだろう。
でも、分かる筈もないから。

ただ、ゆつくりと笑って。

玄関のドアを開ける。ふう、と息を吐く。今日は、色々あった。
絵里先輩に見つかってしまい、怒られ。

希先輩には優しく諭されてしまった。

何だか、こうも怒られるとは思ってなかった。

いや、咎められるとは思っていたけれど。

これ程までに問い詰められるなんて。

少しばかり思い違いをしていたんだらうか。

きつと、僕の思いは空回りしていたんだらう。そう納得させて。

玄関から、リビングへと移動する。何時もの様に、カーテンを開ける。

帰ってきたのは、少し日が傾き始めた頃で。

まだ夕暮れには遠い時間だった。雲は出ていて。

湿った空気が流れていた。……、一雨来るだらうか。と、思う。

洗濯物は干していないし、それに。すぐに動けるような状態でもなかった。帰ってきた服もそのままに、ソファアへと横たわる。理由はないけれど、何かを考えたかったからかもしれない。

ソファアの柔らかい弾力とともに、天井が見える。ゆつくりと、目を閉じる。

鼓動が、聞こえてくる。物の軋む音が微かに聞こえて。刻一刻と時計が時間を刻んでいく。

音がまるで、切り取られたように僕の耳に聞こえた。

僕は、ただ目を瞑る。

徐々に、僕の意識は今日のことになって。悲しそうに、顔を歪ませる絵里先輩と、僕に優しく微笑みかけてくれる希先輩が目には浮かぶ。

—— 勿論、小悪魔の様な笑みを見せている絵里先輩も浮かんだけれど。僕の心臓には負担をかけたくないので、即刻忘れる。

僕は。あんなに軽々しく認めていいんだろうか。μ'sの一員だなんて事。皆が皆、輝いているのに。僕は。

頭の中でぐるぐると回る。皆が認めてくれているからって、そう軽々しく認めるわけにもいかない。

僕が入ることに、何かを思わないんだろうか。男だし、彼女達とはまた違うわけでもあるのに。

でも。でも、彼女たちは、僕を認めてくれていて。それに、僕も一緒に歩いていきたい。

胸を張って、僕のしている事はμ'sにとってプラスに働いているんだって思いたい。

僕が、僕であるように。僕の存在していることが、少しでもいい。彼女たちの背中を押してあげていられるなら。

二つの思いが巡る。ぐるり、ぐるりと。歯車が軋めきあつて。それでもいいと、僕は思えて。

だんだんと、僕の体は宙に浮いているように思えてくる。何時ものことだ。物事を考えると、僕はこういう状態に陥る。

頭の中だけが、メロデラインを奏でるかのように。活発に物事を幾つも幾つも考え始める。

音が僕を導くように、僕はμsの一員でいいんだと思わせてくれる。そう、思ったはずなのに。ちくりと、何かが刺してきて。

その、何かに。僕はいつも考えてしまう。

この違和感が何なのだろうか。

瞬間。ポケットの中から電子音が鳴る。どこかに飛んでいた僕の意識は引つ張り戻されて。

ゆつくりと、目を開ける。音が僕の耳に戻ってくる。しとしとと音が聞こえる。どうやら、降り出したみたいだ。

ポケットの中から、電子音の原因を取り出す。……携帯電話にどうやらメールが来たらしい。差出人は、高坂雪穂と書かれていた。指をフリックしてメールの内容を見る。

どうやら——、僕に嬉しくないデートのお誘いだ。彼女に、いや彼女たちに、

幾らか借りがある僕にとっては避けられないことで。

財布に眠っている紙幣達を思い返して。きつと叩き起こされてしまうんだろうなあ、と苦笑しながら返信する。

「雨が止んだら」とだけ。

μ s から見たお話 西木野 真姫の場合

いつから、人を好きになれたと思う？

そう、聞かれた。たったそれだけで。その言葉だけで私は動けなくなつた。

虚空を見つめるような瞳が、私に向いている。何処までも堕ちて行きそうなそれは、深淵のようで。踰いても踰いても、抜け出せないような。そんな瞳だつた。

不思議と怖くは無かつた。動けなくなつたのは、多分。私と彼の違いが分からなくなつた。そう思い込んで。

手を伸ばした。星に手を重ねるように。掴めもしない物が、今は掌の中にある気がしていた。開いて仕舞えば、消えてしまう。泡沫の夢のようだと、嘲笑つた。

それでも。夢でいいから。夢で構わないから。夢の中だけでは。

私に、星を掴ませて。

お願い、今だけは。覚めたくないの。彼の笑顔が。彼の姿が。溶けて行かないでよ。

私を一人にしないで。見栄なんて要らない。本当に欲しいの。欲しくて欲しくてたまらないの。

星のような、貴方のことが。

ふわりと。夢の中の貴方が、私に触れるようなキスをして。

ベッドから目覚めた。朝日が、頬を伝う涙に反射する。プリズムの様なそれは、シーツへと吸い込まれていく。

ああ。またこの夢か。

ベッドから降りて、鏡を見る。涙の跡が付いている。

跡を指でなぞる。何も、考えられない。本当に嫌な夢だ。

何処かに消えてしまう不安が。喪失感が。私を襲う。

これは夢なんだと、そう思っているのに。どうしようもなく想いが走る。

そこまで全速力じゃなくていいのよ。

そう、呟いて。

練習後の帰り道。珍しくグッズを見に行こう、となった。珍しく、と言っても私が参

加する事だが。だが、全員のモチベーションは勿論、自分自身としてもグツズと言う目に見える評価が出る事は嬉しいことだ。

——口には、出さないけれど。

それを隣で面白そうに見てくるニコちゃんには、少し腹が立った。

少しづつきらぼうに問いかける。

「……何よ。何か用なの？」

「んーん？唯、真姫が来るなんて珍しいなあーって」

「別にいいでしょ。偶然よ、偶然」

顔をそらす。本心を話すのにはまだ、と言うかなんと言うか、恥ずかしいとはまた違

う。

素直に表現出来ないだけじゃなくて——。

ああ、なんと言えればいいのかしら。

考えていたけれど、馬鹿らしくなってやめた。

秋葉原の駅を通り抜け、ショップへと向かう。人の往来が激しい。あまり、こう言う

場所は得意ではない。

ふと、隣を歩いていたニコちゃんが、何かを含んだ笑みを浮かべていた。

「いっいっいっ……」

「何よその笑い。気持ち悪いわね」

「気持ち悪いってどう言う事よ!……まあ、いいわ。いいあんた? 周りの人の声を聞いてみなさい!」

耳を澄ませると、何処からかμ'sじゃ無い?と言った、まるで有名人を見たかのような声が聞こえた。制服も着ているから、バレやすいがそれでも、恥ずかしい物は恥ずかしい。

「この注目度! まるで有名人の様じゃない!」

「ちよ、ちよっと!」

さらに注目を浴びる。無理もなかった事だった。そもそもこの通りには、スクールアイドルシヨップへと続いている道なわけで。

自然に目が集まるのは当然とも言えた。

スクールアイドルをしているとは言え、恥ずかしい物はやはり恥ずかしい。少し顔を下に下げて進む。

こういう時、ほんのちよっとだけニコちゃんが羨ましい。注目でさえ自分の糧としていく姿は、眩しく見えた。

スクールアイドルシヨップに着くと、私達——μ'sが置いてあつた場所へと向かった。けれど、そこには違うアイドルグループのグッズが陳列している。何処かに移

動したのだろうか。

ふと、視線をずらすと大きなポップ広告と共に私達のグッズが置いてあった。

少し、いや、とても嬉しい。もちろん表には曖にも出さないけど。みんなが喜んで笑顔を見せている。少しずつやってきた事が認められている気がしている。それは、何事にも代えがたい。μ sにとつても、もちろん湊にとつても。

そうだ。何か買って行ってあげようかしら。

刹那、脳裏にあの時の日記がちらつく。きつと、目に見える形で進んでいる事が分かったなら。そう、思いたかった。

「あの……」

声がある。みんなが振り向く。そこには3人組の制服を着た男子がいた。きつと高校生ぐらいだろうか。その制服はここらあたりじゃ見なかった。少し遠い所から来たのだろうか。

代表として穂乃果が受け答える。どうやら私達のファンらしい。ここではお店に迷惑がかかるため、取り敢えず外に出る。

話を聞けば、穂乃果達3人がやっていた頃からのファンらしく。私達の良さを熱く語ってくれている姿に自然と笑みが漏れていた。私は顔には出さない様にしていただけ、それでも嬉しい事だった。それから、握手を求められた。それくらいはすべき

なんだろう。ニコちゃんもそう言っていたし。握手をする。きつと以前の私なら出来なかっただろう。これもμ'sの、湊のおかげだ。そうだ。やつぱり湊に買ってもらう。そう思つて視線を動かせば。

少し遠くに、消えそうな表情をした湊が見えた。

そのまま何処かへ走り出した。嫌な予感がする。途轍もなく私を襲う。

周りを見れば気付いているのは私だけの様だった。どうして湊を見ている時は敏感なのにこういう時は違うのよ！

そう、強く思う。兎に角、追わなければ！

「ちよつと！真姫！どこ行くのよ！」

ニコちゃんが私に声をかける。けれど応対している場合じゃない。方向的に湊の家に向かったはずだ。

急ぐ。雨が降り始めてくる。けれど傘を差す時間なんてなかった。

探し続ける。全神経を集中させる。それでも、見つからなかった。鞆の中にある携帯が鳴っている。きつと、事情を聞きたいのだろうけども、そんな暇はなかった。自然と足が止まる。湊の家の前に着いた。恐る恐る玄関へと近づく。

近づいていくにつれて、心臓が騒ぎ始める。どうしてかはわからないけれども。とても、とても嫌な予感がする。

少し息を吸う。インターホンを押そうとして、ふと視界に隙間が空いた玄関の扉が見えた。

自然と手が動く。扉を開いた。大きな音を立てて。

視界が開いていく。見慣れた湊の玄関が広がっていく。半分まで開けて。廊下に座り込んでいる湊が見えた。

「湊！」

急いで近寄る。肩に触れる。湊の顔が、その目が。私を貫く。

黒い、黒い目だった。景色を映すだけのビー玉のような。それだけで、異常だと思えてしまうほどに。

「っ、どうしたのよ。あなた。ねえ」

「……」

「ちよつと。ねえ。湊？」

「ああ、うん。ごめん。そうだよ。ほんと、ダメだよ。僕は全く。その通りだよ」

「湊……？」

おかしい。受け答えが出来ていない。まるで、どこか違う場所にいるかのように。少し、寒気が走った。

私の声も届かない。そう考えた瞬間。私は不意に落ちていくような気がした。どこ

までもどこまでも。まるで底なし沼のように。焦る。とにかく、どうにかしなければ。でも、どうしていいかわからなかった。

自然と肩に触れていた手が頬へと移った。

「み、など」

「僕は、もう。わかんなくなっちゃった。どうしていいのかももう。みんなに置いてかれるのが嫌なのに。みんなといっしょにいたいだけなのになあ」

「……」

分からない。どうしてこうなったのか。けれど、きつと何かがおかしいことだけがただ漠然と目の前を覆う。一緒に歩いてきたはずなのに。どうして。

「ぼくは。きつと、前から変われないままだったんだ。まるで子供のままだよね。

わらつちやうよ。まえから、ほのかねえたちに依存していたなんて、分からないふりしてさ。

そのくせ僕はそのことを知っておきながら自分から離れようとしてたんだ。

わかんないよねもう。分からないよ」

まるで、子供のように戻ったり今に戻ったりするような。そんなタイムスリップを起こしているようだった。頬に置いていた手をゆっくりと背中に戻す。

こんなこと、普段はできないけれど。それでも今はそうしなければどこかに行つてし

まうような気がして。

半濁きのシャツが、濡れたシャツとくつつく。

髪が頬に当たって。雫が頬を濡らして。鼓動が合わさるように動く。

つぶやく。声を出そうとして、かすれる。けれど、もうどうでもいい。とにかく伝えたい。

「どこにも、行かないわ」

ただ。それだけ。感じる体温が、ここにいるのだと伝えてくれれば。きつと。

少しだけ、鼓動が跳ねていた。ああ。よかった。

「まきちゃん」

「何かしら」

「僕は、間違ってるのかなあ」

「わからないわよ、そんなの」

「そっか。ありがとう」

「……」

「うん。あり、がと……」

声がかすれていく。暖かい雫が首筋を濡らす。

鼓動と雨音だけが、響く。きつと。分からないことがたくさんあるけれど。

今だけは、このままでいれば。大丈夫だろうから。
だから。このままで。

僕から見た、安らかな休日

雨はそんなに好きじゃない。濡れてしまうし、傘を差さなければいけないと言うところにも億劫だ。

そして何より、空気がどうしても好きになれなかった。雨が降っている外を、窓から眺めていると、深く沈んでいくような気がして。

雨の一粒一粒が、地面に落ちて。その雨粒が、広がっていつて。地面を雨で塗り替えていくのを見ると、何だか不思議な嫌悪感が僕を襲う。

嫌になるほど雨を体験しているはずなのに。一向に僕は、この感覚に慣れることなんてなかった。

だからこそ、雨が降ると外に出たくない。雨を恋しく思うなんて事、なかった。無かったはずなのに。

今が、こんなに雨が恋しいと思うなんて。

昨日の天気予報では、今日一日、昨日の雨を引き摺ると言っていたのに。朝起きて、カーテンを開ければそこには、眩しいぐらいの朝日が差し込んできて。

僕に降り注ぐ、日の光が認めたくない事を認めさせてしまう。ああ、晴れてしまった。

こんな時に、天気予報が外れるなんて。

そうなつてしまえば、約束した通りに行かなくてはいけない。枕元に置いてある携帯が、通知を告げている。

何も言わなくても、分かる。どうせ、時間と場所が書いてあるはずだ。画面を操作して、内容を見る。予想通りだ。

時間が、午前なことを考えると。この様子じゃあ、お昼まで出さなくてはならない。

僕は、部屋の筆筒から封筒を取り出す。小遣いの中から取つてある、何か有った様。予備費と言われる物。それを取り出す。

数少ない僕の紙幣達の、目を覚まさせる。痛い出費だけでも仕方ない。約束したこと。を無下には出来ないだろうから。

背伸びをする。約束の時間まで、あと二時間程度。それまで、ゆっくりすることに決めた。

二度寝をしない程度に、ゆっくりと。

人々が行き交う。それぞれが違う場所を見ていて。それぞれが誰かを待っていたりしている。

要するに、駄だ。僕が雪穂達と、約束の場所にしていた所もここだ。生憎、僕の家と彼女の家の間にあるため、良く待ち合わせ場所として利用していた。

勿論、公園も使っていたし、どちらかと言えば公園のほうが使っていたけれど。ここもよく使っていた。どちらかと言えば、遠出して買い物する時はいつもここだった気がする。

近くに寄つてくと、駅の入り口の柱に、今回のメインの二人が見える。少し、早くそこに向かつて歩く。

時間より、早く来たはずなのに。待たせたら、怒るだろうか。そんな事を、思いながら。

「や。ごめんね。待った？」

「あ、やっと来た。遅いよー、みーちゃん」

「いつになつたら、雪穂は僕のことをお兄ちゃんつて呼んでくれるんだろうね」

「もう無理だよ。昔から知ってるし、お兄ちゃんつて感じじゃないし」

「くう……事実だけに何も言えない。亜里沙ちゃんも、ごめんね。待ったでしょ？」

「い、いえ！全然、待ってないですよ」

両手を目の前で、降る。その仕草が可愛らしくて、笑みが出てしまう。

なんだか、こう言う仕草にも愛らしさが出るのは、彼女だからだろうか。

「そっか。ありがとうね」

それと同時に、雪穂が言葉を放つ。持っていた少し大きめのバッグから、パソコンを

取り出す。

「これ、頼まれてたやつ。ノートパソコンって意外と小さいのもあるんだね」

「お、ありがと。これは持ち運び用みたいなやつだよ。もっと大きいのもあるさ」

僕が持っているのは、ノートパソコンでも比較的小さめで。家に置いてあるデスクトップとは別に、持ち運び用が欲しかった。

それを受け取り、バッグの中に仕舞い込む。

「みーちゃん、これで貸し二つだね。黙っててあげる奴と、これで」

「ええ……。これに関しては、数えないって事じゃ駄目かな？」

「んー、仕方ないな。みーちゃんの顔を立ててあげましょう」

「……、顔は立ってないけど、ありがと」

貸しの一つは、たまたま昨日の様に、舞台の建設や構成の事を見られてしまい。業者の方が見ている前で、土下座までして黙ってもらうことにしたこと。

倒れてしまった時、病室に駆けつけてくれたμsのメンバーを除くと、次に駆けつけてくれたのはこの二人だった。と言っても、皆が到着して、怒られてから、三十分もたたない事だったけれど。

彼女達にも、心配をかけてしまった。一生分怒られたんじゃないかってほどに怒られたし。そんな事があったからこそ、ばれてしまうのはまずい事だった。

何とか、訳を話して怒られながらも、納得してもらい。貸し一つ、と言うことになつてしまった。

「まあ、行こつか。お店の方向は向こうだしね」

そう言つて、なんとなく歩き出す。歩き出したのはいいけれども。亜里沙ちゃんは、何か言いたそうな顔をしていた。

僕はなんとなく聞こうかと思つたけど、きつとあの事だろうなと思つた。雪穂のことだし、細かい説明をしていないだろうし。

「ねえ、亜里沙ちゃん？何考えてるか当ててあげようか？」

「え？」

何だか迷っている顔が、さらに困惑しているのが見えた。

もし、これで違つたらとっても恥ずかしいのだけど。その時は、雪穂にフオローを願おう。

「私まで、奢つて——ああ、えつとね。私まで何か買つてもらうなんて悪い、なんて思つてない？」

分かりやすいように、噛み砕く。通じるかもしれないけど、通じなかつたほうがどうも恰好がつかないし。

「あ、そ、その通りです。でもどうして？」

「んー、亜里沙ちゃんの顔に書いてあったから」

「えー」

顔を触る彼女が、可愛くて。微笑が漏れてしまう。

雪穂がじつとりとした目で、見てくる。でも、仕方ない。こう、何と言えればいいのだろうか。真姫ちゃんとは違った、弄りがいのある可愛さがあつて。

小動物の様な、そんな可愛さがある。

「嘘、嘘だよ」

「あ……もう。また亜里沙の事からかつたんですね、湊さん」

「あはは、ごめんね。可愛くてさ。えつとね、雪穂の事だから、きつと細かいこと話してないだろうなって。そう——あれ？どうかした？」

「……いえ、なんでもありません」

顔が、少し紅い。そのまま、俯いてしまう。これに関しては、僕は何もしていないはずだ。多分。

ちらりと、助けを求めるようにして雪穂を見る。彼女は、呆れた様にかつちを見ていた。

「はあ、みーちゃんはその癖は治らないんだね。そうやって弄るのやめたほうが良いよ、つて言ったのに」

「ええ……？だって、楽しいし、駄目かなあ」

「そこじゃないんだけどなあ……。その癖、お姉ちゃんみたいなタイプには弱いのに」
はあ、と溜め息を吐かれる。これに関しては、いつも言われてしまう。

楽しいし、可愛い一面が見れるから、止めたくはない。——勿論、声には出さないけど。

さて、と仕切りなおす。未だに、少し俯いている亜里沙ちゃんに言い聞かせるように、優しく話す。

「亜里沙ちゃん。きつと、君の事だから、貸し借りなんてなくてもって思ってるんだろ
うね。雪穂は、そう思っていないみたいだけど」

目線を向けると、にししと笑顔を見せる。姉と違って、こういう所が少し打算的だ。
少し、いや大分だけど。目線を戻す。

「それで、あー、なんと言うかね。んーとですな」

「こら、みーちゃん。考えてなかったの？」

「実は、そうなんだよね」

「はあ、もう。何だか、かつこいい一面が見れるかなーって思ったのに」

「見せられたら、見せたいんだけどねー」

顔を、崩して笑う。何と言うか、こういう空気が楽だ。一つ一つ考えるんじゃなくて。

自然に言葉が出てくるような、こんな空気が好きだから。無理に考えなくてもいい。後は、きつと。自然に出てくれた言葉が、紡いでくれるから。

「ふふっ」

「お、そうそう。そういう笑顔さ。そりや、僕と亜里沙ちゃんは、まだ出会って数か月だけどね。こういう空気に慣れてくれたら嬉しいなって」

たまたま、学校の帰り道。雪穂と一緒に歩いている彼女を見つけて。話したのが最初で。それから絵里先輩の妹さんって知って。

いろいろあつて、今がある。それで、良い気がする。だからこそ、僕らの空気に感染してくれればと思う。

「なんだか、何回も会ってる筈なのに、違う人に会ったような、そんな感じがします」

「んー。ほら、僕と雪穂は昔から知ってるでしょ？それで何だか、入りにくそうにしてから。そんな気遣い不要だって言いたかったんだ」

「ほえー。みーちゃん、そういう事考えてたんだ。私には、さっぱり思ってたよ」
「僕は、男って言う条件もあるしね。いくら仲が良い子の友達だからとは言っても。何回か会えば仲良くなるけど」

二人を見る。僕がこういう真面目な話をする事なんて、このメンバーじゃ最後にして欲しいから。そういう願いも込めて。

僕は、二人に向けて話す。

「そういう条件を抜きにして、楽でいたいって思ったから。気が置けない……つと、要するに、気を遣わなくても良くなりたいて事！」

微笑む。それに釣られて二人も笑う。多分、言いたいことは伝わったはず。それじゃあ、こんな真面目な空気はごめんだ。

用件だけ話して、お昼を食べに行こう。お腹も空いてきたことだし。

「んで、僕がお金を出す理由もそういう事さ。君たちは美味しい物を食べて、笑顔を見せてくれればそれで十分！」

「ええー！本当、みーちゃん！」

「いや、毎回は奢らないぞ」

釘を刺す。真に受けて毎回奢るなんて、溜まったもんじゃない。そのやり取りを見て、亜里沙ちゃんが笑う。

ほんわかとした、優しい空気が僕らを包んだ気がする。

「じゃ、ご飯食べに行こう。何か食べたい物はある？」

「何でも——」

「何でもいいは、なしだよ亜里沙！」

「何でもいいは、駄目だよ亜里沙ちゃん」

声が被る。目線が声のした方に移る。どうやら、同じことを考えてたようである。苦笑する。

ここは、彼女に任せよう。僕は、少し空を見る。どうやら、今日、晴れていたのも、今となつてはよかつたのかもしれない。

外してくれた天気予報に、少し感謝しつつ、意識を戻す。雪穂の教えはどうやら伝わったようで。

「さて、じゃあ。何か食べたい物はある?」

願いを聞いて、僕はお店を提案する。二人の了承を得てお店へと向かう。一步踏み出してくれた彼女と、可愛い妹の様な彼女をエスコートする。

食事を済ませて、お店を見て回る。遊ぶといたら、カラオケか、こうやってお店を見て回るぐらいだ。

服を見に行くのもいいけれど、二人はまだ中学生だ。服を買うといっても限度がある。そんなこんなから、小物や雑貨店を中心に回る。

僕は、こういう雑貨が結構好きで。見て回るのが楽しみだったりする。

二人の様に、目を輝かせるようなほどではないけれど。ペンケースや、フォトフレーム。色々と手に取りながら見ている。

なんだか、その様子が可愛らしくて。笑みがこぼれてしまう。

「ねえ、みーちゃん！これ加湿器なんだって！」

「ハラショー……。本ではなかったのですね。湊さん！これ見てください！」

僕を呼ぶ声が聞こえる。なんとなく手に取っていた、デスク用の収納箱を置く。

近くに見に行くと、本と見間違えような、そんな加湿器があった。

「うわ、なんだこれ。穂乃果ねえの前に置いたらびっくりして、騒ぐんじゃないか。本か

ら煙が出てるー！って」

「お姉ちゃん的那样言ってる姿が浮かんだよ……」

「でも、これ、良くできてますよ。雪穂なんて開こうとしてたんですから」

「うわわ、亜里沙！しーっ！」

「姉の血は受け継ぐものだったね……」

そう、話をしながら、買い物続ける。余り手の出さないものや、形が面白いものから、多々あった。

残念ながら僕は、購入したくなるような気が惹かれるものはなくて。店を出ようとした。

ふと、振り返ると、二人が僕を見ていて。何だか先に行つて欲しそうにしていた。

そのことが分かっていれば、居座る理由もなく。先に外で待つてるとだけ告げる。

外に出て、数分もしないうちに出てきたことに、少し疑問を抱いたが、大したことはない和无視することにした。

それから幾つも回つては見たけれど、僕の心を動かすような物はなくて。どうやら、これに関しては二人も同じだったみたいで、手に持つては戻して、と繰り返していた。

僕らは、こうなると選択肢は限られてくる。ゲームセンターか、カラオケか。もしくはカフェに行くか。少し話し合い、今回はゲームセンターに行くことにした。

歩いて、数分。煌びやかな電光と、出入りの際に音が漏れている。ここらでも、大きいゲームセンターの一つに来了。大きいゲームセンター特有の、大きなロゴとビルが目を刺激する。

「んと、何する？ UFOキャッチャーでもする？」

「ねえねえ、あれやろうよ！ ダンスゲーム！」

「ダンス……？」

「あれ、亜里沙ちゃん初めてか。結構来てるみたいだけど、そう言うのに手だしてなかったんだね」

話しながら、エスカレーターを上がる。少し歩くとすぐに、お目当ての筐体が見えた。ダンスの音楽ゲーム。四方向のパネルが、足元にあつて。画面に映し出される方向と連動していて、タイミングよく合わせて踏むゲームだ。

ゲームだからと言って侮ることは出来なくて、意外にも本格的なダンスのステップや、体力なんかも要求される。音楽も、ダンサブルなものが多く、馬鹿に出来ない。

僕は、荷物を備え付けの籠に置いて、説明をする。……多分、見たほうが速いけども。

一通り説明をしても、首をかしげている。まあ、そう簡単には分からないだろう。

「じゃあ、僕と雪穂がやるからそれを見て。多分見たら分かると思うし」

「分かりました！」

ちよこん、と後ろのベンチに座る。荷物を下げたままと言うことに気付いた。籠に僕と雪穂の荷物を入れて、近くによる。

「はい、荷物入れに入れちゃいなよ、そのカバン」

「あ、ありがとうございます」

「ん。じゃあ、ここに置いてくね」

カバンの入った籠を、亜里沙ちゃんの座っていたベンチの横に置く。

腕まくりをしながら、雪穂を見る。僕と彼女の実力は、同じぐらいだ。可もなく不可もなく、普通だ。

でも、対戦となると熱くなるのは、何故なんだろうか。きつと僕の中にある、小さい闘争心がやる気を出してくれているからだろうか。

「今度こそ、勝つよ。雪穂。ここの所負けこんでたからね」

「ふーん？ みーちゃん、強気に出たね。私だって、負けないよ」

どうやら彼女も同じみたいで、闘争心が見て取れた。硬貨を投入して、二人プレイを選択する。

曲の選択は、雪穂に任せることにした。僕らの得意な曲は、丁度似ていて、アップテンポな曲が得意だった。

曲が選択される。この曲は――。

「僕が、勝ったことない曲を入れてくるか」

「みーちゃん、この曲苦手だもんね」

この譜面には、変則的なステップが幾つもあつて、リズムを取るのがかなり難しい。

一度踏み外してしまえば、またリズムに乗るのは、至難の業だ。

画面に、スタートの文字が浮き出る。ふと、視線を亜里沙ちゃんへと移す。目を輝か

せながら、見ている姿が視認出来た。

これは、もう。なおさら。

「負けるわけには、いかないよね」

小さく呟く。自分の気持ちを鼓舞させるためにも。それから、すぐに。僕は、矢印の

方向へと足を動かした。

靴のグリップを利かせる。足が固まらない様に、なるべく柔らかく。譜面を目で確認

する。

下から上に流れてくる譜面は、目では追わない。そう、目で追ってはいけない。

追えば、集中はそこに向かってしまい。体の動きに規制がかかる。だからこそ、確認

するぐらいでいい。

なるべく、出来るだけ。自然な体の動きに任せる。意識しすぎずに。

ステップを踏み続ける。最後まで、気を抜かずに。踏み切れない所は、切り替えて。

曲の終わりとともに、大きく息を吐く。後は、点数だ。リザルトが画面に表示されていく。

点数と、評価が出る。僅かな差で、僕の勝ちだった。

「おおお、勝てた！」

「ええ……この曲で、みーちゃんに負けるなんて、ちよつとショック」

「僕も、毎回負けるわけにはいかないからね」

僕はそう言つて、筐体の台から降りる。目を輝かせたままの、亜里沙ちゃんの元へと歩く。

こちらを見る目が、どうやら理解したということらしくて。僕は、少し微笑みながら話す。

「その様子を見ると、分かつてもらえたみたいだね」

「はい！とつても面白そうです！」

「うむうむ。じゃあ、やつてみよっか」

ワンクレジットで三回まで出来るため、まだ踊ることは可能だ。僕は座っていた彼女の手を取つて、エスコートする。

緊張と、楽しげな感情が混ざった顔は、僕が初めてこのゲームに触った時と、同じように見えて。

ゆっくりと、リラックスしてもらうために。僕は、アドバイスをする。

「そんな固まらなくても大丈夫だよ。最初は簡単さ。ほら、深呼吸してー」

「すう……はあ」

「そそ、力抜くぐらいで言いんだよ」

深呼吸を続けてもらう。筐体の台の上に立つと、どうしても高揚感が隠し切れないものだ。

僕は、深呼吸を続ける彼女を尻目に、雪穂と会話をする。

「初めてだし、簡単な奴だよ？」

「わかってるよ。それくらい」

「ん、そっか」

雪穂が、初心者用の簡単な曲をセレクトする。僕は、そつと離れて、先程まで座っていた亜里沙ちゃんの席に移動する。

楽しそうに雪穂が、亜里沙ちゃんに話しかける。それに笑顔で答えていて。とても微笑ましかった。

プレイはやはり、初めてだから仕方ない。焦ってしまったたり、ステップが崩れたりする。けれども雪穂が、しっかりと教えていて。

二曲目には、かなり踊っていた。何と言うか、絵里先輩の姉妹だからなんて言い方悪

いかも知れないけど。こういう事にセンスはあるのだなと思った。

プレイが終わってから、嬉しそうにこちらに向かってくる。まるで、子犬のようだ。なんて。言葉にはしないけれども。

「湊さん！見てましたか！私とつても、これ好きです！」

「おお、いいねえ。僕らの競争仲間に飛び入り参加だね」

「みーちゃん、亜里沙凄いいよ。まだ二回目なのに、結構踊れてたし」

「見てたよ。僕らも、うかうかしてられないねえ」

子犬の様に、僕に楽しさを一杯に表現してくれる彼女が、愛らしくて。

自然に手が、頭を撫でてていた。本当に、意識なんてしていなかった。子犬みたい、と思っただらだろうか。

優しく、ゆつくりと撫でてしまっていた。

「あ、ごめんね。ついうっかり」

「……ハラ、シヨ」

「え？何か言った？」

「あ……いえ。その、湊さんがお兄ちゃんみたいに見えて。だから、その。続けて、下さい」

僕の目を見て、そうお願いされる。僕の手は引くことは出来なくて。そのまま、絹糸

の様な、滑らかな髪が僕の手伝に伝わる。

絵里先輩よりも少し暗めで。鶯色の様な繊細な色だ。柔らかくて、とても甘い花のよ
うな匂いがする。

なんだか、引き込まれてしまうような。そんな感触と匂いだった。

「……。ね、みーちゃん」

「え？」

雪穂に呼ばれる。目線を向けると、頭を若干こちらに向けていて。顔が恥ずかしそう
にしていた。

そこから、言葉は紡がれなかつたけど。僕は、なんとなく、分かつていた。

妹が新しく出来た、そんな気になりながら。僕は、雪穂の頭を空いている方の手で撫
でる。

「んう」

くすぐったそうに、声を漏らす。艶やかな赤銅色の髪の毛が、緩やかに流れていく。

髪の一つ一つが、光沢を放っていて。柔らかいけれども、しつかりとした。そんな手
触りがした。

指で少し、髪の毛を押すと、優しく返ってくる。小豆の様な、そんな甘い匂いがする。
このまま、時間も忘れて触れて居たくなってしまうくなる。両方の感触が、僕の心

を刺激する。

このままじゃ、変な目で見られてしまう。

「つと、じゃ次行こっか」

と言つて。無理矢理、僕の心に言い聞かせるようにする。二人の顔を見れなくて。何だか妹と思つていても、恥ずかしいものは恥ずかしいんだ。

立ち上がつて、籠の中からバッグを取り出す。二人のバッグも渡して、次に向かう。

次は、どうやらプリクラにするらしい。こう言う物自体、僕はあまり得意じゃない。何というか、雰囲気と言うか。

何とも言いにくいものがそこにはあつて。あまり、入らない場所だ。僕は渋々、二人に連れられる。

硬貨を投入すると、そう言えば場所決めをしていなかったと思ひ出す。

「場所はどおする？ どう並ぼうか」

「みーちゃんが真ん中で、私と亜里沙が横でいいんじゃない？」

「亜里沙も、それでいいと思います」

「ん、分かつた」

こういう時に反論してもしようがない。多数決で出てしまっている。欲を言うなら端が良かったけれど。

案内通りに進んでいく。フレームや色々なことは二人に任せる。その内、カメラのリングルが画面に映された。

「みーちゃん！ほら来て！」

「湊さん、来てください！」

「はいはい」

呼ばれて、横に並ぶようにする。ポーズはどうしようか。ピースでもいいかな。

そう思っていたら、僕の両腕を取られて。驚いている間に、シャツターのカメラは切られた。

「うお、びつくりしたなあ」

「へへへ、ごめんね。みーちゃん」

「……、はいはい」

雪穂はいつもの事として。亜里沙ちゃんまでするとは思ってなかった。

隣を見ると、若干赤い顔でにこりと笑った。

まったく、もう。無下に出来なくなるじゃないか。それから、同じようなポーズで何枚か撮られ。気分は、何だか連れられている宇宙人のようだった。

外に出て、悪戯書きのコーナーがあった。二人は思い思いに描いていく。僕も誘われたけれど、そう言うのにはセンスが無くて断った。

時間ぎりぎりまで書いている。ふと、画面を見ると。一枚だけ何も書いてないのがあった。初めに撮った物だ。

「あれ、これはいいの？」

「あ、うん。これはこれでいいの」

「……う？そっか」

良く分からないけど。良いというならいいんだろう。決定ボタンを押して、取り出し口からプリクラが落ちてくる。

それを丁寧に切り分ける。二人は手帳などに貼っていたけれども、僕は生憎あんまりなくて。一枚だけ、パソコンの外側に貼った。

そのプリクラには、仲良し三人組と書かれていて、優しく心が暖まるのを感じた。自然に笑顔が漏れてしまうのも、しょうがない事だ。

それから、UFOキャッチャーや他のゲームに目移りすることもなく。時間も丁度夕方になり、お開きとなった。

僕は、外に出る。ふと、思い出すことがあった。パソコン用の外部記憶媒体が欲しかったことだ。

「ああ、そう言えば。僕は買い物しに行くけど、どうする？ここで別れちゃうかい？」
「どこに行くんですか？」

「えーと、秋葉原駅の近くなんだけど」

「ここから、帰り道と逆方向ね」

雪穂が言ったとおり、丁度僕が目指してる場所は逆側で。二人の家はここから近かった筈だ。

そうなると、帰った方が速い。それに遅くなってしまう。

「じゃあ、私達はここで帰るよ」

「そっか。了解」

「あ、湊さん！ちよつと待つてくさいね」

僕を呼び止める。雪穂と亜里沙ちゃんが、二人で袋の中から出して、何かを入れていた。

何だろうか。気になる。

数秒もしないうちに、二人から手渡される。キーホルダーだった。中にはさつき撮った、落書きのしていないプリクラがあった。

「これ、さつきの」

「うん。今日一日のお礼！みーちゃんにはいつもお願い聞いてもらってるしね」

「それで、雪穂と話し合って。亜里沙達のお礼として渡すことにしたんです」

「うう、いい奴らめ。僕の財布の紐がどんどん緩くなつて行くじゃないかあ」

二人を撫でる。本当に良い娘たちだ。撫でる力も優しく、けれども少し激しくなってしまう。

ちよつとばかり、潤んだのは内緒だ。ぽんぽんと、頭を優しく叩いて、お礼を言う。

「ありがと。これ大事にするよ」

「うんうん。それじゃあね」

「また、今度！」

二人が手を振って歩いていく。僕はキーホルダーをカバンの中に仕舞う。これは家で飾る予定だ。

そのまま、僕は家電量販店へと向かっていく。今日が良い日であったと思いながら。

そう、思っていたはずなのに。

僕と、変わってしまう世界。

軽快な電子音のテーマソングが店で流れる。同じフレーズを繰り返すうちに、聞きなれてしまったようだ。

特に何も思わなくなる。耳の中に、馴染んで行くように。自然と、頭の中にフレーズが残って居く。

聞き返せば聞き返すほど、それは頭の片隅に追いやられていくかのように。

音楽としてではなくて、そこに自然に存在するものとして定着していく。

要するに。外に出ると、軽快な音が耳から離れて、今まで感じなかつた喧騒が耳に入ってきて。

外の街の独特な空気が、僕の肺へと入り込んで。深い海に潜っていくかのように、喧騒に溶け込んでいく。

人々のそれぞれの歩きの速さに、合わせることなく歩いていく。交差点に差し掛かり、歩行用信号が赤へと移り変わる。

ふと、空を見る。雨雲が空一面を覆っていた。幾つもの雨雲が、重なり合い、ひしめき合う。

まるで、空のキャンパスに幾つも色を塗り重ねるように。光さえも遮断してしまいうで。

息が詰まりそうな、そんな気がしてしまふ。不思議と、そう思った。

風が吹く。風の中に、雨の匂いがした。

雨が、降りそうだ。多分、いや絶対に。

買ったばかりの外部記憶媒体を濡らしたくはない。

幸い折り畳み傘は持ってきていたけれど、それでもなるべくなら濡れたくはない。

信号から、青に変わった音が聞こえる。それにより、僕の遠くに消えてしまっていた意識は、戻されて。

また喧騒の中へと消えていく。紛れ込むかのようにして。

歩き始めて、少し。なんとなく見ていた街並みに、思い起こす物があつた。

そう言えば、穂乃果ねえが言っていたような。μ、sのグッズが有ったとか。多分。

確か、ここを曲がって、ピンク色の看板が目印だったかな。

記憶通りに道を進んでいくと、ガシャポンが多く配置されている店先が見えた。

近付いてみると、聞いた覚えのあるスクールアイドルの曲が流れている。プロマイドに、グッズ。目を見張るような品揃えだった。

店へと入る。“いらっしやいませー”と言ひ慣れた声が、奥のレジから聞こえた。

聞こえたほうに顔を向けると、ネームプレートに店長と書かれた男が、スクールアイドルであろうPVを見ていた。

それを横目に見つつ、中へと入っていく。確か、少し奥の方に人気急上昇中って書かれてたとか言ってたはず。

色々な所に目を向けつつ、探していく。少し歩くと、すぐにμsのコーナーを見つけることが出来た。

しかし、聞いていた話より大きくなっていた。ポータブルDVDにはμsのPVが流れ。簡単な説明書きとともに、色々なグッズが置いてあった。

目を見張るほどと言っても、過言ではないかのように。

ふと、グッズに書かれている画像はどこから何だろうと、思ってしまっただけ。考えても仕方ない事だった。

一つ一つ、手に取って見ていく。どれもこれも、すっかりと出来ていた。

何か買っていこうか。折角だし、買わないのも何だか損だ。

ふと、品定めをしていると。目に付く物があつた。缶バッジだ。人数別に分けてあるそれは、僕には魅力的に思えて。

手を伸ばそうとした、触れる直前。脳裏に過ぎる。誰を買うべきなのかと言うことに。

手を引っ込めて、考える。果たして、どうしたら良いのだろうか。どれか一つ買えば、選ばれなかった皆に、何だか悪い気もするし。

だけでも、しかし。人数分買うとなると、僕の財布にも決して軽傷ではない傷を負うわけ。

天秤が揺れ動く。僕の財政事情か、僕の良心が痛むのか。

すぐに、答えは出てしまうけども。

両手には、全員分の缶バッチがあつて。

僕の財布は段々と、軽くなつていく運命だった。

それも、しょうがない事か。と、納得させる。

レジに向かつて歩く。他の商品も、色々あるけれど。やはり、A—R—I—S—Eが一番大きいだろうか。

遠目で見ただけでも、分かつてしまうほどに。

唇を、少し噛む。分かっている。やはり、壁は大きい。横目に、見つ。レジに商品を出した。

「お、君も、s好きなの？」

「え？」

声を掛けられて、少し心臓が跳ねる。

声の源は、目の前のレジの店長と書かれた人だった。

人当たりのよさそうな顔で、僕を見ていた。

「いや、ほら。最近々、sが人気だからね。お客さんもそうなのかなって」

「あ、ああ。そうですね。好きです」

「おお、やっぱり。自分もねー、好きなんだよ。最近はA—R—I—S—Eしか目立たなかったけど、ついに強力なアイドルグループ登場！みたいなね」

「そう、なんですか。やっぱり、A—R—I—S—Eは凄いですね」

「うん、そりゃあね。スクールアイドルの金字塔みたいな。でも、やっぱり、違うんだよね」

「……違う？」

引っかかる。違うとは何だろう。違う点なんてあつただろうか。

少し考えたけれど、分からなかった。

「何でしょうか、それは」

「それはね、元気を感ずるって事さ」

「元、気？」

「そう。僕らがスクールアイドルが好きなのはさ。やっぱり、学生ならではの初々しさや元気なんだよね。誰も完璧だとか、クオリティが高いとか求めてないんだと思うん

だ」

言葉が、雨の様に僕に降りかかる。

まるで僕の中に染み込んでいくような錯覚さえ覚えた。

ああ、きつと。僕が悩んでいたのは、この事で。何かを掴めそうな気がする。

それは、僕にとつて。とてもとても大事なことなんだろう。

「μ、sのPVを見てるとね。僕らでさえも何だか、学生の頃の元気が戻ってきた気がするんだ。勿論、苦労とかいろいろあるんだろうけどね。不思議に、そう思うんだ」

「……」

「きつと。どこかに、アイドルとしてじゃなくて。学生だって事も残ってる気がして。

僕らは、まるで客としてじゃなくて。僕らも同じ学生なんだって思っちゃうぐらい、そう感じてさ」

「……ええ」

「それで、応援したくなるんだよ」

「そう、ですか」

求めていたことが。僕が必死になろうとしていたことは。きつと彼女達の良さを消してしまうことだ。

僕が、完璧を求めれば求めるほど。

自分の手で、彼女達を殺していることになっていて。

A—R—I—S—Eに匹敵するような出来を求めれば求めるほど。

μ、sと言うグループは、壊滅していく。

僕は、どうしていいか分からない。僕が作り上げようとしていたのは、僕が見ようとしていたのは。

誰かの、二番煎じなんだ。

「あー、……悪いね。何だかこんなに喋ることじゃなかったかな」

「いえ。とても……、聞きごたえのあることでした」

「そう、かい？ならいいんだけどね」

缶バッチ一つ一つをレジに通していく。金額が表示されていく。

僕は、その数字を見ていく。考えがまとまらない。

「ああ、そう言えば。君は誰推し何だい？」

「え？」

「ほら。グループの中でも誰が好きとかあるだろう？」

「ああ。ええと」

今まで、頭の中に住んでいた考えを、置いて考える。

浮かばない。正確には、誰かと言う個人が浮かぶことがない。そのような概念で見た

ことが無いからだろうか。

皆が皆、僕にとつては大切に。誰かを色眼鏡でなんて見たことない。答えようがなかった。

「そう、ですね……」

「もしかして、最近興味持った感じかな？」

「え、ああ。そうです」

「そっか。まあ、全員分の缶バッジ買ってるからさ。多分そうなのかなって思ってたんだよね」

にこりと笑いかける。慣れた手つきで袋に詰めていく。

チラシを一枚袋に入れていた。どうやら二号店のお知らせらしい。

「あの、店長さんはどうなんですか？」

「ん？僕の推しかい？」

「ええ。何だか気になって」

「僕はね、穂乃果ちゃんかな。彼女は、何だか不思議な雰囲気があつてね」

「へえ」

「そうだろうか。近くにいたから気付かないのか。それとも、気付くことも出来なかったのか。」

聞いていて、何だか新しく発見をしたような気になる。

「こう、笑顔になるといふか。見ていてこっちも楽しくなるような、ね」

少し、刺されたような痛みが走る。僕の体に、少し異常が走りだす。

それでも、気にすることはなかった。

袋詰めが終わり、微笑を浮かべたまま袋を渡される。

「はい。また寄つてね。今度は誰推しなのかも聞きたいな」

「ええ、機会があれば」

会釈をして、袋を持ち。外に出る。外はまだ、雨は降りだしていなかった。

段々と、雲行きは怪しくなっていたが。さあ、帰ろう。雨に降られたくはない。

袋を鞆に入れようとする。ふと、聞き覚えのある声が耳に届く。

目線を声の方に向けて。穂乃果ねえ達九人が、すぐ隣にいた。どうやら、僕には気

付いていないみたいで。グッズが増えている、と会話をしていた。

声をかけようとする。瞬間。高校生かと思われる、男性三人組が話しかけていた。

少し、様子を見る。気になってしまう。なんとなく、いや、とても。断片的な会話の

節しか聞こえてこない。

制服を見るに、少し離れたところの制服だろうか。あまり見たことはなかった。

……。どうやら、μsのファンらしい。穂乃果ねえ達も、僕が見たことのない笑顔

で接している。

僕が、見たことのないような。

その言葉に、僕は激しくめまいを覚える。

ああ、やめてくれ。気付かないでいたのに。

激しく僕の心を揺さぶる。まるで不協和音の様に、不快になっていく。僕は僕のが崩れていくのがわかる。

『アイドル』として振る舞っている姿に、目を背けてしまいたくなるのも。

笑顔で、握手をしている皆を見ると。僕の居場所がなくなったように感じるのも。

店長の推しの話を聞いて、痛みが走ったのも。

全て、全て。僕が、彼女たちに。

アイドルとしてではなくて、彼女達と言う存在に。

——依存、していたなんて。

先に行ってしまう彼女たちに。アイドルとして僕から遠のいて行ってしまいう事に。

僕は、底知れぬ恐怖さえ感じた。

僕はその場にいられず。走っていく。何も聞こえない。何も見えない。何も聞きたくない。何も見たくない。

ここにいる事さえも、ただ苦痛のように感じて。ただ走っていく。目に見えない暗闇の帳が僕を飲み込んでいく。

ただ感じるのは。僕に降り注ぐ雨で。それでも、走り続ける。

気付けば、家の前にいて。何も思えないほど、僕と言うキャンパスは黒く塗りつぶされていた。

扉を開けて、玄関に座り込む。自然と、口から言葉が漏れる。

「……。ああ、ほんと。馬鹿みたいだ」

彼女達がスクールアイドルになると言っていた時から気付いていたのに。気付かないふりをして。

自分を誤魔化し続けて。長くないなんて思えば直ぐなのに。

髪から、水滴が流れ落ちる。目尻を通って、僕の涙を流していく。

きっと、置いて行ってしまおうだろう。また。何もできないまま、置いてかれて。

もう、どうしようもないんだ。だから、僕は。

どこかで、紙を破いた音が聞こえた。